

新しい家庭科

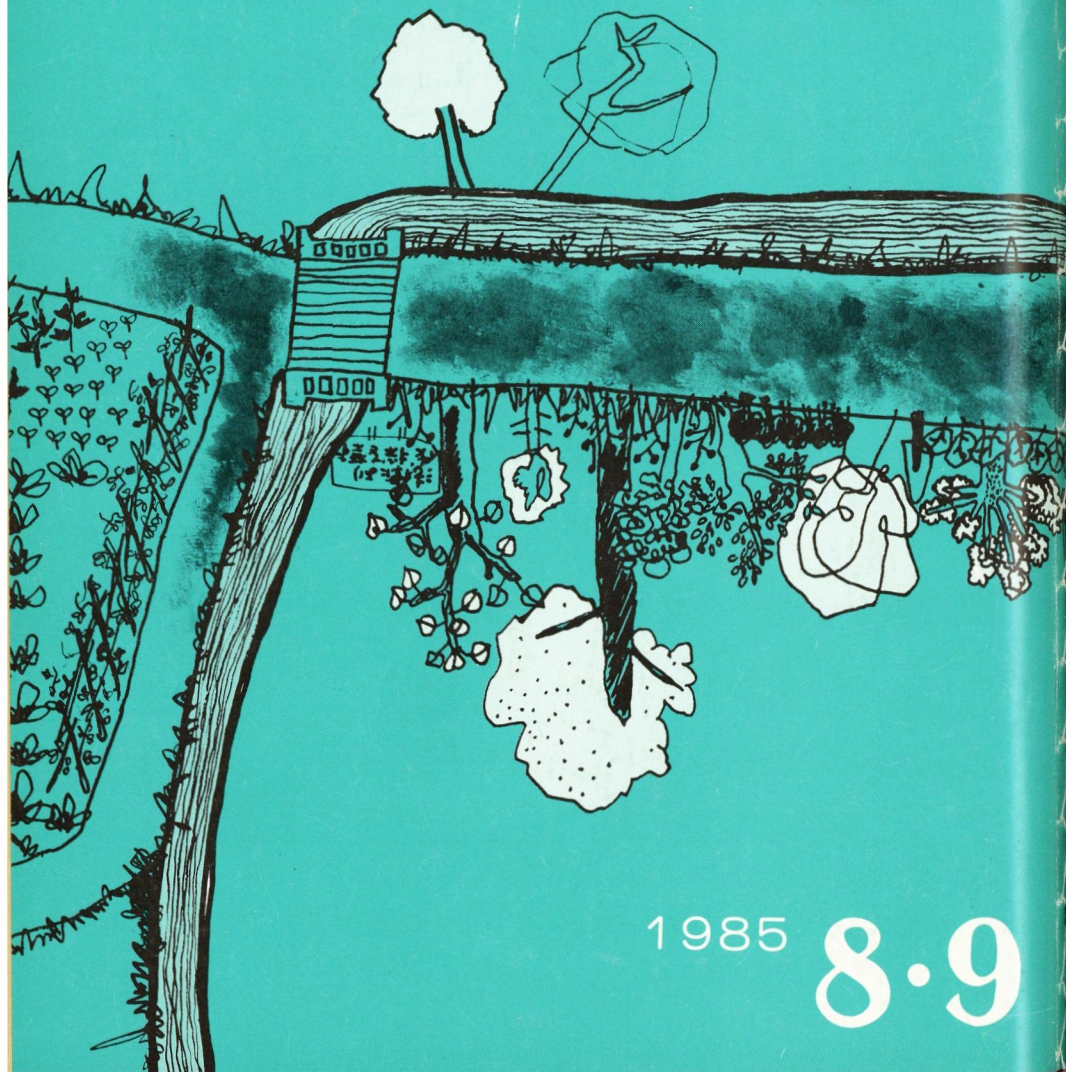
わい

法律と私たち

逐次刊行物

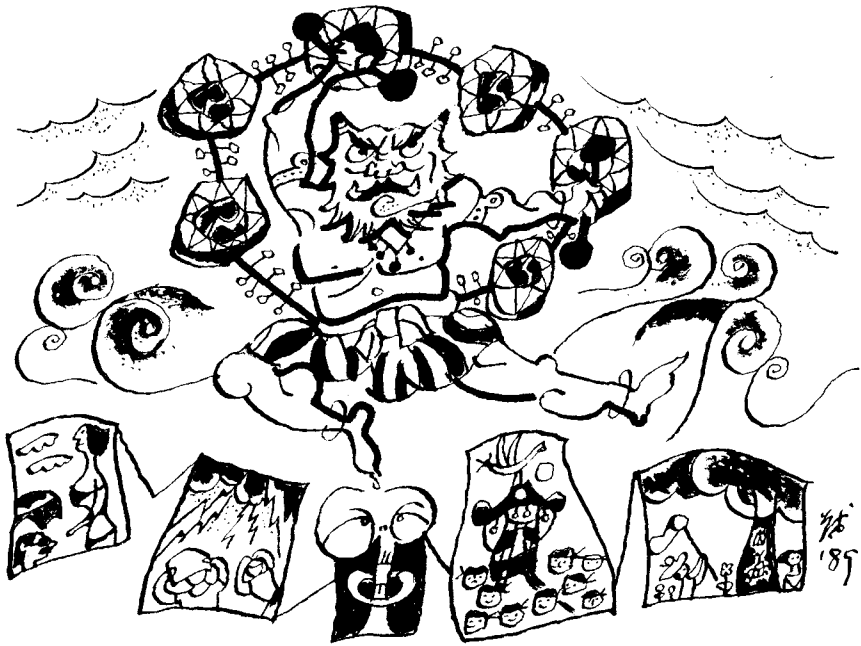
昭 60.7.18 和

国立婦人教育会館
情報図書室



1985 8・9

遊びの風物詩



カミナリは人間のきらわれものだ、あのゴ
ゴゴは戦争中の爆弾の音と似て不安になる。
こどもの頃は蚊帳の中に入って耳をふさい
だものだ。現代ではそんな姿は見られな
いし又聞いたこともない、落語のはなしの中
にあるかも知れない。

雷神は宗達の風神雷神が有名である。水神
であるがいつのまにか鬼の姿になり、なんと
なくユーモラスである。

夏は人間の遊びの季節です。特にこどもが
楽しく遊べる夏休み、又日本の不幸な戦争の
終わったのも夏です。

(田沢 茂)

法的思考と女性―自立と倅せを願うあなたへ―

中 谷 瑾 子

女性に限らず、法律と聞いただけでアレルギ―反応をおこす人は少なくないのですが、私たちの日常生活は、朝から晩まで何らかの形で法規制の下にあるといつても過言ではありません。向う三軒両隣りが平穩無事である限り、ふつう法律の存在など気にしないですむのですが、一旦コトがおければ、自分の権利はどうなっているのか、その権利を実現する方法はどうか、など、すべて法の規定に頼らなければなりません。昭和二十年代に夫の死後、舅に犯され、乳呑子がいるのに青線で働かされ、しかもたえず関係の継続を強要され、たまりかねて、母子の倅せのためにこの男を殺して、尊属殺で起訴された女性がいました。しかし、民法の規定によれば、配偶者が死亡した後は、死き残った者の一方的な意思で姻族関係を終了させ、非道の姻族とはア力の他人になれるのです（民七二八条三項）。この人もこの規定を知つてさえいれば、こんな破局まで追いつめられずにすんだのではないかと胸が痛みます。法律を知つていれば泣き寝入りをしないうですむことはたくさんあるのです。ただ法律問題を考えるときは、自分の他に相手方、利害関係人、さらには全く関係のない第三者までも視野に入れて合理的な判断をすることが要求されます。このような複眼的かつ論理的思考は、ともすれば主観的で情愛にのめり込みがちな女性に客観性と合理性を与え、その自立と倅せを握ることにつながるように私には思われてならないのです。そのためにどうかくわず嫌いてはなく、楽しみながら法律を勉強していただきたいものです。

（慶心義塾大学）

***** 法律と私たち *****

〈巻頭言〉法的思考と女性……………中谷 瑤子

❀ 特 集 ❀

✓人間の解放と法律……………	金城 清子	4
✓夫婦関係と法律……………	増本 敏子	9
し親子関係と法律……………	神谷咸吉郎	14
し消費生活と法律……………	加藤 真代	19

❀ 発 言 ❀

学習の主人公たち 法律ってなんだ

大阪府立高津高等学校の生徒たち ……………52

映画「指紋押捺拒否」を見て

横浜市立〇中学校3年生の子どもたち ……………54

家庭科を学んで（2）

大阪府立泉尾高等学校の生徒たち……………56

指紋押捺を拒否して……………蔡 和美 58

法律と私たち……………富岡恵美子 60

蔡和美さんを支援しよう！……………川名はつ子 61

『傷つく権利』……………内村章一郎 62

沖縄反戦ツアーに参加して……………横山れいこ 64



○情報1 差別撤廃条約批准の現在も、女子必修を維持しようとする校長会 78
 ○波 2 女性民教書、臨教書第一次答申に關して見解を發表 80
 ○夏季フォーラム実行委員会から読者の方へ 29
 ○波 コロボックルの山で 半田たつ子 84
 ○ひと 稲邑恭子さん 24

❀ 新しい家庭科を創るために ❀

小学校では	家庭・社会への協力と参加をめざして・野原 春江	25
中学校では	私の原点と家庭科……………森 陽子	30
高等学校では	男女共修の実施に向けて…森 幸枝	35
家庭科の新しい役割—民衆の生活文化復権の場として	5	
	……………小沢 有作	42

❀ 連 載 ❀

遊びの風物詩	……………田沢 茂	
教室の窓	「学校道德」つてなんだ……………植垣 一彦	46
カウンセリングの応用 —現場から—	「開示する」その1 …………… 児玉すみ子	48
露通信	続・ピレモンとパウキス…武田 秀夫	50
男の台所	豚肉とシソの炒め和え……………高瀬 斉	70
土	立てば芍薬の話……………五十嵐愛子	72
政治の目	選挙・議会のありようと一票の平等 ……宮本なおみ	73
フェミニスト・テレビ考	食のファッション化の演出 ……鈴木みどり	74
Weのブックランド	大衆消費社会のお伽の国…長谷川公一	75
フウフウフウふうふ	多数派の暴力……………ウツのみや	67
思えば思われる物語	田舎町横芝へ……………丸山 光子	76
子どもって……	みんな一緒に遊ぶこと……………稲邑 恭子	77

* * *

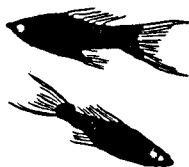
Weのレポート	葵さんの指紋押捺拒否に同席して ……馬場 洋子	81
---------	-------------------------	----

○ "We" EDITOR'S NOTE 96 ○アンテナ 94 ○十字路 92
 ○この号をよむために 82

人間の解放と法律

男と女のやさしい関係をめぐって

金城 清子



〈男と女のやさしい関係〉

ボーボワールは、「男性の本当のすばらしさをもっともよく理解できるのは女性である」という意味のことをいっています。性をひとつの仲立として、男と女の間で、本当に親密な、やさしい関係が成立する可能性があります。ところが現実には「結婚は男と女の戦争」（黒井千次）などともいわれています。やさしい関係であるはずの、男と女の自然な関係を困難にしているのは何であるかを、性をめぐる法律規制を通して考えてみます。

〈共同経営者としての男と女〉

産業化以前の社会では、家族は生産の単位であり、男女は

生産を成功させるという共通の目的をもって生活していました。セガレーヌはフランスの農村における男女の関係を次のように紹介しています。

「伝統社会における農民夫妻は共通の目的すなわち農業を成功させるというところで結束を保っていたはずである。豊かな収穫をめざし、土地をふやしていくことこそ、夫婦がともにわかちあい、互に深い満足を感じることできた共通の動機なのである」（『妻と夫の社会史』新評論、一九八〇年）

そして性にたいする宗教的抑圧も、それほど強くなかったの、性も自然なものとして存在していたと、ミレーの『昼寝』を紹介しながら述べています。

日本でも明治以前には、農村や漁村では、わか者宿、娘宿があり、性は自由な、しかし規律ある関係だったといわれて

います。権力は、人びとを経済的には搾取していましたが、男と女の関係までは管理の対象とはしていませんでした。苦しい生活のなかで、いや苦しければなお、男女は力を合わせて生きていたのです。

〈近代化とともに進化した男女の隔離と性の管理〉

遅れて近代国家への道を歩んだ日本は、富国強兵を国策として近代化の道を歩みました。その課程で、人びとの自由や生活がさまざまな形で抑圧され、犠牲にされてきました。性もそのひとつでした。それはひとつには、やさしい関係にある男と女を引き裂かなければ、男を兵士として戦争に駆り立てたり、労働者として、都市に多くの単身者を集めることは不可能だったからです。

武士階級の性のモラルを国民全体のモラルとし、男女の隔離と女性に対する差別によって、男女の間に、やさしい関係の成立する余地をなくしてしまいました。また性をセックスのみにわい小化し、男女に異なった性のモラルを課してきました。このような権力による性の管理の結果、男女はやさしさを育む基盤を失い、対立関係、抑圧関係に立つことになったのです。川島武宜氏は、戦前の軍隊での性の倫理について、次のように述べています。

「旧陸海軍においては、女子に対するつよい軽蔑感、したが

って恋愛は男子の品性にふさわしくない『女々しい』ことだとする軽蔑感、そうして単なる性欲の満足のために、売笑婦と接触することに対する寛容、という武士社会の価値観が敗戦の時までつよく支配していた。私がきいているところによると、旧海軍では、売笑婦との接触は軍人として品位をけがさないが（それは、軍人が『買う』立場にあるからだといわれる）、『しろうと』との関係は、軍人たる品位をけがすものだ（それは、軍人が『売る』立場にあるからだといわれる）、と説明され、売笑婦との接触が奨励された（恐らく半公然と）そうである」（『結婚』岩波新書、一九五四年）

男と女のやさしい関係を拒否する論理が、モラルとして形成されていきました。そして性は、極めてまずい存在におとしめられてしまいました。

〈男女で異なっていた性のモラル〉

男性の性のモラルは寛大なものでしたが、女性に対しては厳しいモラルが課されていただけではありません。刑法は、『有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下の懲役ニ処ス』（一八三条）と定めて、女性の婚姻外の性関係を犯罪として処罰していました。男性のそれは、相手が独身者である限り、不問に付していたことはいまでもありません。性モラルというプライベートな問題にまで権力は介入し、管理していたので

す。

さらに妻の婚姻外の性関係は、離婚原因となり、夫は妻と離婚することができました。ところが夫の婚姻外の性関係は離婚原因とはなりません。夫の浮気は、妻に対する「重大な侮辱」である、離婚を求めた妻の訴えを、裁判所は「日本の昔からの慣習からみて、夫がほかの女性と性関係を持ったからといって、妻を侮辱したことにはならない」といって、退けています。

このようにして戦前は、法律が男女に異なった性のモラルを課し、人びとの私的なものであるべき性を管理する役割を果たしてきました。この意味で法律は、男女のやさしい関係を阻害する制度だったことができます。

〈理念の確立としての戦後の民主改革〉

戦後制定された憲法は、法の下の平等（二四条）、家庭生活における個人の尊厳と平等（二四条）を定めました。憲法にしたがって、前述のような戦前の刑法、民法などは一切改正されました。性を個人的なものとして、姦通罪の規定は廃止され、離婚原因も男女平等なものとなりました。そして、結婚が愛情という基盤を失ってしまったときは、責任を云々することなく離婚を認めるという破綻主義を、世界の国々にさががけて採用しました。

戦後の民主改革は、女性たちから熱狂的といえる歓迎を受け、法律が語られ、男女平等を実現するための努力が積み重ねられてきました。このときの喜びをある女性は次のように書き残しています。

「なんという素晴らしさでしょう。架空の夢とは思えなかったことが現実となってそこにあります。否それ以上に、願っていた以上の目を見張るような常態がそこに展開されているのです。今まで『家』制度のためにつぶされてきた血を分けたものへの自然の愛情も、法に守られてできました。

人間的なあたたかい思いやりがいたるところに見えます。……反対も多かったでしょうに戦争がすんだばかりなのに、よくこれだけの大回転がされたものと、驚くと共に感謝ができません」（岩崎多鶴、当時四五歳、農家の嫁）

ところが、女性が経済的に自立することが不可能な状況では、性のモラルは決して男女平等なものとはなりません。婚姻外の性関係をめぐって、こんな実態が繰返されてきたのです。

『あなただって、これまで浮気をしたことがあるでしょう。』

そのとき、奥さんは許したわけではありませんか』

『男の浮気と、女の浮気は、本質的にちがいますよ。男の浮気は遊びだけど、女の浮気はそうはいかない。』

『どこが？』

『男のメンツはどうしてくれるんです。妻が夫を裏切るとは何ごとですか。』

『奥さんは、あなたの持物ではないのです。人間として感情も自由もあるのです。奥さんはあなたが浮気をなさったとき、苦しんだけど許したではありませんか。奥さんも悪かったといっているのですから、あなたの時のように許したらどうですか。』

『いや、絶対に別れます。』

性は経済の束縛によって歪められ、男女によって異なるモラルがそのまま現在にも維持されています。そして性は商品化され、セックス産業が隆盛を極めていきます。さらに性は、企業のために妻とのやさしい関係を犠牲にしてまで奉仕しなければならぬ環境におかれた産業の戦士たちが、ストレスを解消する手段として、功名に利用されてきました。このような状況の中で、性は女にとってばかりでなく、男にとっても又、やさしい関係を育む仲立ちとはなっていないことがわかります。

〈女性の保護という名目での管理〉

男女の経済的な格差は、女性を保護するという名目の下に、夫婦の關係に国が介入する道を開くことになりました。破綻状態にある婚姻でも、その破綻の原因をつくった側から

の離婚請求は認めないという原則が、破綻主義の完全な適用を制限してきました。

いっばんに有責配偶者の離婚請求は認めないという法理ですが、これは『踏んだり蹴ったり』判決と呼ばれている最高裁判決によって、一九五二年に明らかにされて以来、現在もそのまま維持されています。

この事件は、妻（A）がありながら他の女性と親しくなり、妻のもとを出てその女性と同居し、子供も生まれた男性（B）が、妻に対して『婚姻を継続し難い重大な事由がある』として、離婚をもとめたものです。裁判所は次のように述べて離婚を認めませんでした。

『……婚姻関係を継続し難いのはBが妻たるAを差し置いて他に情婦を有するからである。Bさえ情婦との関係を解消し、よき夫としてAのもとに帰り来るならば、何時でも夫婦関係は円満に継続し得べき筈である。……』

Bはこの感情は既にBの意思をもってしても、いかんともすることが出来ないものであるということかも知れないけれども、それは所詮Bのわがままである。結局Bが勝手に情婦を持ち、そのためもはやAとは同棲できないから、これを追い出すということに帰着するのであって、もしかかる請求が是認されるならば、Aは全く俗にいう踏んだり蹴ったりである。法はかくのごとき不徳義勝手気儘を許すものではない。

……』(裁判昭和二七・二・一九民集六・二・一一〇)

愛情を基礎とした結婚を前提とする現代でも、有責配偶者の離婚請求を制限する根拠のひとつは、経済的に自立できない女性を、離婚を許さないことによって保護していこうということです。その結果新しく形成された男女の関係は犠牲にしてもやむをえないとしているのです。

〈性を入びとのものに取り戻すために〉

高度経済成長を経て、いっけん豊かな生活を享受しているかにみえる私たちの生活。性に焦点をあてて検討してみると、本来個人的かつ自然な関係であるべき男と女の関係ですら、ガッチリと管理されていることがわかります。性のモラルについては国家は介入せず、また人びとが性を自分自身のものとして取り戻していくことが、やさしい男女の関係を作り上げていくためには大切なことでしょう。

ところでライヒは、男女の間でやさしい関係が成立するためには、性の抑圧を排除すること、男女が互に尊敬しあい精神的な交わりをもちうること、女性も経済的に自立することによって経済が性の関係を歪めることがないなどを挙げています。現状では多くの関係に、このような条件が残念ながら、欠けているといわざるをえないでしょう。そしてそれは、女性に対する差別の必然的な結果であるといえましょう。

男女の平等を実現していくところ、男と女のやさしい関係を可能にする基盤なのです。

国は、女性を弱者として保護しなければならぬ現状を、教育・雇用・社会保障などでの平等を実現することによって、女性を弱者として保護する必要のない社会を形成していくために努力していく責任があります。そして女子差別撤廃条約も、そのような方向をめざしているのです。

法律はこれまで、人間の解放を抑圧する制度でありました。しかし人間を解放するための手段ともなりうるものです。そのために法律や制度はどのようなものでなければならぬかについて、ここでは詳しく触れることはできません。拙著『法女性学のすすめ』(有斐閣)、『家族という関係』(岩波新書)を参考にしてください。

(きんじょうきよこ・東京家政大学)

夫婦関係と法律

増 本 敏 子



一、夫婦とは？

(一) 法律上の夫婦と内縁の夫婦

一般に結婚している一組の男女を夫婦と呼びます。でも結婚とは何か、夫婦とは何か、正確に答えるのは難しいのです。時代により、地域により、そのイメージも要求される条件も違ってきます。たとえば、継続的・固定的な性の関係、同居や協同生活、子供の有無、結婚式など公への披露、親族の承認、戸籍など公への届出、これらのうちのどれが必要条件なのでしょう。又、一対一のペアでなければいけないのか、重婚は許されるのか、再婚は許されるのか。異性だけでなく同性どうしではだめなのか、等々社会によって容認される夫婦の形態も変化しています。そこで本稿では、現在の

わが国において法律で夫婦をどうとらえているかを考えてみます。

近代国家では、結婚について法律上の要件や手続きを定めこれに基づいて結婚した夫婦を法律上の夫婦として法の保護を与えているのが普通です。わが国の民法では結婚を婚姻と呼んで、婚姻成立の要件を定めています。その要件の第一は当事者二人の自由な意思に基づいて婚姻届出をすることです。第二の要件は婚姻を認めないいくつかの事由に該当しないことです。こうして届出を受理されると法律上の夫婦になります。届出を出さないとき、届出が受理されないときに、夫婦としての他の外観を備えていればこれを内縁の夫婦と呼びます。婚姻届出が普及して内縁の夫婦はずいぶん減少しましたが、最近はや新しい夫婦のあり方を追求して届出をしな

い男女もふえています。内縁の夫婦に対しても、なるべく法律上の夫婦と同様の法的保護を与えようとの努力がはらわれていますが、子供の戸籍や相続に関しては決定的な差があります。

(二) 婚姻することのできない場合

民法は次の場合に婚姻を認めず、婚姻届出は受理されません。①婚姻最低年齢（男十八歳・女十六歳）に達していないとき。達していても成年年齢（二十歳）以下であって、父母の一方の同意さえない場合。②すでに配偶者のある者（重婚の禁止）③前婚の解消・取消の日から六ヶ月を経過していない女性（再婚禁止期間、但し出産後は例外）③直系血族、三親等内の傍系血族、直系姻族、養親子関係（配偶者を含む）など近親婚の禁止。

これらのうち婚姻年齢に男女差のあるのは、男性にのみ社会的成熟度を要求している、親の同意による結婚などおかしいとの批判があります。又女にのみ要求される再婚禁止期間や姻族関係終了後の姻族、養親子の配偶者間などにおける倫理的色彩の強い婚姻禁止を見直そうとの意見もあります。

二、婚姻の効果（法律上夫婦となるとどうなるか）

(一) 入籍と氏

わが国は整備された戸籍制度をとる国で、原則として日本

人は誰でも戸籍に記載されています。そしてこの戸籍は、法律上の夫婦とその間に生じた未婚の子供を一家族として、一家族一戸籍です。結婚すれば親の戸籍を出て新しい夫婦が一戸籍を作ります。例外的に結婚しなくとも子を生んだ女は、親の戸籍を出て子と共に母子で一戸籍つくります。しかも一戸籍は同じ氏で統一しており、一人代表者を作ってこれを筆頭者と呼んでいます。そのため結婚届出をするということとは、新戸籍を一つ作るということであり、一つの氏を決めねばなりません。民法は、夫婦は婚姻の際定めるところに従って夫又は妻の氏を称すると定めています。つまり新しい氏を創設するのではなく、従来のどちらかの氏を選ぶわけです。

この制度についても、改氏を一方に強要するものであって、事実上女性が改氏を迫られる場合が多いという強い批判があります。

(二) 婚姻関係の発生

婚姻の相手方（配偶者という）の血族を姻族と呼びます。そして民法は、六親等内の血族と三親等内の姻族と配偶者をひっくるめて親族と呼び、直系血族及び同居の親族は互に扶け合わなければならぬと定めています。この親族という考え方に対しては、旧民法の家族制度のなごりであるとの批判があります。ただ現民法では姻族について具体的な法律関係をほとんど規定していません。

(三) 子が嫡出子として認められる

法律上の夫婦間の子は（婚姻成立の前後に妻が出産した場合を含む）、嫡出子として、父母と同一の戸籍に記入され、同じ氏を称します。内縁の夫婦の場合は、母の戸籍に入り父が認知するしかなく、父の財産を相続するとき、嫡出子に比べて認知だけされている子は二分の一の相続分しかありません。子供自身には何の罪もないのだからこんな差別はおかしいという批判が強いのですが、法改正はまだされていません。

又養子縁組をするとき、法律上の夫婦は養親となる場合も養子となる場合も、夫婦一緒になければ届出が受理されません。養子制度についても、新たな検討を加える時期にきています。

(四) 配偶者としての相続権の発生

配偶者が死亡したとき、残された配偶者は必ず相続人になります。しかし一人であるのではなく、原則として死亡した人の血族と相続財産を分けあうのです。血族には順位があつて、子（及び子の代襲相続人）があれば子が平等に、子がなければ親、子も親もなければ兄弟姉妹と決まっています。そして配偶者はペアをくむ相手によって相続する分量が異なります。但し死亡した人の遺言があれば、原則として遺言が優先します。遺言のない場合の分量を法定相続分といいますが、

昭和五五年の改正によって、配偶者の法定相続分は従前より多くなりました。尚内縁の場合は、遺言による他、相続人となることができません。

(五) 夫婦間の法律関係の発生

同居して協力し扶助しあう責任、日常の財産上の権利義務、夫婦関係を解消する場合の責任、子を監護養育する責任などがあります。これらについては次項で考えてみましょう。

三、法律で定められた夫婦のありかた

(一) 憲法の精神

憲法二四条は次のように宣言しています。

①婚姻は両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として相互の協力により維持されなければならない。

②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して制定されなければならない。

女子差別撤廃条約の条文と比較してみても、この憲法の文言は今なお輝きを失っていません。当時（昭和二年五月三日施行）世界大戦での敗戦という大きな出来事の後とはいえ、このような規定はわが国の歴史始まって以来の画期的なもの

でした。それまでの大日本帝国憲法が、天皇の統治と法律の範圍内での臣民の權利義務を定め、民法では戸主による家族の統治と妻の夫への隸屬を定めていたのですから、まさに一八〇度の転換で、当時の国民に大きな衝撃を与えました。そしてこの憲法の精神に基づいて民法の親族・相続編が大改正されたわけです（昭和二三年一月一日より施行）。民法は憲法の精神に添っていますが、当時の国会議員の水準や国民感情から、充分に改革しきれなかった部分もあります。女子差別撤廃条約の批准に伴う国内法整備の中で、見直してゆきたいものです。

それにしても憲法や民法の大改正から四十年近い年月が流れました。その四十年近い年月は、夫婦のあり方について言えば、それまで長い間生活のすみずみまで根をはってきた封建思想や、男尊女卑の慣習と憲法や民法の掲げる新しい理念との闘いの日々だったとも言えます。

(二)同居・協力・扶助の義務

民法は夫婦のあり方について、夫婦は同居し、互に協力し扶助しなければならないと定めています。又裁判上の離婚事由から、夫婦は互いに貞操を守る義務があることが推察されます。他の国の新しい民法の中には、夫婦共に収入を得て働く權利義務を唱ったり、これに対する協力義務を命じたりしているものもあります。

夫婦の扶助しあう義務というのは、親族間の扶け合いや、直系血族や兄弟姉妹間の扶養義務と比較して、より強いものとされています。たとえば一片のパンも分け合うような、自分と同程度の生活水準を保障しあうものといわれています。同居の義務については、近年単身赴任や合意の上の別居結婚もあり再検討の時期にきているともいえます。

(三)夫婦の財産関係

財産に関しては、夫婦も別々に自分名義の財産をもち収入を得て、別々に税金を納めます。しかし共同生活者としての特殊性から、民法は原則を次のように定めています。

①夫婦はその資産・収入その他一切の事情を考慮して婚姻から生ずる費用を分担する。

②夫婦の一方が日常の家事に関して第三者と法律行為をしたときは、他の一方はこれによって生じた債務について連帯してその責に任ずる。但し第三者に対し責に任じない旨を予告した場合はこの限りでない。

③夫婦の一方が婚姻前から有する財産及び婚姻中自己の名で得た財産はその特有財産とする。夫婦のいずれに属するか明かでない財産はその共有に属するものと推定する。

夫婦が平穩に生活しているときは、こういう財産関係を頭に浮かべる必要ありません。しかし借金の取り立てにあったり、不仲になって別居したり、一方が死亡して相続問題がお

きたときなどに表面化してきます。相手がローンで購入した衣類やステレオなどについて、配偶者に業者から支払請求があったとき支払義務があるか否かなど具体的には難しい問題です。尚、婚姻届出の前に夫婦間で夫婦の財産関係についての原則と違つたとりきめをすることもできます。しかしこの場合は婚姻届出前にその旨を登記しなければ第三者にこれを主張することはできません。

四、夫婦関係の終了

(一) 配偶者の死亡

配偶者が死亡したとき、民法は生存配偶者の意思によって婚姻前の氏に復するか否か、姻族関係を終了させるか否かを選択できるように定めています。旧民法の家制度の影響の残っている規定という批判があります。

相続が始まることは前述の通りです。又子供の親権は父母共同親権から生存配偶者の単独親権に移ります。

(二) 離婚による夫婦関係の解消

姻族関係は終了します。婚姻によって氏を改めた者が婚姻前の氏に復するという原則に対して、昭和五年の改正によって届出をすれば復氏しなくともよいという例外が認められました。これにより改氏をくりかえす不利が減少したのは喜ばしいことです。

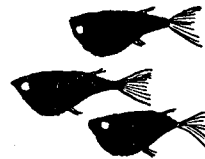
離婚によって子供は一方の親に監護され、単独親権となります。子供の戸籍は原則として婚姻時に改氏しなかった方の親の戸籍に残ります。子の養育費用は双方の負担責任がありますが、国が強制的に養育費を支払わせる制度がないため、離婚して養育費を払わない親も多いのが現実です。

離婚によって夫婦の財産や借金をどう分けるか。これは夫婦で決めることですが、財産分与の請求や慰謝料の請求が認められています。わが国は協議離婚の認められている国ですので、合意の上であれば、子供の親権者さえきめれば他は何もきめずに離婚できます。そのかわり、合意がなければ、家庭裁判所の調停にもちこみ、それでも合意を得られなければ民事裁判をおこなねばならず、裁判で離婚判決を得るには法定の離婚原因がなければなりません。又自分で離婚原因（たとえば不貞行為）を作った配偶者からの離婚請求は、ほとんど認められません。そのため夫婦関係が冷えきって長年別居していても、離婚を拒否する例も多いのです。世界的傾向としては、一方が離婚を切実に望む場合はすでに婚姻関係は破綻しているとみて離婚を認め、子供の養育問題に関してだけは国が強制的に介入するという方向にあります。夫婦双方の自立が進み、男女関係が自由になるにつれて、わが国でもこういう傾向になっていくものと思われまます。

（ますもととしこ・弁護士）

親子関係と法律

神谷 咸吉郎



一、はじめに

本来、親が子を育て、面倒をみるのは、人間としての自然の理であり、本能ともいえましよう。どのような社会・民族でもこのことは共通です。ところが親と子の法律制度は、民族や時代によってかなり違いがみられます。日本の法律も、明治憲法の下では「家と親」のためのものでした。しかし戦後は憲法で個人の尊重（一三条）と法の下での平等（一四条）をうたい、家族生活を規律する法律は個人の尊厳と両性の平等に立脚するよう（二四条）規定されました。家族生活とりわけ親子の関係の法律は民法をはじめ改正を余儀なくされました。

二、親子とは

明治憲法下では、家や親のため、継親子や嫡母・庶子の関係も親子とされていましたが、実親子と養親子だけが法律上の親子となりました。

（一）実親子 実子には、婚姻関係にある父母の間に生まれた子を嫡出子、婚姻関係にない父母の間に生まれた子を非嫡出子といい、嫡出子にも嫡出の推定をうける子とうけない子とがあります。

（二）推定をうける嫡出子 嫡出子であるためには、母が妻であること、婚姻中に懐胎し、夫の子であることが必要です。

しかし立証は大変難しいので、民法では、婚姻成立の日から二〇〇日後、または「婚姻の解消もしくは取消」の日から三

○日以内に生まれた子は、婚姻継続中に懐胎したものと推定し（七七二条）、その上で妻が婚姻継続中に懐胎した子は夫の子と推定する（七七二条一項）と、このような二段の推定規定をおいています。嫡出子とは夫の子でない場合、夫が推定をくつがえすためには、嫡出子否認の訴（七五四、七七五条）を子の出生を知った時から一年以内に提起しなければなりません（七七七条）。一年以内というのは父子関係にない子どもを不安定な身分関係に長いこと放っておくことは好ましくないからです。

(2) 推定をうけない嫡出子 内縁の夫婦が婚姻届をしても婚姻成立後二〇日以内に生まれた子は、嫡出子の推定をうけません。実際、夫婦間の子であることが明らかな場合、このような子を、推定をうけない嫡出子といいます。

なお、夫の子でありえないことが明らかな場合、例えば夫が長期不在、生死不明、受刑服役、別居、性交不能、生殖不能のような事情のもとで生まれた子は、戸籍上嫡出子として記載されても、判例や先例では嫡出子の推定をうけない子として扱うようになってきています。

(3) 非嫡出子 婚姻外で生まれた子は、分娩という事実によって、母子関係は発生します。氏は母の氏を称し、親権者は母となり、戸籍は母と子の独立した新しい戸籍ができます。

父との関係では、父が認知すれば、その子が生まれたとき

に遡って、父子の関係が生じます（七七九、七八四条）。これを任意認知といいます。認知は父である男に妻がいても、妻の同意は不要です。しかし、子が成年になってから父親だと名乗る身勝手な父もいるので、成年の子を認知するには子の承諾が必要となります（七八二条）。

任意に認知しない父親に対しては、裁判所を通して認知を強制することもできます。

認知された子どもでも、父母が婚姻すると嫡出子になります。また、婚姻中に認知すると、その時から嫡出子になります（七八九条）。これらを準正といいます。

しかし、非嫡出子は、認知されても相続分については嫡出子の二分の一（九〇〇条四号）です。法の下平等から考えると、相続分に差をつけるのは問題でしょう。実際、ある女性に未婚時代に生んだ子と、その後他の男性と婚姻して生んだ子がいる場合、財産の相続に際して、非嫡出子と嫡出子で相続分が異なるのは、おかしいことです。

(一) 養親子 養親となる者と養子となる者がお互いに合意（縁組の意思）すれば、法律的な親子になります。しかし、未成年者は養親にはなれません（七九二条）。養親と養子が、それぞれ夫婦である場合は、夫婦で養子縁組をしなければなりません（七九五条）。養子になる者が養親より年長だったり、尊属―例えば養親の親やオジ・オバであつたりしてはな

りません（七九二条）。従つて、自分の非嫡出子や孫、弟、妹を養子にしてもよいのです。また養子が同年でも、誕生日が養親より後であればよいのです。養子が未成年者の場合は家庭裁判所の許可を必要とします（七九八条）。

未成年者のうち一五歳未満の子を養子にする場合は、その子の法定代理人（例えば親権者である親）が代わつて縁組の承諾をすることになります（七九七条）。これを代諾養子といひます。この場合も子どもの福祉を考えて、家庭裁判所の許可を必要とし、親の恣意を許しません。

養子縁組は婚姻と同じように、戸籍役場に縁組届が受理されて成立します。しかし、実の親子と同じような生活をするわけでもなく、親子の意識すらないような、見せかけの養子縁組は有効に成立しません。芸者や酌婦にするとか、一時就労させるためとか、妾を養子にしたりしても養親子とはいへません。養子は縁組届が受理された日から養親の嫡出子と同じ扱いをうけ（八〇九条）、養子の氏は養親の氏となり（八一〇条）、相互に扶養の義務と相続権が生じます。しかし、実親との親子関係はきれないので実の親の財産の相続権も失いません。

養子縁組を解消するには、離婚と同様に、協議あるいは裁判によつて離縁もできます（八一・八一四条）。離縁すると、養子は縁組前の氏に復します（八一六条）。また、養親

が死亡した後に、養子が離縁をしたい場合は家庭裁判所の許可を得ればできます（八一一条）。

（三）わらの上の養子 出産と同時に他人の子をわが子としてもらいうけ、虚偽の出生届をしても、有効ではありません。

そこで、せめて養子縁組届をしたことに扱つてもよいのではないかと思います。裁判所はまだ認めていません。菊田医師があつて実の親子として届けさせた事件がありましたが、「実の子」として育てても、法律的には「親」の遺産を相続することができないこととなります。わが国も外国の例のように「特別養子」なりし「完全養子」の制度に改める必要があります。

（四）人工授精子 わが国でも、昭和二四年以来人工授精が行われています。夫の精子による（AIH）場合は問題がありませんが、夫以外の精子による（AID）場合、嫡出子として扱つてよいのか問題となります。最近では冷凍による精子の保存が可能となり、夫の死後の人工授精や胎外授精、代理妻などによる、民法が予想していない子どもが生まれてきますので、法律改正が必要となるでしょう。

三、親権とは

（一）親権とは未成年の子どもの心身を成長発達させ、一人前の人間に育てあげるためのもので、子どもの身上と財産に

関するものとあります。

親権は子のために行使するもので、親の義務たる性格が強いのですが、子の監護・教育について、みだりに第三者の干渉を許さない意味では権利でもあります（八二〇条）。従って、勝手に放棄したり、譲渡できるものではありません。また、第三者が親権の行使を侵害する場合、侵害行為の停止と損害賠償の請求ができます。反面、親が親権をみだりに行使するのは権利の乱用で、無効となります。

①監護・教育の権利義務（八二〇条） 監護は主として肉体的な育成、教育は精神的な向上をはかるものです。一八歳未満の子を未成年子といい、親の生活水準と同じ程度のものが要求されます。

②居所指定権（八二一条） 子どもがどこに住むかは、親権者が定めます。子が家出をしたり、問題のあるグループと生活を共にする場合、親のもとへ帰させることができます。

③懲戒権（八二二条） 子どもが間違つたことをした場合に、監護教育の目的を達するために必要な範囲で、肉体的・精神的な懲罰を与えることができます。しかし、あくまで愛情にもとづくもので、お尻を叩くとか、押入にいれる程度のことです。家庭裁判所の許可を得て、懲戒場にいれることもできますが、現在では親権者の請求だけで収容できる懲戒場はありません。

④就業許可権（八二三条） ⑤命名権

⑥財産管理権・代理権、（八二四条） 子が財産をもっている場合には、親権者がこれを管理し、その財産に関する行為についてその子を代表します。管理とは保存、利用、改良を目的とする行為、代表とは代理と同じ意味です。

（二） 親と子の利益が反する契約をするときは、子どものために家庭裁判所で特別代理人を選任してもらって、その代理人との間で契約をしなければなりません（八二六条）。

ところで、親が親らしいことをしないで、やたら親権を乱用して子を泣かせる場合とか、著しく不行跡であるような場合には、家庭裁判所の審判で親権を親からとりあげることができます（八三四条）。

四、扶養と相続

（一） 親は未成年の子に対して、扶養し、監護・教育する義務がありますが、成年の子と親の間では、相互に扶養する義務があります（八七七条）。成年に達した子と親の間は、自分にゆとりがあれば相手の生活を援助し、それができなければ国の公的扶助に頼ることになります。

親の面倒をみるのに、数人の子がいる場合、扶養の順序として、必ずしも長男ということはなく、扶養可能な子どもがまず扶養します。同居して扶養する場合と生活費を渡してす

る場合とありますが、老親を子が徒らにタライ回しするのは妥当ではありません。その程度や方法について、親と子で協議が調わないときは、家庭裁判所できめてもらうことになります。

(二) 親が死亡しますと親の遺産につき、子どもは第一順位の相続人となります(八八七条)。そして、その法定相続分は、たとえば死亡した父に、父の配偶者(母ないし母以外のもの)がいれば、遺産の二分の一となります(九〇〇条)。配偶者がいない場合は、子がひとり占めできます。ただし、親が遺言で法定相続分と異なる意思を表示した場合は、子どもは法定相続分のそのまた二分の一の遺産を遺留分としてもらうことができます(一〇二八条)。

子が親に対し虐待したり、重大な侮辱を加えたり、又は著しい非行がある場合は、親は、家庭裁判所に請求して、その子を相続人にさせないこともできます(八九二条)。逆に子の財産について、子が死亡すると、子どもに配偶者だけがいる場合は、遺産の三分の一の法定相続分があります(九〇〇条)。

このように、親と子は相互に相続関係があります。そして、親と子が相互の財産の維持・増加に寄与した場合は、相続分のほかに寄与分が認められます(九〇四条の二)。

五、むすび

親と子の間の法律関係として、主に民法についてふれました。刑法でも、子が親を殺したり、傷害を負わしたりすると、尊属殺(二〇〇条)、尊属傷害致死(二〇五条)罪があり、また親が子を捨てたり、適切な看護をしない場合に保護責任者遺棄罪(二一八条)で刑が一般の罪より重くなります。

逆に、親と子の間では犯人蔵匿(一〇三条)、証拠湮滅(一〇四条)、窃盗(二三五条)、不動産侵奪罪(二三五条の二)や贓物收受故買(二五六条)については、刑の免除規定があります(一〇五、二四四、二五七条)。

親と子がかばい合うのは自然の情ですが、最近、大学浪人が両親を撲殺したり、親が手のつけられない家庭内暴力の子どもを殺したり、異常な事件が続発しています。また、ピーター・パン症候群といわれる子どもが増えたり、親離れ・子離れしない親子が問題となっています。これらは、受験戦争と企業間の競争の激化に伴う社会的要因が背景にあります。が、父母や親子の間でも理解と信頼が欠ける結果でしょう。今こそ、憲法の基本原理をふまえて、親子の信頼と理解を回復する努力が必要かと思っています。

(かみやかんきちろう・弁護士)

消費生活と法律

加藤 真代



高度経済成長が始ろうとしていた矢先の一九五七年、全国消費者大会は、次のような消費者宣言を発表した。「資本主義は両刃の剣である。労働者として搾取され、消費者として搾取される」と私たちの先覚者は叫びました。労働者の搾取を排除する闘いは前進しましたが、消費者を搾取するからくりは、なお巧妙を極めて、私たち大衆の生活を脅かしています。……中略……すべての物の価格と品質は、消費者の意見を尊重して決定されなければなりません。私たち大衆こそ主権者であることを高らかに宣言します。……後略……」

その後の日本の歴史上まれにみる急激な経済発展は、国民生活にも大きな変化をもたらした。技術革新、産業構造の高度化は、生活環境の破壊や、消費者の人間性を無視した不当な取引、さらに経済上のみならず深刻な被害を個人の心身にまで及ぼした。これに対して消費者の怒りが運動となって

高まり、さまざまな闘いを展開してきた。生産流通Ⅱ男、消費Ⅱ女という性別役割分業が固定化された日本の経済社会では、一般的な消費者運動の担い手は、そのほとんどが主婦を中心とする女性たちであった。そのことは、消費者問題を主権者たる国民一人一人の人権問題として、企業の利益や行政の都合等より優先的に配慮されるべきであるという認識を、大衆の中に定着させることを遅らせてきた。

例えば、比較的人権意識をきちんととり上げていると思われる高校「現代社会」の教科書や資料集にも、憲法に続いて労働三法はのっているが、消費者保護基本法（一九六八）は取りあげていない。

第二次大戦直後、つかないマッチはマッチではないとこれを取替えさせたり、中身は鯨や馬肉なのに牛肉のラベルをつけたニセ牛缶事件をきっかけに、不当景品類及び不当表示防

止法を制定させるなど、連綿と続けられてきた消費者運動の側からみる時、この法に限界や問題点がないではない。しかし、この法は、国民の生存権、国の保障義務をうたっている憲法二十五条「すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部門について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」を、消費生活という場面で、より一歩具体化させて、国・地方公共団体・事業者に対して責務を定め、消費者保護の具体的方策を指摘している。各地の消費者センター（地方によっては生活センターなどとも呼ばれる）や、市町村段階の消費者相談や消費者教育・業者指導は、この法（十二、十四、十五条）に基づいて運営されている。基本法は同時に、消費者が自ら進んで必要な知識の修得をし、自主的かつ合理的に行動し、組織活動を進めることを促している。

基本法は、従来の産業・企業本位の政策から、はじめて国民生活本位の政策を呈示したという意味で、極めて活気的なものであった。しかし、消費者から見ると、制定当初から今日まで、「プログラム規定にとどまっていいて具体性がない。即ち消費生活に関する法律の具体的内容・運用は各省庁や自治体にまかされている。肝心の消費生活における国民の権利が明記されていない（東京都消費者条例では、第一条で消費

者の権利を五つに分けて明文化している）。法の目的である消費生活の安定向上を確保するために、必要な関係法令の制定改正を行うという条文（六条）が、真に消費者のために活発に生かされていない」といった批判がある。

この法律に基づいて閣僚を構成員とする消費者保護会議が新しく設置されたが（十八・九条）、毎年十一月頃一回、一時間弱の会合という実態では、この法による国民生活優先の政治の実現は、絵にかいた餅と批判されてもしかたがないのかもしれない。

しかしともあれ、基本法の制定後は、それまで消費者権獲得を目指して営々と歩んできた消費者運動の道が、多くのコンシューマリスト草の根運動家、行政マン、企業内にあるても志は消費者主権をめざす人々の参加によって拡大されることになったのである。

基本法を大枠として組み立てられている消費生活に関する法や制度は極めて多く、範囲も広範で運用の実態もさまざまである。対象分野別にいくつか列記してみる。

(一) 危害の防止・安全の確保……食品衛生法、薬事法、農薬取締法、消費生活用製品安全法、有害物質を含有する家庭用品の規制に関する法律、ガス事故法、水道法等々

(二) 計量の適正化……計量法

(三) 規格・表示の適正化……農林物資の規格化及び品質表示の

適正化に関する法律、工業標準化法、家庭用品品質表示法、栄養改善法、旅館業法、温泉法等々

④公正自由な競争の確保

(イ)競争秩序法……私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律、不当景品類及び不当表示防止法等々

(ロ)契約の適正化……割賦販売法、訪問販売等に関する法律、貸金業の規制等に関する法律、出資の受入れ預り金及び金利等の取締り等に関する法律、利息制限法等々

(ウ)啓発活動・組織化……社会教育法、消費生活協同組合法等々

これらの中には、消費者のためにもなる程度で、実際は商工業者本位のものもあれば、かえって消費者の権利を侵害するような場合もある。例えば、家庭科教科書などでJAS

(日本農林規格) 品は一定の品質を保証しているからマークをみて買いましようという記述をみることがある。が、実態はどうか。格付け申請は事業者の任意であるから、高水準では申請者が少なくなると現状妥協的なものになりがちで、ものによっては非JAS品の方が消費者にとっては品質の良い場合もある。「農薬は農薬取締法できびしい審査をうけて登録されています」という記述も消費者を誤認させる。全農薬・全作物毎の残留基準がきまっているわけではない(食品衛生法)し、輸入果物や倉庫くん蒸後の基準はない(植物防疫法)。登録制度(農薬取締法)が十分に安全性を保証して

いない。同じ農薬でも蠅蚊ノミの駆除剤は医薬部外品として薬事法、ダニワラジウムシ等不快害虫はまだ対象としている基準がないなど、たて割の用途別規制は、最終的には人体に対しての総量規制方法をもっていない。

法律の運用は力関係が行政のありようを決めるから、いきおい団結力の強い経済団体に比べると、消費者には不利なことが多い。審議会一つとってみても、その人選が民主的であろうかと首をかしげることも多い。行政が、消費者からみて望ましいことをしようとしても、事業者の力を背景とした政治的圧力がこれを抑え込んでしまうという構造的な作用も大きな問題である。まさに法は正義ではなく、力である。

例えば、食品添加物行政(食品衛生法)は一九七二年国会決議で極力これを減らす方向がうち出されたにもかかわらず、貿易摩擦解消のためと称して(一九八三)規制緩和の方向が次々とうち出されている。

国鉄運賃法は、かつては国会審議を要した運賃改定を、次第になしきずしに運輸大臣の認可部分を増やして(一九七七の改正)、値上げをしやすくし、更に再建特別法(一九八〇)を制定して地方交通線の割り増し運賃制、廃止路線への道を開いて、国民の最基幹交通としての公共性を放棄するといった庶民泣かせの例もある。

景表法に基づいて、無果汁飲料は「無果汁」と表示せよと

いう消費者団体の不服申立（十条）に対して、公取委審決（一九七三）も、最高裁判決（一九七八）も、消費者には不服申立資格なしとした。運動がつくり上げた法でも、企業には不服申立の道を開き、消費者を閉ざした例である。その他、消費生産関係法の不備や運用のゆがみをあげ出せばきりがない。

しかし一方、前進もある。業者の新しい販売方法に対応して、割賦販売法（一九六二）や訪問販売法（一九七六）が制定された。取引に不馴れな一般市民が、契約内容を理解できぬまま契約することは不利になるので、クーリングオフ（頭を冷す）期間をもうけて、この間は違約金や損害賠償支払をすることなく契約解除できるようにするなど、事業者と消費者の力の差を考慮に入れた従前の法理論を一步進めたものも生れた。これは最近とみに多い高額商品の契約の失敗に悩む消費者の救済に力を借している。

また本年四月、仙台高裁秋田支部は、石油バニックスの際、業者の結んだ不当なカルテル（独禁法違反）によって損害をこうむったとして損害賠償請求をしていた鶴岡生協員たちに、全面勝訴、即ち公取委の審決によって違反行為の存在を事実上認定し、カルテルと損害との因果関係について消費者側の立証責任を軽減、企業側に反証責任を負わせる判断を示した。これは消費者からみれば極めて良識的で健全な判決で

あった。この判決を勝ちとったのは、十年余を、仲良く力強く手を結んで企業の責任を追求しつづけた千六百人をこえる主婦原告団であった。彼女たちが求めたのは、不当に奪られた金というよりは、“社会的な公正”、“正義”であった。

私たちは今、あまりにも華麗な消費社会の便利さとほどほどの収入に身を浸して、自己を弱者（経済社会での消費者）として見忘れてはいないだろうか。今一度しっかり自分の消費生活を、社会とのかわりをもつて見直してみたいものである。

（かとうまさよ・消費者運動家）

注(1) 消費者保護基本法

第一章 総則

第一条（目的） この法律は、消費者の利益の擁護及び増進に関し、国、地方公共団体及び事業者の果たすべき責務並びに消費者の果たすべき役割を明らかにするとともにその施策の基本となる事項を定めることにより、消費者の利益の擁護及び増進に関する対策の総合的推進を図り、もつて国民の消費生活の安定及び向上を確保することを目的とする。

第二条（国の責務） 国は、経済社会の発展に即応して、消費者の保護に関する総合的な施策を策定し、及びこれを実施する責務を有する。

第三条（地方公共団体の責務） 地方公共団体は、国の施策に準じて施策を講ずるとともに、当該地域の社会的、経済的状况に応じた

消費者の保護に関する施策を策定し、及びこれを実施する責務を有する。

第四条（事業者の責務） ①事業者は、その供給する商品及び役務について、危害の防止、適正な計量及び表示の実施等必要な措置を講ずるとともに、国又は地方公共団体が実施する消費者の保護に関する施策に協力する責務を有する。

②事業者は、常に、その供給する商品及び役務について、品質その他の内容の向上及び消費者からの苦情の適切な処理に努めなければならない。

第五条（消費者の役割） 消費者は、経済社会の発展に即応して、みずからすすんで消費生活に関する必要な知識を修得するとともに、自主的かつ合理的に行動するように努めることによって、消費生活の安定及び向上に積極的な役割を果たすものとする。

第六条（法制上の措置等） ①国は、この法律の目的を達成するため、必要な関係法令の制定又は改正を行なわなければならない。

②政府は、この法律の目的を達成するため、必要な財政上の措置を講じなければならない。

第二章 消費者の保護に関する施策等

第七条（危害の防止）（略）／**第八条（計量の適正化）**（略）／**第九条（規格の適正化）**（略）／**第一〇条（表示の適正化等）**（略）／**第一一条（公正自由な競争の確保等）**（略）

第十二条（啓発活動及び教育の推進） 国は、消費者が自主性をもって健全な消費生活を営むことができるようにするため、商品及び役務に関する知識の普及及び情報の提供、生活設計に関する知識の普及等消費者に対する啓発活動を推進するとともに、消費生活

に関する教育を充実する等必要な施策を講ずるものとする。

第十三条（意見の反映） 国は、消費者の保護に関する適正な施策の策定及び実施に資するため、消費者の意見を国の施策に反映させるための制度を整備する等必要な施策を講ずるものとする。

第十四条（試験、検査等の施設の整備等） 国は、消費者の保護に関する施策の実効を確保するため、商品の試験、検査等を行なう施設を整備するとともに、必要に応じて試験、検査等の結果を公表する等必要な施策を講ずるものとする。

第十五条（苦情処理体制の整備等） ①事業者は、消費者との間の取引に関して生じた苦情を適切かつ迅速に処理するために必要な体制の整備等に努めなければならない。

②市町村（特別区を含む。）は、事業者と消費者との間の取引に関して生じた苦情の処理のあつせん等に努めなければならない。

③国及び都道府県は、事業者と消費者との間の取引に関して生じた苦情が適切かつ迅速に処理されるようにするために必要な施策を講ずるよう努めなければならない。

第三章 行政機関等

第十六条（行政組織の整備及び行政運営の改善） 国及び地方公共団体は、消費者の保護に関する施策を講ずるにつき、総合的に見地に立つた行政組織の整備及び行政運営の改善に努めなければならない。

第十七条（消費者の組織化） 国は、消費者がその消費生活の安定及び向上を図るための健全かつ自主的な組織活動が促進されるよう必要な施策を講ずるものとする。

第四章

第一八条（消費者保護會議）（略）／第十九条（略）／第二〇条（國民生活審議會）（略）

注(2) 東京都生活物資の危害の防止、表示等の事業行為の適正化及び消費者被害救済に関する条令（消費者条約）

第一章 総則

第一条（目的）この条例は、生活物資の危害の防止、表示等の事業行為の適正及び消費者被害の救済に関し、都が実施する施策について必要な事項を定め、都民の自主的な努力と相まつて、次の各号に掲げる消費者の権利（以下「消費者の権利」という。）を確立

- 一 し、もつて都民の消費生活の安定と向上を図ることを目的とする。
- 二 消費生活に必要な物資等によって、生命及び健康を侵されない権利
- 三 消費生活に必要な物資等について、適正な表示を行わせる権利
- 四 消費生活に営むに際し不当に受けた被害から、公正かつ速やかに救済される権利
- 五 消費生活を営むうえで必要とする情報を速やかに提供される権利

以下略

と◎ 「子どもって……」の

稲邑恭子さん



シャツカラーのブラウスにコットンパンツ、腕には大きな布袋。

午後から始まる団地内の自主学童クラブ

ブ「風の子」での「仕事着」と思えば当然だが、江東Weの会などでお会いする時は、いつも楚々とした装いだったので……。

おつれあいの仕事の関係で数年間、英国での生活を経験されている。帰国して気付いた

が、英国人は日本人と違い、誰に対しても適度な距離をおいてつき合う。それは慣れるととても気持がいいもの、と。

「距離」のこと、学童で子供と接してすぐく感じたこともあった。子供は遠慮しない。子供に精神的に傷つけられ、自分がいじめられていると感じた時もあったとか。

区の婦人学級で河野貴代美さんの自己主張トレーニングを受け、客観的に人とかかわりのパターンを認識。そこでは自分が感じたことを自分の言葉で語らなければならなかった。しんどかった。しかし、今、講座は終わったが自主グループを作って続けている。

70数名の子供たちと5名の大人。きれいご

とじやみれない。でも、しかり方一つにも迷うという。子供のかかわり方に対する「考え」は深まるけれど、我が子には、疲れて帰るから、コンチクショーとなってしまう現実。

「こうあるべきだ」という思いは崩れてきた。でも、「こうしたらいんじやないか」があるのでは。それを探し求めているという。

気晴しは本を読むことと、レコード特にオペラを聴くことという稲邑さん。「静」の人が「動」の中に飛び込み、頭も心も大揺れ、という感じ。しかし、自分らしさを確実に築かれていたくましさも感じた。

家族って何？ 「居こちがいい」と。

（馬場洋子）

新しい家庭科を創るために◇◇小学校では

家庭・社会への

協力と参加をめざして

——中学年の実践例から——

野原春江

一、はじめに

四月号にも述べたように、中学年の家庭科の内容の検討にあたっては、発達上からみた子どもの望ましい姿として、『家庭社会への協力と参加を通して、自己の確立を図ること』を掲げた。そしてその主な内容として、

・うちの大切な仕事を何か受けもつなど、家庭生活に積極的に参加していくもの。

・家族とのかかわりに目を向けていくものを主軸

にして、いくつかの題材を選定していった。

まず、四月に、「うちの生活時間」の題材をとりあげ、生活時間の要件を明らかにする学習を通して、自分のうちのくらし方を見つめさせ、家族の一員として、自分の生活のよいリズムづくりをすること、積極的に家庭の仕事に参加していくことを話し合った。

その後「生活」の時間を中心に、くらし方を確かめ合ったり、具体的な題材を投げかけることで、家庭への参加を促していった。

私は、こうした「生活」の学習は、単に「生活」の時間のみの学習に止めてはいけないと思う。

先号では、「道徳の学習と関連づけ、心を培うことと併せて実践を進めなければならない」と述べたが、中学年の実践についても同様なことが言える。道徳の学習との関連のみではなく、更に、学級経営のポイントとして位置づけたいと考えた。

そこで、「生活」の学習を、スタートであり頂点でもあると据え、そこから発展して、家庭での主体的な実践をすすめる、実践記録用紙にまとめさせた。また、日々の「くらしの記録」を通して、よりよい実践の仕方を求めさせると共に、実践交流の場を設けて、子どもたち相互の実践を広め高めるような指導をすすめた。

二、実践例

(一) KMの場合

○題材 自分の部屋の整理

○やったこと

- 1、段の整理
- 2、机の上や中の整理
- 3、本棚の整理

(詳細略)

○感想

整理をしてみると、こまかい物やいらぬ物が、沢山あることがわかった。ぼくはいつも母に言われても、めんどろで、なかなかやらないので、よく物を失ったりする。定期的に整理をやったほうがいいと思った。

○母親の意見

この問題はわが家第一の問題で、一学期から子どもたちと何度も話し合いをしたり、約束を作ったりしていましたが、大した効果がなく困っておりましてところ、学校でもこういう試みをしていただき、大変うれしく思っております。

わが家では、木曜日と日曜日に私がみて、うまくいったら◎○などを付け、十二月まで続けてみようと思

し合っております。こうした試みによって、本人がまじめにとりこんでくれるように期待しています。

これは、学校で「自分の部屋の整理」の学習を行った発展として、KMが主体的に家庭で行った実践の記録である。

学校での学習の主な過程は次のようである。

- 1、自分の部屋の整理の実態や、空間利用の様子を見て、現在の姿を画用紙に書いてくる
- 2、より使いやすい整理の仕方や空間利用のアイデアを出し合い、OHPで写しながら、交流し合う
- 3、みんなで学習した整理の仕方を活かし、自分の部屋の整理計画を立てる
- 4、家庭で実践する場合に、必ず家族の意見を聞くことを確かめる

KMはこの実践後よく「くらしの記録」に、うちでの仕事のことや、部屋の整理をしたことを書いてきた。その都度赤ペンで、具体的な方法を書き記したり、励ましのことを書いてきた。また家庭でもこの問題をとりあげて話し合われたようである。

そうした経過の後、KMは冬休みに次のような実践をしてきた。

○題材 大そうじ

○やったこと

- 1、自分の部屋の大そうじ
- 2、そうじ用具の買い物
- 3、便所そうじ
- 4、ガラスふき
- 5、玄関はき
- 6、どぶそうじ

○本人の感想

あまりきたなくて手のつけようがなく、やり出すまでに時間がかかった。しかし、とにかく自分でやれるだけやってみようと思い、がんばった。

夕方すっかりきれいになったのを見て、ヤレヤレと思った。

○母親の感想

近頃では自分の部屋の整理整頓、そうじ等上手にできるようになりました。ガラスふきも机の中や棚の上も雑巾がけもできて、百点をつけてやりました。

この冬休みは我が家にとって大事なお手伝いさんでした。本人もいろいろな仕事で自分でやれ、うちの人にもほめてもらえるので、今までとはちがった面で、自信をもったようです。

よく遊び、よく手伝い、そして少々勉強しました。全体的にリズムカルな生活をもつことができたと思います。

この母親の感想が示すように、KMは、こうした実践を通して、家庭の仕事に積極的に参加していっただけでなく、自分のうちでの生活の在り方も、シヤンとしたものになっていった。ひとりKMだけに限らず、何人かの児童がよりよい生活をめざして努力をしていった。

それにはこのKMの場合のように、母親の協力に負うところが大きい。

担任が家庭での生活の在り方に目を向け、常に児童や家庭に働きかけていった場合には、このように家庭の協力を得ることができ、それでもまだ、親の多くは学力だけにとらわれていて、家庭での子どもの生活に目を向け、子どもを励ます母親は限られている。まして、担任が意図的に働きかけなかった場合には、こうした点への親の意識は極めて低い。

(二) 家庭の協力が得られないI男の場合

○題材 年末の手伝い

○やったこと

- 1、店の手伝い
- 2、机の整理
- 3、本の整理と部屋の大そうじ

困ったこと机のひき出しを片づける時、ごちゃごちゃでしわけするのに手間どったので、いつも整理しておかないといけないと思った。

本の整理をしていた時、マンガの本を見ていて、少しさぼってしまった。

○母親の感想

勉強の方はあまりよくなく、家の手伝いは大変よくやってくれました。こうしたこともよいが、もっと勉強をする方が大事だと思います。

KMの家庭のように親が協力的な時、児童は実践もしやすく、主体的にとりこんでいった。しかし、I男や、親の意見を求めても何も答えてもらえないE男など、親の理解が得られない児童の記録もいくつか見られた。私はこうした児童の実践こそ大切に、本人を励ます材料としたいと思う。また、だからこそ、私たち教師は、こうした現状の中で、児童の家庭での生き方を見つめさせ、よりよい方向に向かわせるような指導を意図的にすすめていかなければならないと思う。

三、まとめ

四月号以来五回にわたって、低・中学年における家庭科内容に対する考え方と、実践例を述べさせていただいた。

現在、低・中学年における家庭科の内容やその在り方に対していくつかの批判の声が聞かれる。

「文部省が、家庭や地域との関連をふまえた教育の重視を打ち出し、各校でその具体的実践が進められている今日、あえて、低・中学年の家庭科などと銘うたなくても、十分その目的が達せられるのではないか」

また「低中学年で、家庭科の内容を学級指導の中に組み入れてできるのならば、高学年でも、家庭科をなくして、学級指導の中で行えばいいではないか」と、家庭科廃止論に発展させる意見もある。

「低・中学年では、家庭の中のことまで取り上げなくても、学校の場のことを十分指導すればよいではないか」など、さまざまな意見が聞かれる。

そうした意見に対して私たちはどう対処したらよいのだろうか。

確かに低学年の社会科の中に、「うちの人のしごと」や、「わたしが一年生になるまで」といった、家庭を見つめ、家庭の中での自分の生き方を考えさせる単元が組まれている。また、道徳実践の面でも、家庭における生き方を学ばせ、心を培おうとしている。

低・中学年における家庭科の内容は、道徳や社会科と、大変深くかかわっているし、重なる部分も大きい。しかし社会科や道徳は、私たちが願っている内容の一部分であって、社会科は社会科としてのねらいや内容をもつし、道徳について

も同じことが言える。

四月号にも述べたように、家庭科は、家庭の中で家族の一員として、よりよい家庭生活を営むことのできる人間の育成」という目標を中心に据えて、日常の衣食住の具体的な生活を通して、他の家族とかかわりながら、どう育つていくかという、育ち方・生き方を追求させなければならないと思う。そのためには、小学校の低学年から、男女共にその発達に応じて、今自分が家族の一員としてどう在ったらいのかを見つめさせると共に、どんな家庭を創っていくかとするのか考えさせ、その手だてを学ばせることが大切である。

家庭の「崩壊」が叫ばれ、親のあり方への疑問が提起されている現在、私たちは、このテーマに向かって、研究を積み重ね議論しあって、指導内容をより体系的に組んでいく必要があると思う。

私が試みた実践は、まだまだ理論的にも体系的にも弱い、ほんの初歩的なものに過ぎない。

みなさま方の御批判をいただきながら、試行錯誤を繰り返して、少しずつ確かなものにしていきたいと願っている。

(岐阜県揖斐郡池田町立宮地小学校)

●夏季フォーラム実行委員会から読者の方へ●

この夏のフォーラムに向けて、4月に実行委員会が発足しました。途中から、新たに実行委員に加って下さった方もあり、新しい意見に刺激をうけ、活発な話し合いが行われています。

今年のテーマは、「自分らしさをこそ」Ⅱー私がわたしであるためにー」としました。「自分らしさを」とひと口に言っても、本当に自分らしさを考えてみると、意外とあいまない感じ。それぞれの考える「自分らしさ」についての微妙な違いに、実行委員会の中でもずい分意見のやりとりがありました。

今年の夏季フォーラムでは、「自分を表現することの楽しさ」を体験し、「自分」を心で感じてみよう。ということになり、初日に企画しています。みのり多い会にしたいと、一同、知恵をしぼっています。みなさんの参加によって、手づくりの会にできたらステキですね。

話は突然、宿泊費、参加費のことに移りますが、ナナント宿泊費、参加費共に昨年より安いのだ！実は、国立婦人教育会館の使用料が昨年の会場より安いという単純な理由からなんですけど、でも、去年より安くする必要あるの？」という意見も出ています。確かに、できるだけ参加者の負担を軽くしようと考えことは良心的で、正しいことだけど、「Weはいつもギリギリのところできりすぎているのではないだろうか」「少しは余裕をとって、それを今後の活動資金に当てていった方が発展的ではないか」こんなことも議論になりました。あなたは、どう思われますか？フォーラムで多くのことが語りあえることを期待しています。

(実行委員長 錦真理)

新しい家庭科を創るために◇◇中学校では

私の原点と家庭科

森 陽子

1

私は、学校時代は「優等生」であった。小・中・高と成績優秀で教師に気に入られ、学校でする事はそつなくこなした。又、この十二年間を無遅刻・無欠席で通し、病気や事故等とも無縁で他の世界をほとんど見る事もなかった。

それは幸福だったのだろうか。私は、権威や権力に弱く自己を抑圧して生きる事を身につけてしまった。与えられた事は何とかこなすが、自分で判断して行動したり、創造したり表現する事が苦手だ。相手の気持ちかわからず人とどうつきあっているのか自信がない。

進学校で充実感をもって頑張っていたが、大学への猛烈な受験競争に疲れたのだろう。「女だから」と家政学部を選んだ。が、当時の私は、大真面目で自分を合理化し、「よい成績を」しか頭になかった。その時先生から、「こんな勉強をして何になるのだろうか、高校紛争の事など考えるな。今は受験に勝つことだけを考えろ。そんな弱い自分に負けるな」と言われた言葉を忘れない。私は従順な努力家であった。

そうして、内向的性格が自負心に支えられ、自分勝手な世界に生きる傲慢な人間ができていった。弱者の痛みを知らうともせず、感じない人間になった。私が唯一、弱者としての憤懣を覚えるのは「女である」という点だった。

大学に入って低いランクの学校である事に失望し、大学生活がつまらなかつた。そこでの何かを見下す自分があった。一流、二流という意識によって自らを貶め、不幸にしてしまっていた。自分なりに悩んだが、私は自らの差別意識に気づきはしなかった。

2

大学封鎖で、連日クラス討論やサークル学習をし、従来の価値観が崩れていった。マルクス・エンゲルスに初めて接し、国家がいつも善良な市民のためだけにあるのではない事を知り、ショックだった。私は初めて、学ぶことの楽しさを

知った。

しかし、学内に機動隊が導入され、「権力」というものを見る思いがした。がっちりした大男たちが完全武装してずらっと目の前に並んだ時、思わず足がすくんだ。一人一人の男の鉄面のような顔は真正面を見すえ、私たちを無視して立っていた。この人たちは何を考えているのだろう、恋人や家族がいるだろうにと思った。

教授会団交で、学生たちの荒々しい言葉づかいに嫌悪感もあった。が、教授たちの全く違う次元での対応に腹が立った。何と言葉の通じない人たちなのか、保身に徹する人物の醜さを見た。その後、テレビ中継で、職場の交渉で、エライ人たちの答弁に同じパターンを見る。私は、あんな立場になりたくないと思つた。それはとても気の毒に写つた。しかし、教師という立場は生徒に対して権力者に違いないのだ。そんな事は長い間思いもよらなかった。

3

中学生の校内暴力が全国に広がった頃、「十数年前は大学紛争だった。それがだんだん年齢が下がってきて今は中学生だが、しばらく辛抱したらそのうちおさまる」と言われた。

私はその時は納得してきいた。しかし、今の中学校がどうおさまるといふのだろう。力による押えつけをやってしまうと

したら、私たちはいったい誰のためにどんな教育をやっているかというのか。

学校とは、勉強とは、自分が体験したようなものしか考えも及ばなかった。私は、かつて『ミュンヘンの小学生』（子安美知子著、中公新書 等）を読んで、ドイツのシュタイナー教育に大変なショックを受けた。

全米にフリースクールの運動があり、フランスにフレネ運動がある。目を開けば日本にも、自由の教育、生活に根ざした教育への試みがあちこちで進められている。『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子著・講談社刊）は、教育荒廃を嘆く世相の中で爆発的に読まれた。私にとっては、強制のないこんな教育が日本にあったとは、本当に驚きだった。

それは、今私たちがやっている事と、反対方向の教育ではないか。

4

テスト、テストに明け暮れる偏差値教育の中では劣等生はみじめである。「なぜこんな勉強をしなければならないのか」という疑問をもつて、どうしても勉強にうちこむ事ができなかったり、ユニークな発想で型にはまった答が出せなかったり、家庭の不和や不安定、病気などのために勉強どころでなかったりするうちに、どんどん置いていかれ、劣等の烙印を

押されてしまう子ら。

自分の能力を正當に認められることなく、何年間も尺度の違う価値観のもとで劣等生と決めつけられてくれば、自信がなくなり、何の意欲も希望ももてない人間になってしまうだろう。

一方、優等生の自殺や犯罪によって、いかに彼らの心が傷つけられているかを思い知らされ愕然とする。こんな社会では、誰もが人間らしい感性を奪われていくのだらう。

優等生である学生やサラリーマンの無氣力症が報告され、生活体験や遊び、友達関係を大切にする教育が、企業サイドからも求められつつあるという。

T大生が、念願の合格を果たしてから子ども時代の遊びや友達つきあいを求めて、サークル活動や遊びに懸命にとり組む姿をテレビで見た。これはやはりどこかまちがっていると思う。何年も留年してサークル活動に精力を注いでも、とてもとりもどせるものではないと思う。

5

ところで、授業をしていていつも頭をかすめるのは、「評価」という事だ。この、成績による威圧がなくなれば、教師と生徒は互いに学びあえる関係になるのではないだろうか。中学校の評価は、ランクづけされた高校への入試のための

資料としてある。私たちは、人間の平等を人權の大切さを唱える一方で、自らが生徒に格差の烙印を押し続けているのである。何をにおいても、これをやめなければ自己矛盾を越えられない。

かつて私は、中学三年生を担任し厳密な十段階の評定を武器に輪切りの受験指導をした。生徒の方は、可能性のある高校校を宣告され、少しでも上のランクにくい込もうとよい点数をとることに専念した。教師は、友をけ落すことを教えているのに他ならない。そうしてたとえ高校入学を果たしても、世間のランクづけがある中では、堂々と胸を張って通学できない。自分の高校に誇りがもてず希望がもてない。そこにはさらに厳しい競争があるのだ。一学区に多くの高校があり、自由に選択できるかに見えるが、実は学校の数だけランクがあり、ふり分けられるにすぎない。また、新設校はたいしてその最低辺に位置づけられ、定員割れギリギリでスタートする。

6

ところが私は、現在の学校に転動してきて、地元高校集中受験運動というのを知った。高校増設運動などで新設された学校を、地域の高校として大切に育てようというのが始まりときくが、一つの方向としてよい運動ではないかと思ってい

る。

小・中学校で「仲間を大切に」「弱い立場の人のことを考えよう」と、ホームルームでやってきた延長上に「みんな地元の高校へ行こう」と続く。地区割調整により、一つの中学校から一〜二高校へ受験していこうという運動である。

現実にはなおランクづけが生きており、いわゆる一流高を志向していく生徒もあって完全ではない。が、最近問題となっている、高校の中途退学が少ない（府下平均の）位を続けている）点で注目されている。

卒業生を見ると、地元集中していった子らが、目的をもって生き生きと高校生活をすごしている事に驚く。一緒に進学した子がいじめられていると言っては、旧クラスの子が中心となって集まり、彼を支える動きを作っていたり、留年しそうな子と一緒に勉強しようとグループ学習をしていたり、私が見たこともない高校生活を展開していて感心する。

次は、ある卒業生の作文である。高校進学に当たっても、自ら差別を許さず、拒否する生き方を選ぶ中学生が育っている。

7

「一方では、地元集中とはどういうものなのかということと各クラスで話し合っていました。ぼくたちの進路を考える

ホームルームは、まず最初は、どこのクラスでも地元集中はどうしてあるのかということから話がすすんでいきました。高校に格差があれば、僕たちの進路は点数のみで決定され、本当にその人の個性とか友達関係とかが無視されていき、そして今まで友達、仲間と言いつけてきた私たちもお互いに見下げたり、見下げられたりということ、いわゆる一流高校を頂点とするピラミッドができています。このピラミッドで一番苦しい思いをするのは大人でもないし、親でもない。私たち自身だと思ふようになりました。

ぼくは、公立高校を目指しています。地元集中運動が自分にとってどんなものがわからない時は、『どこの高校に行ってもいい』と行っていました。だから、A高やB高に行こうと思っている人がいても何とも思いませんでした。でも今、地元集中運動のことを先生から聞き、そしてみんなで話し合った結果、自分なりに理解できたため、考え方が変わりました。

自分の個性を伸ばすまたげになっているのが今の点数による高校の格差であるのに、逆に『個性を伸ばすため、好きな学校に行ったらいい』と言いながら、一流高校に行くという考えには腹も立ちました。でも僕自身の中に、C高校へ行くと決意の一方で、私立専願でなくて良かったというところで、他の人を見下す気持がなかったかと自分に問い正して

みると、やっぱり考えてしまった。今、僕は人に見下げられるのはいやだし、人を見下すのもいやだし、地元集中を進め、格差をなくす気持を持ち、C高へ行く決心をしました。でも、ぼくが併願する陰には、障害をもっている人、就職する人、私立専願の人がいることを、ぼく自身も忘れてはならないし、みんなも忘れてはならないことだと思います。」

8

ところで、教師をして生徒の前に立つ時、自分が軽く見られている事をいつも感じて腹が立つ。「私が男だったらこの子はこんな態度をとるだろうか」と思う。女であり、家庭科であるという事で、差別され、家事・育児の負担を負わされている。人間としての喜びとなるべき事が、恨みになってしまふ。

「人は悲しみが多いほど人には優しくできるのだから」という歌が好きだが、弱い者に優しくできるようになるには、優しく大切にされた体験がないとダメなのだ。いじめられしいたげられた者は、より弱い者へ牙を向けやすい。が、優しさがいっぱいある中では、私たちは優しさで返すことができるし、自分の心の醜さをみつけやすい。最も弱い者の痛みに気づく社会は、どんな者をも大切にする社会になるはずだ。

私たちの仕事は、自分の原点をどこに置き、どう生きるの

かを見失わないようにして、生徒たちにそれを示しながら共に生きる事だろう。それは決して美しくはいかない。私は何が差別かわからず黙りこんでしまうので、被差別感覚をみがかなければと思っている。

家庭科の男女共修でさえ受けとめられないほど差別に満ちた社会で、男女共修を実践していく事が私自身の道である。いろいろな書いてきたが、軽く見られていじけている自分を励まし、優しさをとりもどそうと懸命の毎日である。それを今後も家庭科の場で求めていきたいと思っている。

新しい家庭科を創るために◇高等学校では

男女共修の

実施に向けて

森 幸枝

男女共修への理論づけ

研究会が、四十七年六月に公表した「男女共修『家庭一般』第一次試案」は、同年一月の教育課程審議委員会の答申によって、共修の実現が可能になったことから、それまでの各ブロックでの研究や検討を、急いでまとめたものであった。第一次の試案という二重の慎重さで公表したところに、当時の私たちの、初めて公にする不安と、時間切れからくる不十分さの自覚、仮説検証による改善を前提とした意気込みなどが汲み取れる。

試案作りに際しては、『家庭一般』女子必修の

表 1

教科教育としての男女共修「家庭一般」について

- | | |
|--------|---|
| (1) 本質 | 生活の科学的認識
生活の営みを基盤として、それを社会科学、自然科学、技術（労働）、芸術などとの関連においてとらえる。 |
| (2) 機能 | 家庭生活（地域社会）の民主化に寄与し、生活変革の具体的・実質的な能力を養う。 |
| (3) 領域 | （独自性）
生活（くらし、いのち）と科学とを、具体的・実践的に直結させていくことで、生徒の全面発達に資する。 |
| (4) 方法 | 常に、現実の生活からアプローチして問題意識を持たせ、多角的な追求（分析・総合・調査・実験・実習など）によって社会科学・自然科学・技術（労働）的側面からそれを認識させ、生活事象を本質的に把握して課題と展望を明らかにする。 |

もつ基本的な問題点について」前回記したような認識に立ち、さらに具体的に、一、家庭生活は男女で創るもの。二、家庭生活の充実向上は、女子のみの力では到底望めない。三、女子のみを対象としている限り、その内容・方法の変革はむづかしい。の三点を再確認した。そして、教科論としては表のように押えた。

とにかく、従来の女子教育、主婦養成の家庭科との相異を明らかにすることが求められていたし、

何よりも、教科存立の基盤や独自性が改めて問われてもいた。

そこで、すでに研究会では、指導内容についてのきびしい反省から、どこをどのように改める、あるいは補う、といったことを実践的に積み上げていたので、そのねらいや願いを汲んでそれを理論化しようと試みた。けれども、当時はまだ、男女共修の実践が、全国的に次第に広まり深まりつつあったというものの、頼るべき教科理論のない中で、それは非常にむづかしいことだった。とくに、この「領域（独自性）」つまり教科に固有の教育的価値については、最も苦心をしたところである。単なる技能指導ではだめだし、全人教育とか全面発達とかいってみても、すべての教科に通じることになる。「方法」は、実践をふまえて明らかに出来たし、「本質」「機能」もそれなりに納まったが、肝心の独自性を明確にすることに最も手間取ったところに、独自の科学的な体系を持たないこの教科の苦しみがあった（今日では、「生命と生活の再生産の科学」と一応押えられてきているが……）。しかし、この「生活（くらし・いのち）」と科学とを、具体的に・実践的に直結させていくことの大切さは、今日ますます大きくなっている。当時も、すでに受験体制が次第にきびしくなり、一方では単なるもの知り、頭でっかち、他方では何も考えないものの作りが育ちつつあった。そして、家庭科は

息抜きとかお遊び、内職の時間だなどと言われたりもした。

だが、本当にくらしを大切にし、いのちをいとおしむ人間を育てることが、民主教育の根幹であり、そのためには、どうしても生活と科学をしっかり結びつける力を、身につけさせなくてはならない。家庭科こそが、どの教科にもまして、より具体的により実践的にそれが出来るのだ、と頑張っておおかたの納得が得られた。

指導内容のせいり

次に、この試案に示した指導内容は、ほんの骨子のみではあったが、私たちは、何故に家庭科だけが、指導のなかみまでいちいち公表して、人々の了解を得なくてはならないのか、という不満を強く感じていた。しかし、周囲にはまだ、この教科に対するあらわな蔑視、偏見、誤解、あるいは同情、共鳴や激励などの様々なおもわくが交錯していた。だから、プロとして信頼してもらえない情けなさに、口惜しい思いをする一方で、それは、過去の家庭科をのりこえるために課せられた試験であり、実施を前にして、私たち研究会員自らへの再確認のためにも必要である、との自覚を持たざるを得なかった。

また、民主教育を進める上で、従来、他教科のことは関知せず、侵さず侵されずの関係を良しとして、生徒の全人格的

な発達への視点の弱かった高校の教科セクトを、積極的に打ち破っていく意味も持っていたと私は思っている。

試案の内容は表2の通りだが、先ずは目標の最初「生活の営みを……」「家庭、生活の……」とするか否かにはじまり、目標と経済、生活と衣食住の三本の柱を立てた。

さらに試案には、四十三年以降の研究会のとりくみも載せ、「今後の予定」として、府下各ブロックでの試案に基づく授業実践の報告とその交流をすること、四十八年三月までに指導のための資料を作ることと記した。

授業のための資料づくり

さて、第一次試案だけでは授業は出来ない、というわけだ、研究会は指導資料の作成を急いだ。そして、四十七年二月から翌年三月までの一年間に、実に二十二回の指導資料作成委員会を持ち、文字通り必死の作業を続けた結果、四月の授業開講に辛うじて間に合うことが出来たのであった。

それは、とにかく全くのゼロからの出発だったから、本当に大変な仕事であった。その後も、何度か資料の内容を改善したが、その時には、常に使用中のものを基礎にして考えることが出来たのである。

この作成委員は、あくまでも民主的なルールで選ばれた各ブロック代表とし、会合を重ねる度に、可能な限り各ブロッ

クにそれを伝え、意見を吸い上げて持ち寄るようにした。同じ思いの者が集まって作成した方が、はるかに速く、内容も濃いものが出来たであろうと思われる。しかし、それでは、一部の者が勝手に作ったのだということにもなりかねないし、何よりも、全府下で一斉に手を携えてやって行くためには、各ブロックで、名実共に指導資料作成に責任の持てる人が、どうしても必要であった。だから、この初版の作成委員は、何といっても、最も大変な苦勞を背負うこととなった。

はじめは、生徒用をとの考えもあったが、時間的にも力量的にも到底無理だと悟って、教師のための資料とし、とくに教科書に欠けている社会科学の視点を補い、幅広い資料（教材）の収集に重点をおこうということになった。ところが、いよいよ文章を書くころという時になって、それぞれが参考資料として持ち寄ったものは、全く千差万別で、むづかしい学術的な専門書から、部厚い文部省編「家庭経営」に至るまで、という有様だった。

ともかくにも、そこから始まって、先ず各領域を二名づつで分担し、大筋を話し合っておいて第一稿を書いて来る、それを皆で検討して第二稿を、さらに皆で話し合って第三稿をというように、一つの箇所最低三〜四回をかけた。とくに、出来上がった後に、各ブロックで少しでもより実質的な活用が出来るようにと思えば、先ずは委員全員の共通理解の

表2 共修「家庭一般」指導内容

目 標

<p>生活の営みを科学的に解明し、民主社会における家庭生活の課題にこたえ得る力をつける。</p> <p>1 社会の変遷が、家族形態ならびに家庭の機能に及ぼした影響について明らかにする。</p> <p>2 家庭経済の実態を明らかにし、その問題点をとらえ、解決していく力をつける。</p> <p>3 衣食住の生活に関する科学的認識と、その基礎的技術を学ぶ。</p>
--

生 活 と 家 族		
指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点	備 考
1 家庭生活の現状	○ 現在の家庭生活のさまざまな問題点を具体的な事実により着目させ、その問題の根源について考えさせる。	老人問題・出稼 ぎ・内職・共働 き・親子関係・ 公害・過疎・過 密・自殺 女性史・婚姻史 家族の歴史との 関係
2 家族の歴史とその機能	○ 歴史の流れの中で、それぞれの社会における生産様式と家族形態・機能との関係を明らかにする。 ○ 性の問題の歴史的考察（社会文化史の中で）。 現在の性のゆがみ（混乱・退廃）が、性の不平等や性の商品化から生れていることを認識させる。 ○ とくに「労働力（生命）の再生産」の機能においては、ただ労働力を回復させるだけでなく「人間らしく生きる」ための権利意識・社会に対する働きかけの必要性を認識させる。	
3 家庭生活と法律 ア 憲法 イ 民法	○ 旧憲法・民法と現行のそれを比較するなかで戦前と戦後の「家庭像」の相異を認識させ、「民主的家庭」の創造への実践力をつける。	24条・25条 親族編・相続編
4 家庭生活と職業	○ 人間生活に果してきた労働の役割を考える。 ○ 経済のしくみの中での職業の意味について考える。 ○ 婦人労働とそのための保護について認識させる。 ○ 家事労働について考えさせる。	労基法 母性保護
5 保 育 ア こどもの生活の現状 イ こどもの心身の発達 ウ 保育と社会 エ これからの保育	○ 家庭や、地域社会におけるこどもの実態について着目させる。 ○ こどもの心身の発達について認識させる ○ 発育の加速現象や個人差等について考えさせる。 ○ 障害児の問題 ○ 児童観の推移とその社会的背景について把握させる。 ○ 児童憲章の意義を認識させ、こどもの福祉について考えさせる。 ○ 家庭保育と集団保育の現状と課題について明らかにする。	こどもの人権侵害 （子殺し 子捨て 過保護 育児ノイローゼ 結婚と遺伝 障害児の福祉 （保育施設 保育制度

生 活 と 経 済		
1 家庭経済の現状	○ 政策がもたらした家庭経済の現状に着目させる。	高度成長政策 (インフレ・ドルショック)
2 収入について ア 所得の実態	○ 国民総生産と一人当りの所得およびその問題点。 ○ 格差賃金の実態と問題について。 ○ 生活水準について考える。	国際比較(所得・生活水準・支出) 理論生計費 年令別・性別・規模別・学歴別等
3 支出について ア 各支出費目の問題点	○ エンゲルの法則の停止現象の理由 ○ 住居費の増大と住宅政策との関係 ○ 教育費の急増とその理由 ○ 税率・貯蓄率と社会保障との関係 ○ 物価のしくみを明らかにする。 ○ 物価騰貴の原因について考えさせる。	をに 明す らる か。
4 物価問題	○ 物価のしくみを明らかにし、消費者としての権利意識をもたせる。	
5 消費者問題	○ 諸外国の社会保障の歴史と現状について認識させる。	公共料金・流通 機構インフレ政策 国際比較(物価 上昇率) 消費者運動
6 社会保障 ア 社会保障の歴史 イ 社会保障の実態と課題	○ わが国の実態を知り、今後の課題について考えさせる。	ドイツ・アメリカ・イギリスなど

生 活 と 衣 食 住		
1 食 生 活 ア 食品と栄養 イ 調 理 ウ 食生活の現状と課題	○ 食品の栄養を科学的に認識させる。 ○ 日常食品の選択と組合せについて考えさせ、実験・実習させる。 ○ 食生活の変遷と現在の実態について。	食品の基礎的知識 食品衛生 食品公害
2 衣 生 活 ア 被服と社会 イ 被服と健康 ウ 衣生活の現状と課題	○ 被服について歴史的に考察し、生活とのかかわり合いを考えさせる。 ○ 被服衛生の立場から被服材料の性能について認識させる。 ○ 被服の選択や被服の管理について社会経済との関連において検討させ、主体的な衣生活を営む力をつける。	流行・習慣 せいの公害 被服の商品化
3 住 生 活 ア 住居の変遷 イ 健康な住生活 ウ 住生活の現状と課題	○ すまいについて歴史的に考察し、生活とのかかわり合いを考えさせる。 ○ 住生活の基本的な条件について認識させる。 ○ 住宅の現状に着目させ、社会政策との関連について考えさせる。	住居史 (食寝分離・就寝 条件 個人生活 の尊重 住宅難・地価騰 貴 日照権・環 境汚染住民運動

ために時間をかける必要があった。とにかく、意気投合してすつと判り合える委員は、半数にも満たなかったが、皆、まじめで必死だった。郡部の遠方からは、早朝から深夜までのまる一日をつぶしての会合であり、また学習したくても、右から左へとは本が手に入らない場合も多かった。それぞれが、多忙な中を長時間かけて書いて持ち寄った原稿を、無視するようなことは互いに絶対出来ないし、納得して軌道修正をするまでには、労力も時間もかかるのであった。

そして、時間切れ。だから出来上がったものは、その場所によって視点や扱い方にかなりの差があって、決して十分なものではなかった。しかし、客観的な統計資料を豊富に取り入れ、各領域毎に多くの参考図書を紹介するなど、教師相互の学習への願いを込めたものとなっている。三月に入ってから六回もの回を重ね、三月三十一日の午後、遂に最終脱稿できた時の感激は、今もなお記憶に鮮明である。

私たちは、この資料作成を通して強く感じたことを、その「まえがき」「あとがき」で下記のように述べている。

この資料は、「新しい家庭科」を理解してもらう

1972年2月、家庭科研究会は、男女共修「家庭一般」実施にそなえて指導資料作成委員会を設置した。指導資料作成委員会は、今までの各ブロックの研究成果を整理し、「男女共修・家庭一般第一次試案」を作成し、1972年4月研究会員に配布した。その後一年間、第一次試案を骨子として回を重ね、この冊子をまとめた。その基本的視点としたのは、(1)「科学的」であること、(2)家庭科として、教科の独自性を明確にすることであった。「科学的」であることは、すべての教科に当然要求されることであるが、私達が教材としている「家庭生活」は、非常に現象的であり、経験的判断におちいりやすい傾向をもっているので、とくに留意する必要があると思われる。そしてその科学的認識を現実の生活に実践的に生かし、更にのぞましい家庭生活を創り出す力として、生徒に定着させていくところにこそ、「家庭科」の独自性が存在すると考えるのである。この資料は、研究、討議も不十分で、なお多くの問題点を残しているが、共修の開講をひかえ、指導のための一資料として提供するものであり、研究会会員の具体的な授業への展開、授業実践や研究の交流のつみ重ねの中で、よりよいものがつくられるものと確信する。

(「まえがき」より)

安易な家庭科切捨論はもちろんのこと、教科名の改変のみによって、この教科を真に科学的・民主的なものに変えていくことはできない。私達は、このたび男女共修を主張してきた過程において、この教科に対する周囲の偏見やべっ視が、いかに根強いものであるかを痛感させられ、しかもそれが、単なる教科の差別やべっ視にとどまらず、つきつめていくと女・女の子に対するそれにつながることを、はっきりと思い知らされた。そしてまた、わが国における従来の「家庭」とか「生活」とかを軽視する風潮(とくに男子の)とも関連して、容易には共通理解を得られなかった。こうした中で、やはり、私達は「家庭科」を徹底的に民主化して、その内容を改善していくことが、今日の時点での重要な教育課題であると考えている。

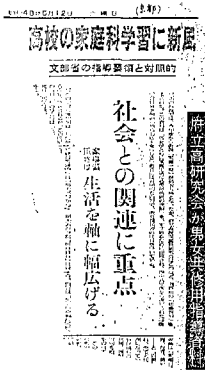
(「あとがき」より)

ために、府教委内部はもとより、校長会、教頭会、教務主任会等々に早速配布し、組合や一般他教科の先生方もたくさん購入してくれた。

また当時は、全国的に革新高揚期であって、改訂に伴う「家庭一般」女子必修の強化に対しては鋭い批判の声もきかれ、マスコミは、それらをかなり好意的に報じた。四十八年五月九日付朝日新聞は、「高校家庭科男女共修に、最低二単位（京都府教委）」とした記事の横に、「未来のパパにも教えなくちゃ（大阪版）」「いっしょに考える将来の生活（京都版）」との見出しを添えた。「さすがに記者は、うまい表現をするなあ」と、私は張りつめた口元が思わずほころぶ様な感じで眺めた。指導資料についても、京都、読売、毎日の各新聞も、それぞれ相当のスペースを割いて取りあげ、その主旨や内容についてかなり正しく解説をし、積極的に評価をした。

ここで、男女共修の実施に向けて、これらの資料をもとにした実践交流もでき、やっとのことで、一応の準備が整ったのである。

（前京都府立田辺高等学校教諭）



編集室から あなたも、Weのつくり手に…
あなたに （夏季フォーラムへのご参加を、1月号へのご投稿を）

◆'85年夏季フォーラム

夏季フォーラムの申し込みはお済みですか？『自分らしさをこそ』パートⅡであっても、初めてののご参加大歓迎です。大量の情報に流され、知らず知らずのうちに操作されかねない時代—私たち一人一人が、自分を確立する営みに真剣に取り組まなければならない時代です。その「自分」とは何なのでしょう。自分を生かすことが、他をも生かすことになるには、どうしたらよいのでしょうか。与えられるだけの講習会ではなく、参加者が主体的にかかわり自分たちで創っていくフォーラムにしたいと願っています。
近くの方は通って下さってもかまいません。お友達もぜひお誘い下さい。

◆'86年1月号テーマ「くらしの文化を探る」

人間が営んできたくらしの中に、私たちが確かに受けとめ、次代に伝えなければならない文化があります。ところが、うっかりすると、私たちの世代がその文化を断ち切る役を果たしかねないとは思いませんか？ 意識してくらしの文化を探ることを始めないと…。あなたの発言、お待ちしております。

（2千字以内／切りは8月5日です）

◆夏増刊号のこと

振替用紙にご記入なく6千円払い込まれた方は、以前から発行してきたフォーラムの記録（冬増刊号）のご注文として扱わせていただきました。ご希望の方は700円切手同封でお申し込みを

◇◇◇新しい家庭科を創るために◇◇◇

家庭科の新しい役割

―民衆の生活文化

復権の場として―

5

小沢有作

司会 時間がないので質問をまとめて受けて答えていただくようにしたいと思います。

武田 産業社会の用意した文化に対抗するような民衆文化の創造が必要ということはわかるが、現在の生産から完全にきりはなされた生活の中で、民衆文化をつくることの展望はあるのか。

鈴木 私は障害児学級の担任をしています。子どもたちは食事も満足にできないし、教科書なんてとても使えない。母子家庭父子家庭も多く、自分が生んだということすら言えない親がいる。でも、彼らとともに私も楽しく生きたいという気持ちで私を支えています。小沢先生ご自身も、すさまじ

い問題のある学校の中でも教師をしていることが楽しいということがあるのではないかと思うので、その辺のことを。

桑畑 去年のWeフォーラムの中務さんの授業の時に生いたちを書かすことでずい分批判が出て、深まらないままで終わったのですが、私たちも小沢先生の言われたように考えてきたのだということが一つ。もう一つ、今の生活の中で過去の生活文化をとのことですが、私も大事なことだと思います。民衆の生活文化を学ばせるには、やり方を教えたりするのではなくて、それを生み出した地域の生活の中から学ばせるのだと思う。例えば昨年私がやったことですが、だご汁とかねば納豆を部落のばあちゃんたちに習いに行かせる。文字もよめないばあちゃんたちが、つとを編みながら、自分たちは昔どんな気持ちでこれを作ったかを話していく中で、エリートの学生たちが、自分たちが習ってきたものは何であつたか、自分たちの生きる力はあるのばあちゃんたちに比べてどんなに希薄で弱いものか、ばあちゃんたちのエネルギーから私たちはもつと学ばなければならぬということに気づくのです。ねば納豆を家庭でつくれということを言いたいのではなくて、自らのおかれた生活の中で自分たちの生活をよりよくしていくために工夫してきたエネルギーを吸いとして、彼らが今の生活を変えていく力を学びとってほしい、それが家庭科でやるということではないかと思っています。熊本の実践の中

で、こんなのがいくつか出ている現状です。そういう意味で今日の先生のお話はとても楽しみにしていましたし、おもしろかったです。

半田 女のつくってきた民衆文化を学校が全部消してきたと先生は言われ、たしかに一理あると思いますが、民衆のつくってきた文化の担い手は女だけではなかった。男がつくった文化もあったと思う。その中の特に食べる、住む、着るを学校の中に回復させた時に、それを学ぶのはやっぱり女だと思っておられるのか、男と女だと思っておられるのか。

もう一つは、近代学校の問題点は言われる通りだと思いますが、学校というところが必ず最底辺の人間を作る場所だというならば、学校をどんなにつくり直し、問い直そうとしても、学校の存在そのものが問題点をはらんでいるのではないかと絶望します。そのあたりをお願いします。

小沢 私の気持の奥底に、親孝行の若ものにしたいたいという思いがあるのです。それが教育のことを考えるさいの一つの出発点になっています。儒教や立身出世のイデオロギーに捕われた「親孝行」観にたいして、民衆の内容を新しくこめなおすことをおして、これを民衆の手に奪還したい。その一つの入口として、父母、祖父母はみんな生活の中身をそなえ、文化をもった存在だということを、子どもたちに実感を通してわかってほしい、という願いがあります。

今までの、そして今の学校文化は民衆の物質文化を切ることによって、同時に文化的存在としての父母、祖父母をも捨ててきたわけです。学校のいう通りに従いなさい、そう言っで、自分の父母・祖父母、それが農民であったり、職人であったり、部落や朝鮮であったりすればするほど、そこから何も学ぶべきものなしと決めつけてきました。子どもにとつて、父母・祖父母のもっている文化は価値あるものと見られなくさせられてきました。

そこを逆転させたいのです。自分史を書くのも、物質文化の復権をいうのも、そこにひとつの意味をおいています。

ねば納豆づくりに取りくまれたさいの桑畑さんの心意気に、私も同感です。今、福岡の高校の先生から聞いて、印象に残っている話を思い出のです。

彼は生物学を専攻して教師になるわけです。ですから、微生物がどう発酵して納豆やみそになっていくのかというからくりについては、その知識を知っており、また、それを教師になって生徒に教えてきました。その彼が生徒に父母・祖父母の話の聞けとせまっていくなかで、自分もおばあさんの話を聞きとっていくわけです。そうすると、あらためておばあさんがかつては味噌や納豆を作り、それで家族を養ってきたことを知り、おばあさんの中に民衆の物質文化が貯えられていたことを発見するわけです。おばあさんは、味噌や納豆が

できる科学的なからくりは知らないけれども、しかし腕の中のたしかな技術としてそれらを見事に作りだすのです。ところが、彼は理屈として知っているけれど、実際に作ることができない、彼はそうした自分を発見するわけです。

それで今まで小中高大学のなかで受けてきた、また教師になつて生徒に教えている学問、知識は何であるのかを、改めて反省するのです。大学まで出て習つた知識はおばあさんの所へもどっていかない知識でした。象徴的にいえば、企業と国家に吸収されていく知識なのです。微生物のからくりを勉強して、企業に入り、味噌を大量生産するのに役立っていくわけです。大量生産した味噌が今度はおばあさんの手づくり味噌を奪っていきます。大学で勉強する近代科学というものが産業社会のシステムのなかで、企業側に吸いあげられ、大量生産する役割を果たして、結局は手づくりの物質文化の歴史を滅ぼしてきた。そういう仕組みのなかで、客観的には、おばあさんの側でなく、企業の側に自分（の学問）が位置していたことに気づくわけです。

武田さんから民衆文化の復権の展望はあるのかという問いがありました。一緒に考えたい問題です。これは二つに分けて考えたほうがいいと思います。一つは家庭や地域の生活においてどうか。もう一つは学校においてどうするか。私はもっぱら後者の場を念頭においてしゃべってきたわけ

です。それも、きざなことを言えば、教育的観点を前にだして言ってきました。それは、より正直な気持としては、先生がたにもっと学校文化の性格に疑問をもつてほしい、という要求をもっているからです。その底には、子どもたちがおじいさんもおばあさんも文化を作ってきて自分の中に貯えている存在なんだというふうに見直していくような教育をしてほしい、という願いがあります。それにしても、やってみるしかないのではないでしょうか。展望があるからやるのではなく、やってみるなかで展望が見えてくるのでしょうか。

教師としてお前は楽しくやっているか、と聞かれました。授業は思うとおりになかなかいきませんね。私はどうも自分がトクをすることを考えて、授業をやっているようです。たとえば、教育原理の授業では、教科書はいっさい使わず、自給自足で―学生から取材して―学生に返すやりかたをとっています。学生の学校への不満を疑問にまで意識化させたいと思つて、学校への異議申し立てや学校メタファや自己形成にとつて学校とはなんであつたかなどを書いてもらっています。そうしたなかで、むしろ私自身の目がひらかれる、新しい事実を発見するというのができて、それが私の学校論のモトになっているように思います。

もうひとつ、土曜の夜のゼミがあります。今、ある小雑誌『柏樹』に延々とゼミの学生のことを書いています。その

ゼミはいろんな人に来てもらって一緒に議論をする、いわば人間を媒介にし、肉声を支えにした授業です。活字を媒介にしないので、学生諸君は慣れぬうちはたよりないような感じになります。たとえば、私のほうもいろいろな刺激をうけて勉強になります。たとえば、人の話を聞いたとき、私も学生諸君と一緒に感想文を書くのです。くらべ読みしますと、私の文章はコメント風になってしまいうのですが、学生諸君の文章は自分をくぐらせての感想ですので、ハッと気づかされることが多いのです。

半田さんの質問については……。一橋出版のはいちおう別にして、今の家庭科の内容でしたら、僕は自分でも逃げ腰になります。必修の主張は内容の変革と結んで行われるべきだと考えています。民衆の物質文化を軸にした教育内容を組むとしたら、それは男女を区別することなく、ともに生き生きとした関心をもつようになると思います。家庭科の男女共修は制度による分断があるから言わなくてはいけないのでしょ。うが、本質的には、民衆の物質文化は、男も女も共に担ってきた文化でありますから、そのことを具体的に知ってあげば、女に対する認識も変わるだけでなく、男子も女子もやるべきだというようになるでしょう。いや、やりたいな、となっていくと思います。

今の日本の近代学校の構造は、知識詰めこみ型学校の構造

です。知識詰めこみ型学校は最底辺をつくります。このままでは、子どもに救いはありません。たぶん、家庭科も浮かべられません。私にとって学校改革とは知識詰めこみ型からの解放という方向でイメージされるものですが、このように学校を改革する課題はおとなの責任としてあります。

今、ほんとうに必要なのは、学校改造のいろいろな実験をしてみることだと思います。外国の例で、ニールの学校、シユタイナー学校、フレネの学校、イタリアのロディエーの試み、アメリカのフリースクール、学校設置の自由を認めているオランダのやり方。日本でも、トットちゃんをあげるまでもなく、いろいろな（挫折しましたけれど）経験があります。いずれも知識詰めこみ型学校への批判から始まったものです。教育原理の受講生に読んでもらったら、こういう学校に行ったら内発的に学んだらうと一様に感想文を綴ってきた。新しい世界を知ることが日本の学校を批判的に見る目をうむようです。

私は、昨年十一月に自死した学生への追悼文にこう書いたことがあります。「絶望のなかにこそ新たな希望の胚芽が秘められている。それを知ることが学ぶことの奥義ではなかったのか。追いつめられたからこそ生きなおすみちが拓けていく。それが生きることの真髄ではなかったのか」。私が自分分に分けて書いた文章でもありました。（東京都立大学）



〈5〉

植垣一彦

「学校道德」ってなんだ

強いられる内容を技術的にこなしただけの授業は、意外に忘れやすい。これに反して、自分の問題関心を繰り込んで実験した授業というのは、子ども達の発言や表情、その時の雰囲気などもいっしょに、いつまでも印象に残る。

次に紹介するのは、そうした意味に加えて、子ども達の現実が「学校道德」（とあえて呼ぶ）の空虚さを図らずも反証した例として、私の記憶をおそらく容易には去らないだろう。

放送委員会が流す昼の校内放送のクイズ特集「ホントかウソか」に、クラス中で、「ホント!」「ウソだよ!」と応答しながら、私は、以前に試みた授業『「ウソ」について考える』を思い出していた。

区の官許の道德研究部会で、実践記録なるものをやむなく発表しなければならぬ羽目に

なった。三年生を担当していた時のことだ。

事情を知った親しい同僚達からは、お気の毒サマと同情されたり、最もドートクテキでない人が……とからかわれたりもしたが、どうにも致し方ない。

そこで、「道德」という教科を、とどのつまりは「生き方教育」なんだと私流に解釈し、子ども達の現実を接写する授業に仕立てようと考えた。少なくともそのように心掛けて展開した授業『「ウソ」について考える』をひっさげて、初めての道德部会にのぞんだ。

授業の概略はこうだ。

まず、「嘘つきは泥棒のはじまり」というコトワザの意味を考えることを通して、「うそをついてはいけない」という一般規範を確認。次に、過去に嘘をついたり、つかれたりした自分の体験を出し合った。子ども達的全

員が、いずれをも「ある」とこたえたのだが、これは、よく言われるように、「ウソをつく」という現象が、個人の成長史に必ずおとずれる自然過程であるとの了解に立てば、さほど驚くに値しないはずだ。

子ども達は、宿題があるのに「ない」とウソをついたり、「誰ちゃんも持ってるよ」とウソをついて欲しい物をまんまと買ってもらったり、というような過去のリアリティを、実に楽しげに開陳してくれた。

そして次に、「嘘をつくのはよくない」と他者に言ったり、反対に他者からいさめられたりした人生体験を振り返ってみた。

さらに設問が続く。「では、あなたは『ウソ』をつくことについてどう思いますか」。この設問に、私は三つの選択肢を用意した。
(ア)どんな場合にもウソをついてはならない。
(イ)ウソをついてよい場合もある。
(ウ)その他の考え。

子ども達はここでも、全員が(イ)を選択した。私は、「これでは活発な討論が期待できない」と咄嗟に判断して、あえて一人だけ(ア)の立場を採った。とたんに「キビシー!」の声。「じゃあ、どんな場合にウソをついてもいいのか、先生を説得してよ」と挑発した。

子ども達は、ムキになって、こんな場合にはウソをついてもよいのではないかというような相対的な判断を、いくつもぶつけてきた。

たとえば、「カレー屋ケンちゃん」というテレビ番組で、どう見ても似合わぬ洋服をお父さんは似合うと思ひ込み、周囲の誰彼なしに賛意を求めた。お父さんの気持ちに察して、ケンちゃんもお母さんも「似合うよ」とつい言ってあげた。お父さんを傷つけないとするこの場合のウソは、許さるべきウソで、こんなことは自分達の身辺でもしばしばあることだ、という。興奮してこの子が話し終わるか終わらぬうちに、「おせじのウソってあるんだよ」と別の子が補強した。

あるいは、横浜市緑区の民家に米軍ジェット機が墜落した際の痛ましい出来事を例に持ち出してくる子もいた。これには私もナルホドと合点した。全身やけどで入院したお母さんに子どもの亡くなった真実を隠し通して、つまりウソを励ましに転用することで、お母さんを瀕死から救った。これは「ついてもよいウソだ」と彼は力説するのだった。

一定の条件のもとではウソを支持する、という訳である。子ども達の言葉に即していえば、「ウソには、ついてもいいウソと、ついても

いけないウソがある」ということになる。この判断は、子ども達が、一般的な「ウソはいけない」という規範の限界と特殊性を日常生活の中で既に了解しているということである。言い換えれば、規範一般をどんな場合でも正しいと絶対化しないということであって、まさに、ウソの弁証法を子ども達はそれとは知らず握りつつているのだった。

さて、「嘘つきは泥棒のはじまり」で開始した授業は、その反対の規範を示す「うそも方便」というコトワザの提示をもつて落着とした。

ところが、私のこの「授業実践」は、さきの道徳研究部会の水準とは、ついにかみ合うことがなかった。

たとえば、すぐに飛び出した質問はこうだ。「先生のお授業のねらいは、市のカリキュラムで定めた徳目の何番めの項目に当たるのでしょうか」と。一瞬絶句。もともとそんなところから発想していない私は、ただもう目をパチクリするほかなかった。追い討ちかけて次、「御苦労様でした。非常にユニークな授業で……。でもこれは『道徳』の授業ではありませんね。権威の御仁の一刀両断であつた。

「ウソ」についての道徳の授業は、例の「オカミがきた」の羊飼いの少年の話が最良の教材なのだそうです。なるほど、それはそれでいい。しかし、なぜ、へうそにもいろいろなうそがある」と一歩前へ踏み出そうとしないのか。子ども達の不可避の生きる毎日に、なぜ直結しようとしなののか。

なんでも、いまだ成長未熟で純粋無垢な子ども達にそこまで見せるのはなほ危険、とのことなのだ。成長未熟で純粋無垢——おお、これも又ひとつの確かな神話、子ども達の実像は、この神話の遙か彼方で砂煙を立てて格闘しているのだ、砂煙が目隠しになって子どもが像を結ばないのだな、と私は思った。

子ども達の現実的基盤と直結しきれぬところで、「道徳」や「倫理」を云々しても、それは空虚以外の何ものでもないのだ。いやむしろ、この空虚こそが「学校道徳」なのかもしれない、とさえ思えたのだった。

(横浜市立日吉南小学校)



「開示する」 その1

—現場から—

児玉 すみ子

Hの自立ドラマ

「あいつは、不気味な奴だ」というのが、職員室での、Hに関する定評であった。学校で行われることには、無視・無関心、能面のごとく、顔の表情一つ動かさぬHであった。彼に関わる事件や、問題行動が明るみに出ても、みごとにすり抜ける術を心得ているHであった。すべてが、ある目的のために、確と計算されているかにみえたが、それが何なのか、誰にもわからなかった。

一年生の頃の彼は、私の英作文の授業中、腕組みをして、空の一点をみつめるか、机に伏して寝るかであった。それでも、進級にさしかえない程度の成績は、確保する。ある時、クラス全員の英作文をプリントし、小冊子にまとめるために、一度も課題作文を提出しなかったHに、「何でもよい、短かくてもよいから、書く」ように求めたことがあった。二度は無視され、三度、声をかけて、ようやく提出したのは、一枚の紙に、大きく、「矢沢永吉、我が命」と、英語と日本語で書いたものであった。

三年生になったHを、私は担任した。そして、一学期の面接の際、初めて、彼の能面の

うしろに秘められたものを知らされたのであった。それは、次の様な言葉のやりとりから導き出され、開かれたのである。

「毎日の学校生活、面白くないの」
かすかに肯つく。

「自分の、本当にやりたいことではないのね。学校でしていることは……」

深く肯つく。

「君のしたいことは、もっと別にある。それなのに、無理に学校に來ているという感じ……」

「來させられているんだ」

「ああ、自分の意志ではなくね」

「親の意志で……」

「親が、高校ぐらいいは出なきや、というのかな」

「それ、一本槍なんだ」

「うーん、君の意志は取り上げられず、親の意志で動かされてきた……」

「俺は、学校なんか來なくても、ちゃんと生きていけるし、食っていけるんだ。いろんなアルバイトやってきたけれど、勉強なんかしているより、よっぽどいいんだ」

彼は、自分の内に抑えてきたものを、言葉で表現しようと意欲を示していた。あの能面は消え、訴えかけるような表情が、顔に現れてきた。

私も又、彼の思いに焦点をあて聴き入る内に、それを受けとめることのできている自分を感じていた。

「先生だって、学校は大事って思っているんでしょ」と迫られた

時、私は、至って自然に、自分の胸の内を、彼の前に明らかにしていた。

私自身も、学校の中で息のつまる思いをしていること、生きるために学習することの必要は感じているが、学校のために生きているんじゃないと、いつも痛感していること等、私は、卒直に答えていた。

ずい分、後になって、Hは、この時のことを、こう語っている。

「俺は、心底、驚いた。教師が、俺の考えに逆らわず、ケチをつけず、説教をせず、正直に自分の考えをぶちまけてくれるなんて」

しかし、この面接があつて、一ヶ月後、彼は家出をする。関係の悪かった父親との暴力沙汰の挙句、友人を誘つての家出であつた。世間体を気にした親は、夏休みに入つたこともあつて、学校に事実を報せては来なかつた。事のてん末を知つたのは、家出からもどつたH自身の口からであつた。

逗子の浜で、コーラ販売をして海の家で暮らしていたが、ある日、売上金を盗まれる目に会い、警察を通して自宅に送り返されたというのである。

「親元を離れると途端に、仕事探すにも、身元保証人たら何たらで、苦労するんですよ。それでも、コーラ売っている時はよかった。金を盗まれて、俺、初めて気がついた。俺には弁償できる力がない。まだ半人前なんだ。ほんとに一人立ちできる力をつけなきゃ、だめなんだって」

Hは、自らの経験を、私に向かい合つて話すことで、自分を確認しているかのようであつた。それだけではない。当時、シヨートホームルームに行つていた3分間スピーチが間もなく、Hの番に回つ

てきた時、彼は、他の誰よりも堂々と、こう語つたのである。

「俺は、学校というところが嫌いで、ずつと押し通してきた。でも、それも、あと数ヶ月で終わる。その間、俺は、俺なりに学校生活を楽しんでみようと思つている。世の中に出たつて、大変なことは一杯ある。それから比べりや、学校は温室だ。温室には、もう二度ともどれない。であれば、そこにいる間は、そこでしかやれないことをやろうと思うんだ。」

文化祭も、体育祭もやる。勉強もちつとはやる。だから、みんなも、よろしく」

Hの家出事件を、うすうすは知つていたクラスメートたちは、自分たちのできない経験をしてきたHの言葉一つ一つに、心動かされた様子であつた。

文化祭の催物の片附けの際、ベニヤ板を無難作に、ひもで結んで運び去ろうとするクラスメートに、Hは声を掛けた。

「そのままじゃ、危ないぜ。釘を抜くから、そこへ置けよ」

仕事経験の豊かなHの知恵は、その後のホームルーム活動に、いくたびか、活かされたのである。

卒業の日も近くなつて、最後の進路相談の希望者を募つたところ、Hが、名乗り出た。

「親父は、安定している公務員になれて、盛んに言うけれど、俺は、外の仕事が好きだから、タイル貼りの職人になろうと決めている。高校卒業したら、公認の家出をするつもり。いや、これは、先生がいつも言っている自立ってやつかな」

(つづく)

続・ピレモンと

バウキス



ほとんど外出することのない私も月に一度だけ、日曜日に、電車に乗って武蔵境まで出かけます。「モーツァルト」という喫茶店までひと休みしたあと、その近くでひらかれる小さな読書会に出席するのですが、ある日、予備校の講師をしているTさんが笑いながら「例によってうちのカミさんが帰りにぜひ寄ってくださいと言っていますのでどうぞ」と会のメンバーを招待してくれました。「例によって」というのは、Tさんの奥さんがたいへん朗らかな客好きな人で、いままでも何度か私たちをよんでくださったことをさしています。

その日も会のあと七、八人でお邪魔すると、二つの部屋の境のふすまをはらって、すでに飲み物や料理が用意されていました。花瓶には紫の都わすれが活けてあります。部屋の一方に寄せられたソファの上には、まだ小学生の娘さんが二人、小鳥のように肩を寄せて坐りこみ、おもしろそうに私たちをみています。いつも申しわけないですねと恐縮する私たちにTさんは、「いや、うちのカミさんは、こういうことをしているときがいちばん生き生きと精神が働くんで

す。気にしないでください」といい、その横で奥さんも「そうなんですよ、私は。こんどどんな準備をしようかと考えると楽しくてしようがなくなるタチなんですから」と笑っています。

そんなやりとりをしながら乾杯して、ふと坐った膝もとをみると、細長いテーブルの片側の脚の下に、子どもさんのものと思われる本があてがってあります。二部屋つづきに並べたテーブルがうまく平らにならなかったのでしょうか。（おやおや、はやくもギリシア神話の世界におれは招かれたぞ）と私はうれしくなり、ひとり心の中で笑いました。

フリュギアの野に住む貧しい年よりの夫婦、ピレモンとバウキスは、ある日、それと知らずにゼウスとその息子ヘルメスを家に迎え入れ、心をこめてもてなします。夫のピレモンは水をよくやった菜園からキャベツを摘み、妻のバウキスがふるえる手で持ち出したテーブルは足の一本が不釣合に短かい。その足らないところを瀬戸物のかけらでうめあわせ傾きを直してから、バウキスは、平らになったテーブルをみどりの薄荷でふきます。

Tさん夫婦は三十代半ばの、しかも年齢よりはずっと若々しくみえるカップルですし、別の読書会では二人そろって柳田国男を読んでいるということですから、「愚直」ということばがむしろふさわしいフリュギアの野の老夫婦とはずいぶん対照的ですが、テーブルの脚にあてがわれた子どもの本をみた私は、（ああ、ここにも現代版ピレモンとバウキスがいる）と思わずにはいられませんでした。

Tさん夫婦の仲の良さに刺激されたのか、高校の教師をしているSさんも電話を家にかけて奥さんをよび、座はますますにぎやかに

なつていきます。

さてフリュギアの老夫婦は、粗末なテーブルの上にオリーブの実、山ぐみ、チーズなどをならべ、熱いシチューをはこんで精いっぱいのもてなしをしているうちに、ふしぎなことに気がつきます。壺の酒がいくらついででもなくならないのです。思わず床にひれ伏す二人をゼウスは小高い丘にみちびいていきます。あえぎながらようやく頂きにつこうというときなにげなく二人がふりかえると、野はいちめんの水におおわれ、旅人たちをこぼんだ村人の家はその下に没し、自分たちの小屋だけが丘の上にぼつんと立っています。するとこんどは、そのみすばらしい小屋がみるみるうちにりっぴな神殿にかわっていく。果然と立ちつくす二人にゼウスは、「望みのことを言うがよい」とやさしく語りかけ、老夫婦はしばらく話し合ったあと、おそろおそろ次のように言います。

「神さまがた、わたくしどもを、この神殿の番人にとりたててくださいませ。それから、もうひとつ。いままでわたくしども、こうしてなかよくくらし、まいりましたが、このうえは、どうか、二人とも、おなじときにいきをひきとらせていただけませんか」と。

私も四十の半ばを過ぎ、あきらかに人生の折り返し点をまわりました。そして、これからの自分のテーマは、どうやってうまく死ぬかなどと思っているものですから、妻ともよくそんな話をします。すると妻は、「絶対に私の方が先に死ぬんだからね。もうそう決めてあるんだから」と宣告するように言います。私は私で、「おれが死ぬときに、横にだれかいてくれないとやっぱりうまく死ぬそうもないから、おまえ、たのむよ」と言ったりしますが、考えてみれば、死ぬときは一緒に息をひきとらせてくださいと願う大昔のフ

リュギアの老夫婦には、人生のある理想のかたちが表現されているように私には思われます。

老夫婦のつましい願いは、この上なく美しいかたちでかなえられます。ある日、神殿の石だんに腰かけて思い出話などをしているうちに、パウキスがふと見ると、ピレモンのからだから木の葉がはえ出している。ピレモンもピレモンで、おなじくパウキスが木の葉でおおわれはじめたのに気がつく。

「木のえだは、やがて、二人の顔のあたりまでかぶさってきました。それでもふうふは、おたがい口のきけるあいだは、わかれをいいあつていました。そして、さいごに「さよなら!」といいかわしたとたん、ふたりの口は、それぞれ木のかわにびつたりとおおわれて、それっきり、見えなくなってしまったのです。」(矢川澄子訳)

まだ若いTさん夫妻や私のまわりで結婚生活を送りはじめた卒業生たち、さらには早くも離婚問題に直面している若き友人たちにこの話がどう感じられるのか私にはわかりません。が、人生の後半を死にむかつて歩いている私にとって、ピレモンとパウキスの最後の変容ほど激しく心をそえられるものはありません。

私は、うっとりするほど美しく晴れわたった六月はじめての午前これを書いています。ピレモンとパウキスの思いがけない変容は、こんな午前に、ギリシアの丘でおこったことにちがひありません。思い出ばなしに耽るピレモンのからだはいつか大地に根をはりはじめ、パウキスのさしあげた腕はしなやかな枝と化し若葉さえ生じはじめる。なんと魅惑的な死、そして甦りだろうか。

私は窓をあけはなつて風を入れ、フリュギアの丘に立つ二本の木をはるかに思います。

＊ 学習の主人公たち ＊

法律ってなんだ

大阪府立高津高等学校の生徒たち



あさまきかん車。

え・寺門賢剛

〈一年生〉

高野 賢治

法律についてといわれても、それじたいあまり知らないし、これまでそんなに考えたことがなかった。義務教育九年間においても、何の気なしに学校へ行っていたと思う。こんな考えは僕だけかもしれないが……。それだけ法律とは直接法律にかかわっていない人には本当の法律というものを理解されていないと思う。だから国会議員とか司法関係の人たちがしつかりしないといけない。憲法第9条（戦力の不保持のこと）はその点多くの人が疑問をいだいている問題ではないだろうか……。

中野 文子

幼い時友達といっしょにする鬼ごっこも子供同士で約束したルールがありました。それを守らなければ必ず何らかのかたちで罰則が

あり、それを守ってこそ仲良く遊ぶことができ、円滑にすすんでいく……。法律も結局この鬼ごっこのルールみたいでただ規模が大きいくだけではないでしょうか。家庭という単位で行い、問題が起これば法律というルールが、円満に解決する。そして生活というゲームが円滑にすすむ。だから法律というものは人々の生活を裏から支える大切な潤滑油ではないかと思います。

藤生 考志

法律とは国民の秩序を守るために政府・国会が正しく作るものであるが、最近政府が思いのままに悪い法律を作っている。前に出た医療費を本人がもっと多く負担する内容の法律がその例である。法律とは国民の秩序を守るためにぜひとも正しい法律を作らなければならない。悪い法律は国民の秩序をみだす

もとなるので、絶対にやめなければならない。悪い法律で現在あるものは何かの手を加えてよい法律にしなければならない。

稲垣 克彦

法律とは、政治家が自分の票を得るために自分の選挙区、あるいは本人が有利になるように決めるきまりである。こう書くとうるさくは、私に知っている範囲ではそういう例が多数である。公職選挙法などはそのいい例だろう。比例代表制などという少数意見を踏みにじるような方法を採用したのは、言わずと知れた自民党である。現在定められている法律の中で、どれだけ実際に役立っているか、甚だ疑問である。

藤田 明子

法律とは、秩序を守るためのものであつて、必ずしも実生活とは結びついていない。例えば男女平等といっても共働きしている家では女性の負担が大きいし、結婚は両性の合意のみで決まるといえるが、実際はそうでもない。法律は、人間の理想だと思ふ。法律が実生活に結びついていないのは、難しい言葉で書きすぎているのではないかと思う。

辻尾 明浩

こないだの韓国の学生デモで学生が多数起

訴されたとニュースでいつていた。父はそれに対して、なんで起訴されたのかをニュースにせなあかんねん、どんな悪法でも法律を破れば起訴されるのは当たり前だ。と言った。私もその通りだと思ふ。現代社会においては減多にむやみな法律は作れないのだろ、うし、そういう法律は是正できるのだから、法律である以上その法律を批判しても守らなければならぬ。元来法律とはそういう物なのだから。

〈三年生〉

喜田 昭子

現在日本には確かに『よい法律』がたくさんあるが、一部の面においてはそれが「実施されるもの」より「たてまえ」になっているように思ふ。公害問題一つをとっても抜け道がある。被害者の利益になるような法は、あつてなきがごとしである。弱い人を本当に守れる法は少ない。そのかわりに、指紋押捺などという人権侵害を無視した法もあるのだ。全く現在の法律には「体面」「たてまえ」こういうものが多いように思えるのだ。

井上 和朗

人間は、自己本位に自由になりたがる。だから暴走すれば社会が成り立たないので法律は

社会の秩序を守るために絶対不可欠である。

しかし、社会の秩序のためだけに法律が暴走すれば本来の意義である個人の権利を守るということを脅かしかねない。だから法律は個人の尊重の上に成り立たなければならぬ。また、人間が進歩するにつれ、法律は減つてゆき、その内容が心の中に常識として存在してゆくのではないだろうか。

泉 ユカ

法律は元は法なのだ。仏教では法は「たもつ、よりどころ」が原意でそこから多義を含むに至つた。法律はその文章で限定された一面的人格で人間と関るが太古の法・道徳にもどり、それが求める全人間的人格が即ち法律となればなあと思ふ。この私の考えは宗教的なものと人には映るかもしれない。世の中はきれいな事ではないし、法は自分を縛る物、としか考えぬ低俗な者が多い。夢の又夢だが自分の行いが法そのものとなり、一人歩き成文法のなくなることはないのか。

西山 明宏

法律とは、人間が集団生活をしていく上で、守らなければならない最低限度のことである。これを守らないと、集団生活がうまくいかない恐れがある。

でも、実際にはすべての法律が完璧に守られているとはいえない。特に未成年者の飲酒などは多くの人がしていることだ。しかし、そのことで世の中がそれほど乱れているとは思えない。そういう点から見ると、法律とは、社会の一つの理想像ともいえると思う。

北村 真美子

人間が生活していく上で、幸福に、安心して生きていくために、作られたきまりだと思ふ。人間は生まれながら自由と平等と権利を持つていけるけれども、その自由、平等、権利が濫用されず、また損なわれないように、一つの規準となっているものが法律ではないかとも思われる。と同時に社会的秩序を保つための規則であるのではないかと思ふ。

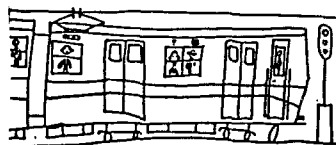
四宮 尚一郎

「法律」。この言葉をとてもとある広辞苑で調べてみると、「社会生活維持のための支配的な（特に国家的）規範」とある。すなわち、法律とは、我々が生活するうえでよりどころとすべき決まりである。しかし、一部の人間による不当な法律が国民に損害をもたらす危険性も否定できない。法律は必要不可欠なものではあるが、その成立に関して国民は厳しい監視の目を光らせる必要がある。

＊ 学習の主人公たち ＊

映画「指紋押捺拒否」を見て

横浜市立O中学校三年生の子どもたち



ちかてつ 金座

え・寺門賢剛

今の子どもたちが、在日韓国人・朝鮮人に対して、どういう感想・認識を持つのかを知り、今後に生かしたいと思って「指紋押捺拒否」の映画を見せました。見終わった後の子どもたちの感想の一部を紹介します。

(M・K)

。やっぱり、何も悪いことをしたわけでもないのに指紋を押させられ、警察の人にもまで自由に見られるなんて、自分がそういう立場に立ったら……と思うと、指紋を押したくないと思うのは、当たり前だと思いました。

。日本人だけが住みよい「日本」じゃなくて外の国の人たちも日本人と変わりない生活ができるような「日本」にしてほしい。指

紋をとるということは、すごい差別。でも差別にしないために日本人の指紋をとると言ったらいやだ

。私は映画を見て、あんまり意味がわかりませんでした。なんか指紋がどおーのこおーのっていつてたけど。でも最後の所、すごく感動的でした。少しかわいそうだなあって思いました。やっぱり、つらい気持ちがよくわかりました。もうちょっと日本人もわかってあげるといいナアツて思いました

。難しくてよくわからなかったけれど、辛江夏さんの一言が印象強かった。よくは覚えてないが、たしかこのような感じだったと思う。「私の体には朝鮮人の血が流れていく。言葉だって日本語しかわからない」たしかに体は朝鮮人だけど、生まれも育ち

も日本なんだから、日本人そのものとして扱ってもらいたいと思う。指紋を押させるのは完全な差別

。指紋のことについて、差別だ自由がない、人権の尊重なんて言ってたけど、私は別に差別ではないと思います。どうしてかという、日本人と外国人は違うからです。差別とか差別じゃないとかそういうんじゃない、根本的に国籍の違うもの同志なのだということをいいたいです。その国籍の違う人が日本国民と同じように指紋を押したくないといっても、その他のことも日本人と同じようにしなければ、それは認められないと思います。でも、それはできません。できる最後の手段は国籍を日本に変えることです。でも、それはやはりつらいことだと思います。だから、やっぱり指紋を押した方がいいと思います。それは差別じゃないし……差別だと思つてないし……。ただ国が違うので、そういうふうになるだけで、別に変な目で見てるわけではないのです。だからそう深く考えなくてもいいと思います

。今までこのこと(指紋：制度)をあまり知りませんでした。日本に住む外国人を日本

国民としてなかなか認めない……ということは知っていたけど、指紋のことを知ってびっくりしました。辛仁夏さんの嘆願書にもあるとおり、これは完全な差別行為だと思います。朝鮮人、韓国人に対する差別は私も絶対になくした方がいいと思います。この問題は日本の他の問題にかき消され、しかも僕らには関係ないので、大した問題ではないと思っていたが、外国人に対しては重大なことだと分った。僕は日本人なので、日本に味方したい気もあるが、日本の法律が絶対間違っていることは明らかだ。もう一つわかったのは、指紋押捺は、大きな問題の一つであって、外国人登録法がどうもおかしいということ。指紋押捺問題を、外国人登録法の問題へ拡大するにはどうすればいいのか？ はつきりとは分らないが、まず、この問題がこの頃重視されたのをきっかけに、日本中のすべての外国人が立ち上がれば、法務省、国としても真剣に取り組むようになると思う。そして最後までくじけずに戦いぬいてくれればこの差別の法律はなくなるのではなからうか？

。まず思ったのは、日本という国は昔もそう

だったけど、どっかの部分でいつも差別をしているなァーと思ったことです。役所の人の話では、押した指紋は別に使ってないということだったけれども、そんなことならやめればいいと思う。やることについての事柄で「指紋を押すことによって、登録証がより確実なものになる」みたいなことがあるが、それは「外国人が信じられない」と言っているのと同じことになると私は思う。だから日本国も、人権をとなえているのだから、それなりのことをやってほしいと思う。

。日本人で最低！

憲法に基本的人権の尊重とあるけど、あれってウソだと思ふ。基本的な人権っていうのは日本人だけのことじゃない！ この世に生きている人みんな……日本人、外人なんて今やナンセンス！ 自分が外国で同じ目にあつたらどーなんだYO!? って、あんな法律作つた奴に言つてやりたいYO ホント あんな人権無視の法律、絶対反対。私は警察には警察の義務というものがあるので、警察の人には文句を言うのはすじ違いかも知れませんが、私は警察のやり方が氣

に入りました。

指紋をとるということは、誰でも悪人にされた気分でないやなものです。それをただ他国からきたとゆーことで、あーゆう特別なことをしなくてもよいと思いますが、日本人としては、日本を安全な国としてゆくには多少の手続きはあると思います。

同じ人間でも、住んでいるところによって、法が決められていて、それはしたがっている人々が、他国の法にしたがって生きてゆくのはむずかしいことだと思ひました。

。私は国の政治に対して疑問を持ちました。明らかな差別です。今多くの在日外国人が日本で働き、日本経済を支えています。その人たちを見かけや国籍が違うからと言って、差別するのは人権の侵害です。日本国憲法は日本人のためにあるのではなく、日本に住むすべての人に対してでなければならぬと思います。もし、そうであれば差別を作るような法律はできなかったと思います。そして、私たちもただ見物するだけでなく、積極的に参加しなければならぬと思ひました。

＊ 学習の主人公たち ＊

家庭科を学んで（２）

大阪府立泉尾高等学校の生徒たち



この学校へ転動してきてまる二年が過ぎました。三年生の女子生徒は、全員一年、二年と教えました。その中の一人が最後の課題提出の時に、次のような感想を書いてくれました。一年の時には授業中、そっぽを向いてちっとも授業にのってこない生徒でした。二年になってだんだん態度が変わってきたことは知っていましたが、こんな感想を書いてくれるとは思っていませんでした。

私はこれを読んで目頭が熱くなってしまいました。正直に言うと、私は家庭科の教師になりたいと思っただけではありませんでした。もちろん、教壇に立つかぎりは、一生懸命やらねばとがんばってきたつもりです。家庭科とは：と、毎日考え続けてきました。この日初

めて私は、他教科ではなく、家庭科の教師になってよかった、と思いました。今までのいろんなこだわりが消えたような気がします。

◆一年を通じて、この中絶や妊娠、そしてそのしくみ、幼児の発達などが一番むずかしかった。でも、一人の人間が、一つの命がたん生するという神秘的な尊さが、少しだけわかったような気がします。家庭科の授業なんてくだらないと思っていました。人間として生きていくためのセオリーを学んだような、そんな気がします。考えようによっては、数学や英語などより、家庭科のほうが、私たちにとって、とても重要ではないかと思うようになりました。

女子だけが家庭科を学ばず、男子にも、特に母性保健のところは、いっしょに学んでい

ろいろ意見をかわしてみたってです。とにかくとても楽しかったです。来年ないのが、とても残念。

この二年間、いろいろありがとうございました。私も人間らしい生活をしていこうと思っています。

この学校で何とか男女共修できないものか、今資料などをそろえて準備しているところです。生徒の意識は、授業の中で少しずつ変えていけると思うのですが教師の意識のほうがなかなか変わりにくいかもしれません。家庭科の授業内容を少しでもわかってもらえるよう、PRしなければ、と今その方法を考えているところです。

二年生の最初と最後の授業に、同じアンケートをとりました。非常勤教師として来ていただいている池田八千子さんにも協力してもらいました。（浅井由利子）

〈家庭科は〉		四月		二月	
				（％）	
ア、男女一緒に学ぶべき		18・3		54・2	
イ、女子のみでよい		27・3		17・6	
ウ、どちらともいえない		53・4		27・3	
（無回答）		1・0		0・9	

アの理由

。女子だけがすればいいというのは今の時代ではもう古いと思う

。男子も小学校の時はやっていたのに、中高になってしなくなるのはおかしい。男女が協力して何かするのはいいなあと思うからです

。男性の一人暮らしや離婚が増えてるので男子も家庭科を学ぶべきだと思う

。この一年間の家庭科の授業内容は従来の「家庭科」(料理・手芸などの)とはちがって男の人にもとても大切で知っていてほしいものだと思う

。男子にも仕事のこと、老人問題、住居などを教えたほうがいい。将来役立つと思う。

こんなことを男子がどう思うか、女子がどう思うか話し合いたい。女子だけわかっていても男子が何にもわかっていなければ、だめだと思う

。家庭科は「身近な社会科」だと思った。女子だけがやるべき学科ではないと思う

イの理由

。今までそうだったから

。男子はやる必要がない

。男子がおればやるさくいていやだ

。女性が家事の中心だから

。一つぐらい女子だけの授業があってもよい理由

。男は外で働くものだからいらなと思う反面、老人や住居の問題などもっと知ってほしいとも思う

。家庭は男女が築いていくものだと思うが、家庭内の仕事は主に女子がやることだから

。男子も一人暮らしをする場合必要と思うが、編み物などは別に必要と思わない

。男子も家庭科の好きな人はいるし、きらいな人もいるから

へ一年間家庭科を学んで

。家庭科というのは調理や被服を実習するようなことだと思っていたけど、家族関係から老人問題、住居など、いろんなことを習って、あんまり理解できていないけど、家庭科というのがどういうことか少しずつわかりかけたようです

。今まであまり気にしないで通りすぎてたものでも、授業でとりあげられたことによつて初めてその重要性を知り、あらためて考え直すことができたのでよかったと思う。

少し複雑でわかりにくいものもあったけど、それなりにこなしてきたつもりなので、二年になつてもよい学習がしたいと思う

。日頃、新聞なんか読まなかったので、どういふことがあるか全然わからなかった。でも新聞づくりやスクラップブックを作つてよくわかった。良かったと思う

。中学の家庭科とは180ちがった型で、とっても難しかったです。これなら男女ともに学ぶべきだと思う。これから多くのことを知つて、少しはかしこくなりたいです

。いろんな楽しい興味のあることを学んでよかったと思う。二年でどんなものが学べるか楽しみだ

。中学の家庭科とちよつとちがったので、しんどかった。でも、生活している今の状況を勉強したりして、今までより多く新聞もみるようになった

。家庭科といつても中学校で学ばなかった職業や老人問題・消費者問題という高校の家庭料は幅広いなあと思った。今まで何とも思わなかった問題など、あらためてやってみると考えてもいなかった答えなど返つてきておもしろかった

。自分の知らなかったことがわかりよかった。ごちゃごちゃしたプリントが多いのもしんどかった

。スクラップブックがしんどかった

指紋押捺を拒否して

蔡 和美

去る六月八日、東京都北区役所において、外国人登録の際の指紋押捺を拒否しました。私は、在日中国人三世です。

十四歳の時から（今は十六歳以上）、三年ごとに（同五年ごと）、押させられてきた指紋。左手人差し指の腹いっぱい、ベツトリと黒インクをなすりつけ、グルリと回転させてとる。そして手渡される「外国人登録証」。いつ、どこへ行くにも持ち歩かねばならない。「外国人なのだから仕方がない」と、もろもろの社会的な差別もろとも、受け入れさせられてきたものです。

四年前に、北九州の十四歳の韓国人少女が、指紋押捺を拒否したという記事を読んだ時、「そんなことが出来るのか」と新鮮な驚きを覚えました。そして、この間の押捺拒否の闘

いの中で、押捺制度の欺瞞性が次々と明らかにになり、その本質が見えて来る中で、「私はどうするのか」が問われました。

一九五二年に制定された外国人登録法に導入された指紋押捺義務は、当時、在日朝鮮人・中国人からの強い反発をうけ、三年後にやっと実施されました。又日本人にもこれを行おうとしたのですが、結局立場の弱い外国人にだけ課されることになったのです。さらにさかのぼると、「犯罪者」以外の指紋制度は、日本が中国侵略を押し進めていく上で、「満州国」において始められたのです。

法務省がくり返し主張している、「指紋による同一人性の確認」は、全く行われていないこと、とられた指紋は、もっぱら警察が治安管理のために利用していたことが運動の中から明らかになり、さらに驚いたのは、「指紋一つにつき七〇円」の特別手当がつけられていた自治体もあったというのです。

こうして、「指紋」は、在日外国人に対する差別・抑圧・管理の象徴としてあり、「日本がイヤなら国に帰ればいい。さもなければ、日本に帰化すれば」と富田大阪府警外事課長の暴言にも現れた、差別的・排外的な日本社会のシンボルと

います。

私にとって、「指紋」の問題は、在日中国人として生きていく上で、避けては通れない問題となりました。「屈服」や「同化」ではなく、「朝鮮人が朝鮮人として」「中国人が中国人として」尊重され、国籍や民族が違っても同じ人間として認め合い、共に生きられる豊かな人間関係を、どのように作っていくのが、問われているのだと思うのです。

七月からの三十七万人にものぼる大量切りかえを迎えて、拒否者への再入国不許可（日本から一步も出られない）、さらに「5・14通達」（①新しい拒否者には外国人登録証を交付せず、一ヶ月間ごとの期日指示書を出す②入学・就職・仕事上など生活していく上で必要な日本人の住民票に当たる登録証明書に「不押なつ」という朱印を押して出す③拒否後三ヶ月したら自治体は即告発しなければならぬ等）による生活を脅かしての弾圧に抗して、私たち自身が、どれだけ声を上げられるか、又拒否者・支援者一体となった運動をどれだけ広めることができるのか、今、指紋押捺制度撤廃、外国入登録法改正への闘いは、大きな山場を迎えています。

あなたのそばにいる人に、是非この問題を語りかけてほしいのです。一人一人が変わらなければ、この運動の広がりも作り出せないでしょう。

拒否の後、たくさんの友人から、励ましの便りや電話をいただきました。一人が又一人に話しかけ、身近にいる友人たちと、この問題を考える集まりをもつことができ、又遙か鹿児島から届いた便りに、胸を熱くしました。

（多くの人が）知らされずに、そのままですごしていることが、本当に残念ですが、語りかければ通じないことはない。つながるたしかなものがある。……日本で育った中国人であるあなたと日本人の私との間に育ったものが、知らないでいる人たちに語りかけるエネルギーになると思います。……押捺拒否の問題は、在日中国人であるあなたの問題であるばかりでなく、そのような人と共にある日本人としての私の問題でもあると思います。……きっと、子供たちの世代にもひきつがれるにちがいないと確信します」とありました。

私は、こうした多くの日本人の友人を得られたことを、本当にうれしく幸せに思います。

一つ一つの小さな拒否をつなげ、共に考える多くの仲間と私も一緒に進んでゆきたいと思います。その輪はきっと広がっていくことでしょう。

法律と私たち

富岡 恵美子

弟の結婚式のことだった。弟は弁護士、新郎・新婦の父親も弁護士なので、来賓の多くは法律関係者だった。

「新郎が弁護士として大成するかどうかは、新婦の内助の功にかかっている」「新郎の仕事は、なかなか厳しい。自宅で夕食をとれるのは、一月に一回が精々でしょう。新郎の健康に注意して、仕事に専念できるようにしてやってください」などの祝辞が相次いだ。どれも、男が仕事に専念できるように女は家庭をしっかり守るように、と言うのである。新婦だって、仕事もあり、趣味もあるはずなのに、家庭は二人で創るものなのに。

憲法で男女平等がうたわれて久しい。しかも、憲法二四条では「婚姻は、……夫婦が同等の権利を有することを基本と

して、相互の協力により維持されなければならない」とわざわざ述べ、関連する法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して制定するよう規定している。来賓の弁護士たちは、これらの法律を十二分に知っっているながら、「女の幸せは結婚、女は家庭」と信じてこれを新生活のはなむけにしているのだった。

このような性別役割分担の固定化こそが、まさに性差別の源である。だからこそ、女子差別撤廃条約では、差別撤廃のために「性別役割分担の変更」をうたい、世界行動計画や国連婦人の一〇年の活動のなかで、この点を訴え続けてきたのだった。でも、この訴えは、いまだ「人権擁護と社会正義の実現」を理念とする弁護士たちにすら届いていないのだった。法律上男女の平等がうたわれていれば、即平等になるとは、いえない。平等の実現は、私たちが「平等とは何か」をどれだけ厳しくとらえ、いかなる差別も許さないかにかかっている。人権教育や平等教育不在のなかで、性別役割分担意識が、未来を創る子供たちにまで浸透することを許してはならない。家庭科の男女共修や男女共学を通して、家庭を男女で担うことを学び、相互理解を深めてゆかなければ、いつまでも、性差別は続くであろう。

夫が司法試験の受験生、妻が働いて夫を扶養しているカッブルがあった。マイ・ホームを建てるため、妻が銀行融資を申し込んだが、拒絶された。理由は、「妻は現在働いており収入も融資基準に達しているけれども、女はいつ退職するかわからない。だから、融資できない」というのであった。まさに、「女は家庭なのだから、仕事は腰かけだ」ときめつけている。家庭責任を全部女に背負わして、職業教育不在のなかで、女が働き続けることは難しい。そして、やむなく退職することを理由に、女は勤続年数が短いので重要な仕事には配置できない。教育訓練も平等にはできない、と差別を合理化しようとする。

性別役割分担を変更し、男女共家庭責任を担うことのできる労働条件を獲得してゆかなければ、家庭や職場での男女平等は実現できないであろう。そして、職場でのあらゆる差別を禁止し、かつ差別した場合に制裁を課すことと共に、差別された者を迅速に救済できる措置を講じることをしなければ、建前だけの絵に描いた餅になってしまう。

「男女雇用機会均等法」は、絵に描いた餅にもなっていない不十分なものだけど、男女平等を求める運動のなかでこれに沿う法律を制定させ、運用させてゆきたいと願っている。

(弁護士)

蔡和美さんを支援しよう！

川名 はつ子

We 城北の会では六月十五日、「学校給食を考える第2回」土、指紋押捺拒否を支えよう」の集まりを持ちました。四月の例会にお招きした北区立浮間中の栄養士太田卓さんにアンコール。学校給食の歴史と現状をうかがったあと、私たちの望む学校給食について話し合いました。城北の会を初めから担ってきた蔡和美さん(中国籍)が、六月八日に北区役所で指紋押捺を拒否したため、この日の二次会は蔡さん宅で、「指紋押捺拒否」のビデオをみて、彼女の闘いをどのように支えていくかの話し合い。この問題も、多くの日本人の頭上を通りすぎていつてしまいたいような……。でも、いつも温厚で控え目な蔡さんが拒否に踏み切ったことで、私たちも無関心な周囲の人々に語りかけていく勇気を得たような気がします。We の会として、蔡さんの支援に取り組めないものか。学校やPTAや社会教育講座で「指紋押捺拒否」の上映会などできたらいいなあ。でも、そのためには、誰にどのように働きかけたらよいのか、など考えています。全国の読者の皆さんもご支援を！

『傷つく権利』

内村 章一郎

傷つく権利・誰もが持っている・最も大切な基本的人権。人は傷つくことによってのみ人となる・傷つくことができないければ複雑な機械。人は愛によって愛を学ぶのではない・愛がなくとも傷つく者として育ちゆく・傷つく者と・育む者との出会いによって架けられた橋を・大切なものと思い・守りたいと祈るとき・傷つくことのできぬ者をも傷つけるほど偉大な・人が愛と呼ぶ何かが聞かれる・信じる者だけが傷つき・傷つく者だけが悲しむ・そして悲しむ者だけに・愛のしらべとの出会いが訪れる。

公務員である私は、憲法の精神に基づいた法律によって定められたとおりの方法で福祉に携わっています。貧困と言われる日本の福祉も、一昔前とは比べようもないほど充実した

生活保障を実現しています。しかし、超近代的なホテル並みの設備の中で、似た表情をして生活する障害者や、生活保護に頼りきって働く意欲を無くした人々と接するたび、私たちはどうしようもない袋小路にいることを感じます。「これが福祉なのか？ 我々が守ろうとしている基本的人権とは何か、いかにすればそれを守れるかという基本的な問に対し、〈住民のニーズに答え〉という美名のもとに目をつぶってきただけではないのか？ 我々は大切な何かをそっくり見失っているに違いない……」

A・T（アサーション・トレーニング）という対人関係の訓練があります。自己表現を個人の持つている基本的権利としてとらえ、適切な自己表現法によって、他者も自分も生かしていくける人間関係を、一人ひとりが現実の生活の中で築いていくことをめざした実践的な訓練です。そのA・Tがあげている基本的権利の一つに、「失敗する権利」があります。〈誰もが、完全ではない。完全ではない以上、失敗は常にあるものである。試行錯誤や危険のある行為にいとむことによつてはじめて人は成長していく。過ちをしたら、その結果をひきうければよい。失敗は失敗であることを理由に非難されることはない。失敗は個人の持つ基本的権利である。〉あた

りまえのことを改めて言っただけのことですが、今日の福祉は失敗する権利のようなものをどれだけ大切にしているでしょうか。

「患者を苦しめる状態にすることが治療の目的だ」と象徴的に表現する心理治療者がいるように、めぐりあつた悲しみ苦しみは、逃げることによって解決するようなものではなく、ただそれ自身を生きることによってのみ乗り越えることができるものようです。事実心理的な悩みの多くは、うまく苦しめないために起こっています。「傷ついた」という訴えはたいいてい、客観的には「傷つけそうだけど傷つけない」ということを意味しているものです。そして、それ以上に大切なことは、苦しみなどの否定的感情をとまなつて表現される現象の多くは、人間形成の最も本質的なところを担っており、かつ、幸福感や喜びといった肯定的な感情のもとになるものでもあるということです。苦しみや悲しみは、いかにそれをうまく生きていくかだけが問われるべきものだと思います。悲しむ能力を失うことは、人間性喪失の危機であり、苦しむことができれば生産的な活動を行うことができます。逆にうまく成し遂げられた苦しみは最高の喜びであり、悲しみの中に埋没できることは一種の至高体験へと導いてくれるのです。私たちは暮らしの中で、苦しみや悲しみを育てるこの意味をどれだけ大切にできているでしょうか。

人間について考える際最も重要なものは、傷つきという精神現象だと私は思っています。傷つくことは、(1)最低限の肉体的安全と食糧の供給、(2)同一人物からの継続的なほどよい受容による信じる体験、(3)傷つき方の文化的学習、(4)傷つきを見守ってくれる人の存在、の四つが共に保障されることによってはじめて実現することができます。現代の福祉はこの(1)のみしか行っていない。安全に管理されただけの環境の中では、傷つくチャンスを探すことは難しいのです。(2)(3)(4)のない福祉は不毛の努力となります。そして、真の福祉とは、自ら傷つくことのできない者をも心のネットワークの中に包みこんでゆける力を持ったものではないかと思っています。しかし、悲しみのようにその過程に否定的感情体験を含むものは、最大公約数的で割り切った表現を必要とする法律で表現することは難しいことです。法の整備に頼るのではなく、傷つきを育める文化を築いていくことが最も大切なことだと考えます。そしてそれは、日々の暮らしを見つめつづけることによって始めて可能なことではないでしょうか。

悲しみは氷ゆつたり氷堂々としているのがいい氷悲しみがもえ出づるとき氷二つの焰は氷ともに揺れることができるのだから。空のような悲しみは氷煩惱を焼き尽くし氷海のような悲しみは氷時の鎖を解き放つ。

沖縄反戦ツアーに

参加して

横山 れいこ

観光コースでない沖縄、単なる島めぐりではなく明確に戦争をみるための旅ということでうまれた私たちのツアーは、十五名の参加者で三泊四日の日程で行われました。

初日、観光客のあふれている守礼の門を素通りして、すぐ近くの司令部壕跡へ。今は中もくずれ鉄格子でさえぎられた変哲もない所でしたが、うつそうとしげる木々が一本もなくなったのだと聞いて思わず木々をみあげてしまう。次は陸軍病院跡へ。畑を通して少し小高い場所に、石塔が二つ。同じように今は雑木林になっていました。

強い日差しにわたしは、'83ピースボート（平和の船）で行ったサイパンを思い出しました。どちらも夏をおもわせるような強い光と不思議な静けさ。そして戦争。話にきく四十年

前と現在の場合が同じだという実感。そんな思いは糸数の壕により鮮烈になりました。「壕」とはよく耳にし、戦争の時のかくれ家だとは知っていましたが、東北育ちのわたしにはよくわからないものの一つでした。沖縄の人の案内でみんなが懐中電灯をもって糸数の壕に入ったのですが、暗くて水がしたり、下はぬかるんでとても懐中電灯なしには入れないだろうと思われるようなところでした。それでもとても深く、まだ四十年前のものが残っていると聞いて初めて、ここで生活したんだと理解できました。実際かまどが形のまま二、三残っていましたし、木やくつの底等が泥の中からみえることもありました。

それにしてもこの泥のぬかるみ。水が流れているところもあり、立って歩くのさえおそろおそろなのに、ここで寝たとは！ 日の光の全くささないこの場所で生活したとは信じられない思いでした。みんなで懐中電灯を消し、黙禱をさげたのですが、水の流れる音が響き、思わず目をあけたわたしに、目を閉じていた時と全く変らない暗さがとびこんできて衝撃をうけました。徹底した持久戦によって生じた数多くの犠牲。住民犠牲を伴ったという事実が沖縄戦とはなんであつたのかを物語っているとくり返し聞き、弾丸をうちあう戦争

とは違った戦争をそこにみたような思いでした。

沖縄の友人が朝電話で、あそこに行かなければ沖縄へ来た意味がないとまで念をおした県立平和祈念資料館。それまで多くの木々や緑でおおわれた土地を通ったことであつたのだらうかという思いは、資料館に入って消しとんでしまいました。大きな地図があり、米軍の上陸個所に大小の赤い船の形がおかれ、沖縄が線でくぎられていました。その下でビデオが三台動き、当時のフィルムを回し続けていました。銃弾でなぎたおしていったのだという言葉が改めて思い出されました。二階は証言の部屋。沖縄戦は住民犠牲を伴ったものとして特異であるという。それらを最もよく知ってもらうには、住民一人一人の体験こそ必要だとして集められたのだという。全部はとも読めなかったけれど、どれを読んでもなまなましくまるでわたしが追いかけているような怖さを感じました。

その中で忘れられない言葉。「たとえ十分でも五分間でもこの世の命を長らえようと食えないもののみこんだ」と。この言葉にふれ、わたしは「生きる」ということはそんなに大事なことだったのかと何度も何度も思いました。出口の近くにならなければならないようにつるされた白い洋服がありました。通りすぎかけてのぞいた案内に、「パラシュートで作ら

れた花嫁衣裳」とあり、とても胸をつかれました。花嫁衣裳。確かに白い服で胸にフリルがついていましたが、さわつてみるとパラシュートと納得され、誰が作ったものか。今に変わらない夢ではあつても、パラシュートで作られた衣裳は、わたしの想像できない悲しさでした。

摩文仁の丘へ。魂魄の塔は沖縄の人たちが作った慰霊塔。小さい石にただ魂魄と刻まれて周囲をまるく小高く土でおおつてあるだけでした。そのまわりに各県の慰霊塔がずらりと並び、その他にも整地された場所に並ぶ大きな石の数々。違和感をもつのは、わたしがまいる墓を必要としない世代だからでしょうか。

いよいよ沖縄の基地へ。金網のある町。えんえんと続く金網。案内してくれた人がなにげないように言いました。このゲートのむこうに多くの家があつたのですと。当時七歳だったというその人の言葉に、終わっていない戦争を感じました。^{'84}Weの夏期合宿の時、反対署名のおいてあつた白保の空港建設反対運動をやっている平良さんにあつてきました。この六月七月が分れ目とのことで、それにむけてハンストやロックグループ支援によるコンサート活動を計画中との事。二年前にすばらしいサンゴ礁があらたに発見されたことで反対運動は全国に広がってはいるが、五分五分の見通しだそうです。誰もが沖縄の海は美しいとほめそやす中でわたしは赤い色

でおおわれた海をみました。金武灣。乱開發による赤土の流出と、CTS（石油基地）及び海中道路で海がふさがれ、流れが変わったための赤い海。もちろんサンゴは死に、魚もいないそうです。もはや生きかえることはないと言われる海をみた時、海を破壊したという途方もない現実をどう受けとめたいのかわかりませんでした。そして改めて、世界にも類のないほどすばらしいサンゴ礁をもつ白保の海を死なせたくないと思いました。

最後に沖繩を歩いてみて、戦争を語り続ける沖繩と戦争を忘れたい沖繩を同時に感じました。多分どちらもその傷の深さのために。灰谷健次郎著『太陽の子』を読んだことがあります。今も尚戦争をひきずっている沖繩の人々を、ふうちゃんという女の子の目を通してかいてある本ですが、その本を読んで感じた傷の深さというのは、感動と同じレベルのものでした。けれど沖繩に行つてわたしの感じた戦争は怖さでした。恐怖感——他人に殺されるということ、追いかけられるということ、子供ですらのがれられなかったこと、逃げ場がないということ、そして死んでしまうということ。今わたしは戦争はまちがいだという視点をもつ自分にホッとしています。傷の深さを他人事で終わらせないために、これから自分を見続けようと思っています。

祈念資料館に書かれてあったものです。

沖繩戦の実相にふれるたびに戦争というものは

これほど残忍で　これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです

このなまなましい体験の前では
いかなる人でも　戦争を肯定し美化
することは　できないはずです

戦争をおこすのは　たしかに人間です
しかし　それ以上に

戦争を許さない努力のできるのも

私たち　人間　ではないでしょうか

戦後このかた　私たちは

あらゆる戦争を憎み

平和な島を建設せねば　と思い続けてきました。

これが

あまりにも大きすぎる代償を払って得た

ゆずることのできない

私たちの信条なのです

♥ フウフウフウふうふ ♥

多数派の暴力

ウツのみや

僕がまだ「障害児」と呼ばれていた頃、周りの子供たちがどんどん大きく、そして美しくなっていく事にどうしようもない焦りを感じた。一人だけとり残されていく恐怖感があったのである。

そしてその時も僕は本を読んでいた。

一般的教育体系からはじき出された「在宅障害児」もまた、プレッシャーをかけられながら社会や文化の中で孤立させられてしまう。

骨折して一ヶ月が過ぎた。
依然としてギプスは僕の腕に巻かれたままである。大リーグボール養成ギプスじゃあるまいし、これでは仕事にならない。
時間を持て余すと、しょーもないことにイラ立ったりする自分に気付きハッとすることがある。

なんとか文庫本は手で持てるようになったので読書だけするように努めているが、まあこれも多少生産的なことをしているような安心感を覚える精神衛生上の効果はあるようだ。「生産的」とは何だ？ 資本に奉仕することか？ 子供をつくることか？。

「みんなと同じでなければ仲間でない」という価値観は、大人も子供も人間を点検し、いじめや強制や隔離という形で少数派をリンチしていくのだ。

そして、いじめられる子は自殺し、障害児は社会参加できない要因が「自分の肉体にある」と信じ込んでしまう。

多数派の作った「みんな同じでこそ仲間」という基準に私たちは疑いを持たなければならぬ。

男が家事育児をすることが「カイシヨウが

ない」とされるように、すべての差別は固定概念の上にあぐらをかいている。

親せきのオジさんが高血圧で倒れた。

そして半年後、その妻は家を出た。

夫婦の、いや人間関係全体の契約形態はいつの日か改革されるのだろうか。

それともその契約資格はいよいよ厳しさを増し、打算的で冷たいものになるのか。

仕事を休んでから当然のごとく収入は減り、経済的に圧迫されてきた。

貧しい生活はそれ程苦痛ではないのだが、レコードが買えないのが困った。

財産なんていらないから、国籍や人種や性別や肉体的機動力で差別することのない社会構造になり、音楽が聴ければ幸せだ。

僕の歯をみがきながら彼女が言う。

「私ってエライナー、身体の不自由な夫を捨てないものなあ」

僕はやはり大リーグボール養成ギプスをつけるしかない。

Weに なんでもいおう なんでもきこう

◆長谷川孝さんの『子どもって不思議を読みました。僕は長谷川さんを『郷土教育』という冊子の上で知っていたし、時々その論の正しさを認めてきました。

に、向かわせてくれました。『論の正しさ』『共感しうる部分が多い』などということではなく。

ともあれ、この本は副題にもあるように「学ぶことは生きること」を基調にして、子どもにとって「教育」と学ぶことが別の位相にあることを、ひつこく追求しています。

それは、この本の一番最初に、植垣さんのクラスで長谷川さんが行った「授業」記録と、それにかかわる手紙から発する、長谷川さんの人となりというものからだろう。

るけど、そんなことではない何か、長谷川さんの子ども達に対する誠実さ、共に学びあおうという姿勢に感動する。

ことの証でもあります。そして、私にとっても、先にあげた②の子供達から発せられる様々な「問い」や「心の動き」に対して、反応しうる感性と返すべき論理（意見）をもちあわせられるかということが、厳しく問い返されました。更に言うならば、①の素材は、やはり相互の「学びあい」によるものが多いと思うし、その素材の開発への提起、素材の交流こそ『We』—新しい家庭科—に課せられた課題ではないかと思えます。

そして、それは子どもにとってでなく、大人にとってもまた同じ。いや子どもに影響を与えるという点では、それ以上に大切な命題を含んでいると、私たちに指摘してくれました。

毎日つきあっている子ども達から、僕らは一体どれだけのものを学ぼうとしてきたか。一回きりだから返事が書けるってことも言え

教師であることは、それ自体で教師であるのではなく（そんな教師が多くなりましたが、特に若い人達には）、長谷川さんが学生諸君に書いている文の中に、教育とは、①〈まなび〉に向けてさまざまな素材を提供すること

それは、ひとえに学校教育のみならず〈まなび〉を「学習」に引きこめてしまわず、一人一人が生きていく主体として、生き生きと生きるために必要だと思うからです。でなければ「新しい家庭科」もまた「科」のもつ呪縛の中で、必然的に貧しくなって、技術へ陥ってしまわないとは限らないと思うのです。

三年生のクラスで二時間、「1+1=2にならない」「真理の相対性について」というむづかしくてかつ本質的な事柄を「授業」し、子どもたち四十四人が感想を書き送る。ここまでは僕も時々やったことがあるが、長谷川さんが、その四十四人の子どもの感想に對して、また一人一人に返事を書いていく。僕は、もうその事実だけにでも、ウーンと言ってしまう。

②〈まなび〉からの問いかけに反応し、さまざまな考え（意見）を出しあわせること

③〈まなび〉からの自己総括と、次の〈まなび〉への準備を手助けし、学習主体の確立を支えることとまとめておられるが、長谷川さんの手紙までのプロセスは、その実践そのものであり、言葉や定義・提案のみの多い教育論の中で、やはりきわだっている。長谷川さんの教育論が、論に終わらず〈まなび〉を行為として「生きること」と対峙させてとらえている

それが、ひとえに学校教育のみならず〈まなび〉を「学習」に引きこめてしまわず、一人一人が生きていく主体として、生き生きと生きるために必要だと思うからです。でなければ「新しい家庭科」もまた「科」のもつ呪縛の中で、必然的に貧しくなって、技術へ陥ってしまわないとは限らないと思うのです。

僕が小学校の教師をしているが、この本は久しぶりに、教育論の何たるかを、教師であること、教えるということ、学ぶということ

だれが読んでも楽しくなる、そ

Weに なんでもいおう なんでもきこう

んなWeを期待しつつ、そのための「へまなびあい」こそ大切だと長谷川さんの本を読み感じました。長谷川さん流にいえば、それは「へまなび」に向けて開いていくような教育の実践や教育の理念を、私たち自身が日々もっているかという問いかけであります。

ウイ書房、二冊目の単行本という意義は大きいと思いい、みなさんにもぜひ読んでいただきたいとペンをとりました。

僕にとって一番大きかった言葉は「もつとも本質的な教師の教育の自由とは、教えなければならぬという強迫観念からの自由だ」でした。

◆編集後記に馬場さん、いきつも(?)読者数について書いていますね。「あつ、ま

があります」と言った――

ぼくは共感しました。一年生にして「いじいじした消極的な子」は、50音のいくつかをキチンと書けません。家庭訪問を先日終えたのですが、その「いじいじした消極的な子」の家庭には、相対的にですが、お金がかかっています。この現実を「決めつけ」と、そこを決めつけられると、もう、話ではできません(広い心で読んで、聞いてくれないと……)。

ぼくは、子どものころ、「おとなしくいじいじした消極的な子」でした。いまだに子どもの頃の「いじいじ」と「消極的」をひきずっています。

(相対的に) お金がない↓家庭環境に問題↓いじいじ、消極的↓浮かばれない、のは現実です。教師(ぼく)が「決めつけ」なくとも、おとなしい子は浮かばれないのです。教師への不満を感じるヒマがあったら、「おとなしい子」を生み出してしまふ、この社会の在り

方を変えてほしいものです。

半田さんも『明けの星を見上げて』を読んだのですね。ぼくも読みました。半田さんの後記を読み、やはり読書って「自分の言葉で書かれてある文字をおおう」んだなと思いました。

五十嵐愛子さんの文の最後の二行、「都市と農村はかえって遠くになりつつあるように思えるのだ」は、機械(交通)が発達すれば(近代化)するほど、心のかよいあいが消えてなくなる、ということだと思いました。(横浜・鈴木正美)

◆Weには、いろいろな目を覚まされるものがあります。エコロジー運動をすすめようとする時、男と女のかかわり方も当然問題になるわけですが、今までの一枚岩のように定着してしまった価値観に対しては、どのようにそれを切り崩したらよいのか、自分の非力さに愕然としています。地方紙に投稿しても反論ばかりでもどかしいのです。(弘前・須藤長子)

男の台所

DAI DOKO

☆しそ…冷や奴や天ブラ種として重宝。またブドウ球菌に対して強い抑制作用があるので刺身等のつまにしておくと一緒に食べるとよい。カロチンが人参の5倍もありビタミンAもタップリの健康食品。

その5 豚肉とシソの炒め和え

高瀬 斉



豚肉とシソの炒め和え

材料：豚肉 ロース（やや厚めにスライスしたもの）、シソの葉
しょう油・塩・コショウ
日本酒・しょうが・片栗粉
スープ（しょう油と砂糖を加えたもの）

作り方

先ず
豚肉に
塩・コショウ・しょう油・日本酒で下味をつけておきます

みじん切りにした
生姜を炒めその中に
下味をつけた豚肉を
入れて炒める

肉に火が通ったら
千切りにした
シソの葉
を加え
スープを入れ
水溶き片栗粉で
とろみをつけて
出来上り

シソをタツブリ
使うことと
シソを入れたら
余り長く
火を通さ
ないことが
コツ

フーン
意外と
簡単なネ

作り方は
簡単さ

しかし
豚肉と
シソの葉に
相性を
見い出す
ところが
偉いところよ

貴方との
相性を
見い出した
あたしも
偉いでしょ?!

ン…いける
いける

芍薬のつぼみが大きくなってきた。

このところずっと天気続きで、花の進み方が早くなったようだ。さあ切花の出荷開始だ。

毎日、二ヶ所ある芍薬畑(20a)を、花鋏を持って切って回る。白のラテンドレス、フェステバマキシマ。赤のマーシャルパイラント、ピンクのサラベルナール。親指大から玉子ぐらいの大きさのつぼみ。開花真近になるとフワッとふくらみを増し、白などはまるでゆで玉子の殻をむいたような感じである。そんな時が半日間だけある。

この半日が切るタイミングなのだが、芍薬の一本一本太さが違うように、開花のペースも違ってくる。今切るか、明日に延ばすかを判断していくのは、「切り前三年」といい、かなり熟練を要する。早く切りすぎるといい花が咲かないし、遅すぎると花市場に着くまでに開いてしまい、市場価値がない。

切った芍薬を集め、家の作業場へ運ぶ。長さ別に10本ずつ束ねる。作業場

は、作業台の上も下も芍薬の山で足の踏み場もないほどだ。終わるとダンボール箱に8-10束ずつ箱詰め。伝票を入れ、紐をかけ、花市場ごとの荷札をつける。夜行鉄道便を利用のため、夕方までに小千谷駅まで7.5kmを運ぶ。そして明朝のセリにかかるという仕組だ。

今年は今が最盛期。昨日は46箱あり、2トントラックに満載だった。

一日に3千本から5千本近く切る。花畑での作業はメルヘンの世界のように心楽しくもある。芍薬のつぼみが日毎に大きくなっていく様は、いつ見てもうっとりしてしまう。これだけのつぼみの中に、直径15cmぐらいにもなるたぐさんの花卉がどこに内包されているのかと思うと、この生命力、神秘性に感嘆する思いだ。

しかし株の根元から一本一本切っていく作業は、腰を伸ばしたり曲げたり繰り返して、腰痛や肩こりの原因になる。右手は、鋏の使いすぎでしびれてくるほどである。

切り花にしてもスイカ、野菜、米にしても、農作物は出荷するまでになんと多くの“手”がかかるとか。一つ一つのことはどれも至

極簡単なことなのだが、それが大量となれば誰の手も借りたくなるほど。「あーあ。まだあるの」とため息が出るほどである。

私たちだって夫の両親を含めて四人、早朝からせつせと立ち働いて(合い間に家事育児をやりくりしながら)なんとか間に合わせている、というか出来るところまでしか出来ないというのが現状である。

ところで同じ日に出荷した花が、市場によって一本100円だとか50円だとか、ひどい時には10円20円なんて値がついたりする。あまりに安値の時には、これまでやってきたことが全く評価されなかったのかと、悲しくなる。

ダンボール箱代、運賃、市場手数料。それに栽培管理に要した年月と諸経費等、すべて生産者の負担。「出荷すればなるほど赤字が増える」とキャベツや玉ねぎ畑をトラクターでつぶしていく農民の、やるせない気持が痛いほど伝わってくる。

農家が農家として、経済的に自立していく道はとても厳しいものと思う。

選挙・議会のありようと一票の平等

宮本 なおみ

東京都議会議員の選挙は、いま一步盛り上りを欠いていますが、目黒というところで議員をやっている私にとって大きな関心事の一つとなっています。

私をはじめ選挙に出る時は、子どもを産み育てる第一歩であった「保育」を、地域社会の中でどうとらえ解決して行くのかなどの問題をかかえていました。一方では「日韓」「東大闘争」「50年安保」といわれる時代をくぐりぬける中で、弾圧される学生を救援し権力に異議申し立てをしたのは、野党ではなくてただの市民や母親たちだったという憤懣が残っていました。こういった想いを底流にかけながら、「議会」に席を持ち、そこからさらに都政も国政もみえてきたといえましょ

う。選挙を経て手にする「議会」へのかかわりは、地域の中の市民運動や、政治の矛盾に憤る労働者に徹底して依拠しなければならないと私は思います。

さらに議会は、どんな政治を望むのか、どんな地域社会や人間関係をつくりたいのか、その中身のいかんにかかわらず問題にされねばならないと思います。議会は現存する私たちの生活を、さまざまなかたちで制約するところどころだからです。

これらのことを前提として、今国会で問題になっている定数は正の六・六自民党案にふれてみたいのです。

定数は正で問われている一票の価値は、一人ひとりの議員の得票にかかります。何人の有権者の投票行為や意見を代弁する議員が何人いるかによって、多数決の背景にある人民の数が違ってきます。少数の特定階層に支えられた多数派が、民主主義の名によって人民を支配することも可能です。

多数決は決しいい役割を果たしてきませんでした。多数決のありようは問われていいと思います。しかし、形式上の民主主義も整っていないようでは、差別をなくしたり実質的な民主主義を拡大して行くことも覚束なく

なります。それ故に選挙は限りなく平等に近い一票で行われ、多数決は限りなく正確に近い人民の多数を反映させるべきと私は考え「一票の平等」に深い興味を持っています。

二十三年間、一票の平等を求めて裁判を担ってきた越山弁護士は目黒の人です。一九六二年の参議院選の結果を新聞でみていて、テネシー州議会の定数配分違憲を思い出し体が震え出したという鋭い感性の持ち主です。

以来第一次の一人原告訴訟から、補助参加有権者八八五名の第十一次訴訟に至るまで争い続けており、第五次訴訟以後違憲判決をとりつけています。選挙は無効とされないが、一票の格差が二倍を超えたら違憲とされ、是正にふみ切らざるをえなくなったのが国会です。そこで出されてきているのが自民党の六増六減案です。これによると衆議院総定数五一一名、選挙区一三〇のうち千葉・神奈川などが増え、兵庫・鹿児島など六選挙区が減り、格差は四・四一倍から二・九九倍になります。これでは秋の国勢調査ですぐ四倍になりうるので批判をされています。国会がずるをきめこみ、人民を適当に操縦しようとする姿勢への歯どめとして、この種の問題にも大いに関心を持つべきと私は思っています。



食のファッション化の演出

鈴木みどり

総理府六月発表の「健康と食品」に関する世論調査によると、冷凍やインスタントの加工食品の利用者は若い世代ほど多く、二〇代では、ふだんの食事のほぼ半分が加工食品だという。七〇代ではこの種の食品をほとんど食べない人が45%というから、日本人の食生活の変わりようには、改めて驚かされる。

この変化の要因はいろいろと思うが、もっとも大きな影響力を発揮してきたのは、やはりマスメディアによる広告、中でも、テレビ広告（CM）ではないだろうか。人びとの日常生活に占めるテレビの役割の大きさは指摘するまでもない事実だし、テレビを見れば、その20%の時間はCMを見るために使われている。その上、CMの三本に一本は食品を宣伝

するもので、その食品の中から加工食品でないものは、キャンディや菓子、清涼飲料、酒類を除けば、例外的にしか見つけられない。

加工食品メーカーといえはハウス食品、味の素、日清食品。いずれも年間広告費で、常に、全企業中の上位二〇社に入っている大広告主だ。しかも、これらの企業のCMは、夜の子ども番組と朝や昼の主婦向け番組に集中的に挿入され、子どもの食卓を直撃している。

もっとも、CMの数が単に多いというだけでは、加工食品の浸透ぶりを説明できない。CMの内容も軽視しがたい役割を果たしているはず。そこで、三年前に加工食品の中でも食品添加物等で特に問題のある即席麺や冷凍・レトルト食品を取り出し、それらを宣伝するCM三五二本について内容分析を行っている。その結果を紹介しながら、人びとの食意識を一変させてしまったCMのメッセージとはいかなるものかを、考えてみたい。分析してみても驚いたのだが、CMでは、この種の食品の最大の特徴といえる「簡便さ」がセールスポイントになっていない。代って、「お客様にも出せるラーメン」「〇〇を使って豪華な食事、家族の団らん」と、高級イメージ、デラックス・ムードが演出されている。

画面に登場するのは三〇代前半の友達夫婦、あるいは、その子どもを含めた幸せ家族。どんな場合でも、中心的に描かれる女性は優雅に装い、白い壁の広々した洋風の室内で、笑顔を振りまきながら、夫や子どもの食事の世話をしている。白いテーブルクロスの上には花が飾られ、その周囲に並ぶ料理の数々は、ほんとうに豪華に見える。

CMが描き出す高級イメージのおかげで、加工食品を使うのは料理の手抜きという後ろめたさは、主婦たちの心の中から一掃されてしまった。手抜きではなく、これらの食品を使えば、主婦たちの仕事は一層輝き、家族の幸せも確かなものになると、CMは言う。このメッセージが三度の食事の仕度に飽き飽きしている彼女たちにアピールしないはずがない。家族の食卓のムード作りに精を出すのが今風の主婦の仕事と納得すれば、温めるだけ、揚げるだけの食品を積極的に買い求めるようになるのも時間の問題。

加工食品の浸透は、主婦たちの伝統的な性役割を何ら変えずにむしろ補強し、彼女たちの目を逸らし、「食」のファッション化を演出することで可能となった。イメージ広告の恐ろしさというべきか。



国のお伽の消費社会大衆

ディズニーランドの考現学

長谷川公一

超管理社会の縮図が自動車工場ならば、大衆消費社会の最も洗練された姿は、例えば東京ディズニーランドに見ることができる。

ディズニーランドの大好きな友人が、結婚のお祝いに、招待券をくれた。五月のよく晴れた日曜、つれあいとあそぶ。山本周五郎の描いた「青べか物語」(新潮文庫、三二〇円)の浦安沖は埋め立てられ、いまや、風と共に去りぬ、古き良き時代のアメリカ風の建物やシンデレラ城がならぶ。明るく、まばゆい、お伽の国への変身譚。現代の魔法は、土地ころがしである。

でかける前までは、なんでわざわざディズニーランドをつくったのかと思っていた。完全な猿まねである。本場そっくりのディズニ

ーランドを東京につくるということ自体、悲しいまでに戯画的で、滑稽である。

しかし、ともあれかけてみると、これが、理屈めきに、なかなかハッピーに心憎く楽しませてくれる。「幽霊の館」、「スペース・マウンテン」、「カリブの海賊」などなど、人気アトラクションの大半は、正味三分弱である。これを三〇分以上もならんで待つ。けれども、この待ち時間、行列が前にすすむにつれて、じよじよに、その世界のなかにひき入れられ、いまはじまるかとワクワク、ドキドキ、ハラハラ、心躍らせてくれるしかけになっている。たくみな導入部分である。

ディズニー特有のあたたかで、洗練された、凝った趣向と演出、意外性。「未来の国」では、やや参加日本企業のPR臭を感じるものの、泥臭さや安っぽい陳腐さが無い。園内は、掃除がいきとどいて、清潔であり、トイレも気持ちがいい。従業員の若者たちも愛想がよく、親切である。ディズニーランドでわたしたちはなにを買うのか。夢、ハッピーニス、異空間の小旅行、現実から隔離された別世界の体験。ディズニーランドには、現代のエンターテイメントの魅力がある。

こんなことをつれあいに話しあっているうち、ある日、栗田房徳・高成田享『ディズニーランドの経済学』(朝日新聞社、一九八四年、一一〇〇円)をみつけた。著者は朝日新聞の経済記者。さきほどの土地ころがしの魔法や、従業員のサービスの良さの秘訣。アメリカの方にはあつて日本にないのは何か、逆に日本の方にはだけあるものは何か。ディズニーランドの経営のしかけとその危うさ、あきられる危険。年間一千万人のお客をあつめたディズニーランド人気の現代消費文化における意味。これらをシャープに描きだしている本書は、ディズニーランドでのハッピーな一日のたねとしかけを教えてくれる。

この本に書いていないことで象徴的に感じたこと。飛行コースの真下にあたるのか、頭の上を、かなり頻繁に、割合低空で旅客機が飛ぶ。ディズニーランドの内部と、外部の現実との接点のひとつが、この上空の飛行機である。飛行コースの真下、地震に弱い埋め立て地の上的お伽の世界、それは、ダムダルの剣の下での現代社会の繁栄に似てはいないだろうか。危うさは頭上にあり、また足下にある。しかし、あるいはそれ故に、しばし、うたかたの夢にひたるわたしたちである。

大正五年秋、数え年六歳の時田舎の小母さんが来て、田舎へ一緒に行かないかという。例によつて珍らしもん好きの私はあつさり頷く。母は妹を妊娠中、義祖母が病気がち、七九歳の祖母はもう私と遊ぶ気力もなく、私の記憶には銭湯で転んだ外ほとんど登場しない。汽車に乗ったことも車中のことも一切憶えていないが、横芝駅に着いたのは夕方、東京と違つて薄暗い電灯のついた町を、人力車にゆられて通つた時は、さすがの私も何とも言えない不安な気持になった。

その不安な気持は翌朝の庭の眺めで吹き飛ばされ、好奇心で目を丸くして歩き回つた。中庭から奥庭にかけて数本の蜜柑の大木、手を延ばせばすぐ食べられそう。柿の木は至る処に赤い実をぶら下げ、母屋の南西に椎の大木が三本、黒々と枝を張つて簗え立っているのが、田舎へ来たという感じで印象的だった。後年源氏物語の紫君が、二条院に連れてこられた時の子ども心を、この時の自分の気持と重ね合わせて理解したものである。

横芝の家は花見堂という小間物屋であつた。県道に面したその店には養父母と私の三人が住み、奥の大きな母屋には養祖父母（実母の長姉夫婦）と養父の末弟の四郎兄が住ん

でいた。先々代まで漢方医であつたという屋敷には、数え切れない程いろんな果樹・花木が植えられていて、私の後の生活を豊かにしてくれるのである。

家の真前にある役場をヤキ場と言つて笑われたり、近所の人に「どこの子？」と聞かれて「前田さんの子よ」と威張つたり、近所の

思えば思われる物語(五)

田舎町横芝へ

丸山光子



子と雛ごっこに慣れ、小間物屋お手の物の空箱を分配して得意だったり、ともかく東京から来た、町でも旧家の客分なので、近所の人からもかわいがられて倅せだった。

旧家と言つても医者を止めてからの前田家は、屋敷は広いがお金はなかつたようだ。だが、近所はみな久左衛門殿・伊三郎殿・岩城屋・七兵衛殿なのに、うちだけが前田さんで

あり、師匠さまの家なのであつた。先々代まで寺小屋も開いていたので、筆子だった老人もまだいた。養母（ふじ）は初めのうちはおぶつて台所をしたり、多摩川の実家に連れて行つたりしてくれたが、養父と仲が悪くなるにつれ私をかわいがらなくなつたようだ。

私が近所でもらつた蟹を見せに帰ると、お前はお腹をこわすからと、見てる前で食べちゃう。そんなことが再々なので近所の人が何かくれる時は、「光ちゃん、家さ持つてかねえでここで食つてたいよ」と言う。ある夕方近在回りに帰つてきた養父が、「みー坊に水蜜やつたか」「ええやりましたよ」「みー坊食べたかい」「ううん、もらわない」。変なこつと言ふ養母だと思ひながらも、別にすっぱめくつもりでなく、食べたい一心で、ありのままを言い、その晩二つも大きな桃を食べ、いつもしたことのない「おねしょ」をしちやつた。桃は養母の多摩川の実家から送られたものだった。そのようなことから近所では、継子いじめされてるとの噂があつたようだが、ご本人は一向に苛められたとは思わず辛くとも恨めしいとも感じなかつた。ちつぽけな家の中のことより、一歩外に出れば興味津々たる自然が待つていたからである。

二年目に入り、近くの自主学童クラブ指導員同士交流の場を持つてはということになり先日、最初の集いがあったが、そこでの話。

あるクラブでは、おやつ後、帰宅までの時間、毎日、全員で集団遊びをするという。子どもたちがやりたいものを選ぶから、別に不満は出ないらしい。初年度は、「野放し」に、やりたいことをさせていたら、クラブが荒れてしまったので、集団遊びを導入したら状況が好転したという。

我がクラブでは、指導員の内に、「他の子は家に帰ったら、自分の好きなようにしてられるのだから」「学校で、散々、一斉にやらされて、いるのだから」と、「やりたくない自由」を保障し、強制の要素は最小限に抑えようという気持ち強いから、全員参加の集団遊びは、月一回のお誕生会の際のゲームと、帰宅三十分前の班対抗のドッジボールの試合（週一回出番が来る）ぐらいなもの。普段は、カラーボックスで仕切った部屋の片側で、布製の室内ボール使つてのドッジボールかサッカー野球が始まり、机並べたもう一方の側では、工作や手芸をしたり、本読んだり、ピアノ弾いたり……外に行く子は、行き先をノートに書いて出かける……といった按配で、指

導員は、請われれば、ボール遊びに加わり、工作の手助けし、喧噪の中で、一人一人の要求に応えるのに忙殺され、外遊びの子が何をしているのか把握しきれないときもある。

学童クラブにつきものの、竹馬やケン玉などの検定・マラソンなど、遊びの中の競争を通して「ガンバリズム」を育てる試みも、ど

子どもって…

みんな一緒に 遊ぶこと

稲邑恭子

え・井田裕子



こか「学校」に重なるような気がし、あまり乗り気になれず、かくして、子どもからツマラナイと言われないうちに、セッセと工作等のアイデアに頭を絞る、読み聞かせの本（中・低学年に分けて週一回ずつ）を探し回り、教材（!?）研究に忙しく、「アレヤツテ」「コレヤツテ」と四方八方から袖引かれて目が回り、はた目から見れば「野放し」「クラブだろ

うけど、ちっとも楽ではないなため息。

どうして「皆一緒にさせること」にこだわっているのか、自分でもおかしいけど、ひとつは大人が子どもの遊びを決めるということへの躊躇。ひとつは「皆一緒に」へのアレルギー。

婦人学級に出たとき、何の話からそうなったのか忘れたが、皆が口々に「我が子が、ひとりだけボツンと、他の子たちから離れて遊んでいいるのを見ると、とても不安になる」と発言したことがあった。「アッ、みんな仲よしファシズム!」と、「群れて」でなければ何もできない子どもたちの姿を重ねて思い浮かべてしまったが、友達と一緒に遊べて、自分一人の世界に遊ぶこともできて、その二つの世界を自由に往き来できる、そんな子に育ってほしいなと思うのに、どうも、後者のほうはあまり評価されないうらしい。ただ群れることが「仲よく」にすりかえられているようにどこかおかしいなと思う。

とはいえ、小グループの乱立で、お互いの足の引っぱり合い・けなし合いしかできない子どもたちを見ていると、やはり、少しは強制してでも、「皆で遊ぶ」機会を作っていかなければ……と思ひ、こちらの働きかけが少し足りなかったかなと反省もするのです。

情報 1

差別撤廃条約批准の現在も、

女子必修を維持しようとする校長会

女子差別撤廃条約批准は六月二十四日、国会において承認された。

同条約は、国際人権規約で規定されている「性による差別禁止」の原則をさらに具体化したもので、79年十二月、国連総会でも採択された。日本は80年七月十七日に署名。81年九月三日に効力が発生し、三月現在、カナダ、フランスなど六十六カ国が締結国である。

これに先立ち、衆議院では五月三十日、外務、文教連合審査会を開き、安倍、松永両大臣も出席の上、各党代表との質疑がくり展げられた。

その席上、江田五月氏の質問に対し、斉藤邦男外務大臣官房審議官は「条約のめざす方向に向かつて一步を踏み出したというだけでは不十分」「十条(6)項の『同一』とは、全く同じ教育課程を享受する機会を男女平等に与えろということ」と答弁。高石邦男文部省初等中等教育局長は「高校『家庭一般』は、明らかに女子のみ必修で、男子は選択。『同一

の教育課程』が保障されていない。中学の技術・家庭は、必修・選択ということではなくて、材料選択の幅が偏っている。これを平等にしていくことは必要」と答えた。

六月十四日の衆議院文教委員会でも、江田五月氏の質問に対し、高石文部省初中局長は、性別によるのではなく、あくまでも個人の選択による履修をすすめていく、と答弁。再び、その確認がなされた。また瀬崎外務大臣官房外務参事官は、外務省は批准後も、問題解決にあたって滞りなく行われているかをみつめていく、と答えた。

国会における右のような論議の末、条約批准が承認され、Weの本号が出る七月十五日から、国連婦人の十年最終年世界会議が開かれるという現在であるのに、驚くべき時代錯誤の文章を読んだ。「家庭部会報」65号(全国高等学校校長協会家庭部会、昭和60年4月)の巻頭言である。

三月末、宇都宮中央女子高校長を退職した高井利夫理事長が、「検討会議の報告」所感」と題して書いている。その中のさわりを紹介する。(二字下げた「」内の文章は原文のまま。へゝ内は私のコメント)

家庭部会は、女子必修堅持―当面現状維持

が最もよいと考え、最後まで要望してきた。「全国高P連(小島幸生会長、300万人)の大会決議にもなるなど、家庭教育の重要性、とりわけ女子にとって『家庭一般』は必須の教養であるということが、世論にまで高まったように思う。これ偏に校長先生方のお骨折りの賜であり改めて、感謝するところである。」

「もともとこの問題は『家庭一般』が婦人運動に巻き込まれた不幸なできごとであり、当初問題にされなかったことが、婦人運動家等の突き上げで、批准のための条件の一項目に据えられたという有力な見方もある。だから、法律ではない学習指導要領という規則の問題、しかも義務教育でない高校の一科目の問題、それが法律事項と並んで批准の三本柱の一つにまでなったのである。何とも不可解に思ったのは私だけではないと思う」

また、長谷川三千子論文「条約は内政干渉日本文化を破壊する(中央公論) 昨年五月号」をかざして現行履修形態は堅持されるべき、一步譲っても「女子必修のまま、男子の履修を強化する」ことで批准できると考えていた、と。

ただ、男女がそれぞれの特性を生かしながら相協力して家庭を営むことを考えれば、

「男子としても、正しい家庭観を培い、男子の立場から、協力して家庭生活を営むのに必要な知識・技術の学習が将来は、あつてもよいと考えている。しかし、同一の教材を、同一の教室で、同一の教師が教えるという『共修』は、なお今後とも問題があるという考え方である」

したがって、検討会議の報告に「新しいタイプの家庭に関するいくつかの科目」とあるが、これは男子にふさわしい内容の家庭科目の研究も含められるべきだ、という。

「同じ教室で男女一緒に家庭科を学ぶことがよほどお気に召さない様子だ。」

「一部の教師が進めようとしているといわれる『社会啓発型の家庭科』が第一案を抛りどころにして蔓延したり、理論や講義だけに終始する家庭科学習が拡がることのないように警戒する必要がある」

〈蔓延〉とは、チブスカコレラの伝染病なみの表現である。これでは、現状に対する批判精神も、改革を志すチャレンジ精神も、芽を摘まれてしまう。為政者の意のままに操られる衆愚を、教育によって育てようというのか。

「いわゆる『共修論者』は、直ぐにでも男女ともに学べるようにと主張するであろうが、教員養成や男子高校における施設の設備の整備などには、かなりの年月を要するとみるのが常識であろう。その点で『10年周期の教育課程の改訂』プラス『当分の間』であれば、学校を預る校長の立場としても、大方の賛同が得られるのではないかと思う。」

「あるマスコミ関係者から、校長会家庭部会を取材したところ、『現状が二十年は続く』と言ったと聞いて絶句したが、これを読めば、ピタリと符号する。」

「また、桜井隆道事務局長は『家庭科問題についての経過と、検討会議報告についての見解』を述べ、加えて資料として、国会議事録、家庭部会として事務局長として出した要望書、礼状などを載せている。これがまた驚くべきものである。」

すなわち検討会議の全委員に出した要望書（59・12・23）には、外務省は労働省に対しては理解があり、雇用のことは平等でなく均等でよい、としているのに、文部省に対しては「男女とも全く同じでなければならない」と言う。これは教科書問題と同じで条約を懸

法以上のものと考えている外務省の姿勢が文部省に対して圧力を掛けているものとしかいようがない、と。

陳情後に事務局長名で出した礼状の一例の中には（一）内ながら、（なお、有名なある新聞記者の話では、この条約は某国が原案を提案したものであり、家庭の崩壊等を狙う高等戦略であるという見方もあるとのことであります。これが本当であるとすれば、誠に重大な問題であります）とある。

「条約成立の経緯に関するこの認識不足、他人事ながらたまらなく恥ずかしい。」

文部省は「同一の教育課程」では具合が悪いというので same を equal に変えられないかと打診したが、それは否決されたという。それなら何故、文部省はこの条約の署名に同意したのか、全く不思議でならない、とも。

「書いた人のおそまつさはいうまでもないが、この家庭部会報が、全国の高校長の手に渡り、一方的な情報しか受けていない人たちがうのみにし、意識ある家庭科教師を抑えつける役に立つなら、恐ろしい。」

目先のことしか考えない体質を私たち自身が脱皮させない限り、現状を一步でも進めることは不可能だろう。

（半田）

女性民教審、臨教審第一次答申に 関して見解を発表（6月26日）

1、臨教審第一次答申に対する私たちの意見
私たち母親が臨教審に托したのは、現在苦しんでいるすべての子どもを、すみやかに全体的に救ってほしいということでした。

しかし、第一次答申を読んでもみると、教育改革の理念ばかりが並んでいて、ほとんど具体的な提案がありません。

わずかな具体案のうち「六年制中等学校構想」は、私たちが、いちばん恐れている受験競争の激化につながります。

「高等専修学校卒業者に大学への道を拓く」というのは、いいことですが、部分的な改革でしかありません。

「共通テストの実施」は、不評な共通一次の反省の上に立っていません。

「単位制高校の設置」は、落ちこぼしの受け皿になる心配を残しています。

これでは、私たちが托していた「子どもたちを偏差値地獄や管理教育から解放してや

り、少人数でゆったり学べるようにしてほしい」という親の願いに応えていません。私たちはがっかり致しました。

何か、臨教審はカン違いをしているのではないのでしょうか。答申の中に、しばしば出てくる「二十一世紀のための」という言葉にも違和感があります。私たちは、二十一世紀のために子どもを育てているわけではありません。現在の子どもがいきいきと育つことの延長線上に二十一世紀があるのです。

戦後の教育政策に間違いがあったから、いまこんなに教育がおかしくなったのです。その反省の上につながり立つた最終答申を期待しています。

2、私たちの基本理念

女性民間教育審議会は、子どもとともに生きる親の立場に立ちます。いま、学校教育のなかで子どもたちが苦しんでいる現実から出発し、私たちは公開審議会や教育一〇番の活動を積み重ね、たくさん親や子ども、教師たちと直接に語り合い、私たちの求める公教育実現への知恵を集めてきました。その検討をもとに、教育への提言を行います。

子どもはみずから育ちます。その事実を私たちはもっとも大切なものと考えます。それ

ゆえ、教育を上から一方的に与えるのではなく、子どもが自力で学べる環境こそが 필요한のです。

親は誰しも、学校のなかで、子どもが基礎学力を身につけ、個性をのびし、他者との連帯感や自然との共存の力をはぐくみ、元気いっぱい、自分への誇りをもって社会に巣立っていくことを望んでいます。その願いを実現するために、地域の学校を作り支える主体は、おのずから、子どもの生活がよくみえていく地域住民であるべきでしょう。

子どもだけではなく、大人にとっても、学ぶという行為は生涯を通して続きます。世代を問わず、学び合う場が豊かにひらかれ、ゆきわたる社会を私たちは目ざしています。

3、私たちの教育改革提言

―当面の検討課題―

（紙幅の関係で残念だが項目のみ）

- ①学級定員を一クラス35名とし、マンモス校をなくすこと
- ②「教育問題救済機関」（仮称）の設置
- ③教育情報の公開
- ④体罰といじめをなくすための学校内の改革
- ⑤父母の教育費負担を軽くするための対策
- ⑥私立学校へ通う場合の教育費負担の補助
- ⑦受験競争緩和の視点からの大学の改革

蔡さんの指紋押捺拒否に同席して

馬場 洋子

「六月八日に指紋押捺を拒否するので、どなたか来て下さいませんか」と在日中国人三世の蔡和美さんから電話をいただいたのは五月末日。はずかしいことだが、この時ようやく指紋押捺拒否が私により身近な問題として迫って来た。

蔡さんはWeが発足する当初から多大な支援をいただいている方。おつれあいの張さんと共に印刷所を営んでおり、Weの封筒やチラシなどはすべてお願いしている。雑誌発送の時も、遠くから手伝いに来て下さっている。

八日九時半、北区役所に支援する人たちが二十名近くが集まった。戸籍係の外国人登録の窓口には早くからカメラをかついだ報道陣が多数。前日、町田市議会での市長の表明「5・14通達は誤り」が、今日の拒否行動により意味を持たせていた。

窓口で指紋押捺の拒否を告げると「別の部屋で話しましょう」と係の人。蔡さんは「屈辱的押捺を

してきたここで、ぜひ窓口の担当者も一緒に話をしたい」と、か細い声ながら、はっきりと告げた。結局は支援の人も同席できる部屋で、区民課長室で、課長、係長、担当主任と共に話し合った。

課長「法律上、本人確認のためには唯一のもの。法を遵守するものとしてお願いしたい」蔡「法そのものが人権侵害。16歳に達すると指紋を押すことを強要される屈辱感。法そのものを改めるよう働きかけていただきたい」課長との押し問答が続くが、話は矛盾だらけ。「区民の人権を守らなければならない」といいながら、「人権を無視した」法の許せる限りで、という。

この日は、次の話し合いまで告発、警察への資料提供を一切しない、という確約をとり、蔡さんは、指紋を押さないけれど、本人と確認（窓口の言葉）され、従来通り外国人登録証明書を受けとった。このことは通達を無視した点で大きな成果であった。

指紋を押すということに生理的拒否反応を起こしてしまう私。外国人登録法は、その指紋押捺を在日外国人に五年ごとに義務づけている。又、在日外国人のほとんどが韓国・朝鮮人である。

「いやだ!」という体全体からわき出るその思い。それをふみにじり、強要する。人間の感性を無視した管理そのものにほかならない。その国、その自治体に住む私。私たちの問題である。

北区では鄭映恵さんが三月一日に初めて拒否、蔡さんは五人目。実質的に蔡さんを支える形になった「指紋押捺に反対し外登法の改正を求める北区の会」は、鄭さんが拒否表明し、区民に協力を要請した時にできたもの。拒否をするという意志表明が、北区の人たちを立ちあがらせ、共に支え合う大きな力となった。「生活がかかっているのです」と蔡さん。現に拒否した時点で、自宅の電話の盗聴、仕事場へのいやがらせの電話が続く。でも「今まで仕方がないと声をあげられなかったけれど、ずっと子供にも続いていくのかと思うと、黙っていても変わらないから拒否した」と。この問題にかかわればかわる程、様々な問題に出会う。そして、「自分にとって、いやだ」という叫びをそれぞれがそれぞれの形で出すその時、それは一人の叫びでなくなる。まさに人間性の復活「そんな内なる声が響いてくる。区役所を出る時、蔡さんは「拒否してよかった」と、ポツリ、言った。

金城清子著

『法女性学のすすめ』

有斐閣選書 価一三〇〇円

「法女性学」とは耳なれない語だ。女性の視点から、これまでの学問を見直していこう、というのが「女性学」。同様に、男性中心の学問であった法律学も、女性の立場をふまえてはじめて、真の人間の学として、人々の自由・平等・独立を保障することができる、との主張から、金城氏が造語したものだ。

日本国憲法が法の下の平等、家族生活における両性の本質的平等を保障しているにもかかわらず、男女不平等が厳然と存在する現実。著者は、性による分業の克服という新しい方策を提示した差別撤廃条約に添って、日本の法制度の総点検を行った。書名から固いところつきにくい印象を持つかもしれないが、語り口は柔らかく平易だ。ノラやクレイマー夫人が、家出しなくても生きていける社会や家庭を男女手を取り合って、との願いが漲る本。

中谷瑾子編

『子殺し・親殺しの背景』

有斐閣新書 価六三〇円

佐々木保行氏にすすめられて、私も一つの章を担当したこの本は、82年初めて刊行されたもの。同氏は六月号に、カリフォルニアで起きた日本女性による母子心中事件について父子夫人との対話を寄せて下さった。先日この件で一時帰国したという未知の男性から電話があり、私の文を読んだ上での幾つかの質問を受けた。人間を出会わせる「本」の不思議さを改めて思った。編者の中谷氏とも、この本によって出会った。刑法学者として「子殺し・親殺しとその法的側面」の章を担当された中谷氏は、古来の法格言「法は家庭に入らず」が、家族コントロールの変容によって、再検討をも迫られている現在、子殺し・親殺しに関する各国の法と、その背景にある思想を、具体例を通して解説する。刑法を身近に感じることができた、私にとっての入門書。

法学セミナー増刊・
総合特集シリーズ25

『女性と法』

日本評論社 価一三〇〇円

「男のみのスタッフで、当初は少々気はすかししい思いで」テーマに挑戦した、と編集後記にある。◎雇用・労働◎家族(家庭)◎教育問題◎社会保障◎性の五本の柱に、◎外国における女性と法◎解説篇を加えた目次には、五十人を越す執筆者。うち女性が男性の三倍。壮観である。どちらかといえば、固くなりがちな内容を、座談会や「いま、女性たちは」と題するエッセイが柔らげる。

「女性と法」いま、これだけは知っておきたい基礎13講」は、それぞれ見開き二頁で読みやすく、巻末の「重要論文著作紹介」も親切である。このV教育の項に、「新しい家庭科We」も、必修をすすめる会編『家庭科、男子にも』『家庭科、なぜ女だけ』(ともにドメス出版)と並んで載っている。

半田 たつ子

小・中・高校生と共に大人も読んで心洗われる本三冊、夏休み前に紹介しよう。

岸武雄さく・斎藤博之え

『走れ！ ネコ先生』

学校図書 価九五〇円

子どもたちや若者にとって「カッコいい」が物事の値打ちをはかる「物差し」になっている今、「カッコわるい」中にも、人間として生きていく上にたいせつなものがあることを知ってほしくて、岸氏はこの本を書いた。

若くてカッコいいチコ先生、その産休補助教員として来た、年とってカッコ悪いネコ先生。先生より用務員のおっさんのほうが似合うと、泣くにも泣けない気持ちで迎えたテツヤたち四年三組の子たちは、ネコ先生にぐんぐんひきつけられていく。

岐阜大附小主事として、ユニークな経営をし、多勢のすぐれた実践家を育てた著者だけに、ネコ先生の国語の授業は、読者もひきこまれるおもしろさだ。ネコ先生のモデルは大正自由主義教育で名高い野村芳兵衛氏。千葉県読書感想文コンクール課題図書。千葉の子どもは、どんな感想を抱いたのだろうか。

佐々木赫子著 広野多珂子絵

『さくらにいくこうぜ キックオフ』

偕成社 価八八〇円

「今どき、こんなアホなことばかりして、勉強もしない中学生がいるものか」と読者は思うかもしれない。ところが、残念。実は、いるのです、と「あとがき」にある。

ネコ先生と四年三組の子どもたちが実在してほしいと願った私。主人公健太とその仲間のでかすことの八〇%までが、佐々木氏の身近にいる中学生たちの実体験と知って、ほんと胸をなでおろす。

サッカー部、期末テスト、全校生徒集会、信州への小旅行……躍動する青春前期。

実は、著者はWeの読者にとって親しい佐々木賢氏夫人だ。大学入試にはかたっぱしから落ち、浪人して入れたと思ったら、合唱団に熱中しすぎて単位を落とし、卒業するのに五年かかる、就職試験はむろん落ち、「だから試験にかけては専門家だぜ」というお父さん。ずっこけているが性根のすわったお母さん。勝手に佐々木さんちをダブらせたりして、それも楽しい。

関 千枝子著

『広島第二県女二年西組』

筑摩書房 価一二〇〇円

人間が生涯に一冊の本を書かなければならないとするなら、関千枝子氏にとって、これこそ、まさにその一冊だ。各紙誌が挙って絶賛したこの一冊を、ヒロシマから四十年を経たこの夏、ぜひ読んでほしい。

十四歳の少女たちが「ハイ」「ハイ」とかけ声をかけながら、建物強制疎開作業の瓦運びをしていた広島。昭和二十年八月六日八時十五分。閃光と轟音。クラスメイト三十九人のうち三十八人が死んだ。たまたま欠席していたために死を免れた著者は、師や友を必ず書き残さなければと思い続けて四十年。その重い荷を八年かけてようやく下ろした。引率の先生と、級友全員の名を挙げて、かれらの死の現実を再構成する。その友が「靖国の神」となっていることにショックを受け、これを名譽ととらえている父母にこたわり、遺族を傷つけることを恐れつつ筆を進めた章外の章「原爆と靖国」は重い。哀しく清らかな鎮魂の書、同時に骨太な反戦の書である。

彼

コロボックルの山で

半田 たつ子

コロボックル、ご存じですか。

アイヌ語で「ふきの葉の下の人」って意味なんですって。

佐藤さとるさんのファンタジーを愛するあなた。さぞびっくり仰天なさるでしょうね。私、コロボックルの住む山へ行ってきました。その上、一日、私もコロボックルになっていたらいいのです。不思議なその日のこと、お話ししましょうね。

六月の晩に目覚めました。前日の豪雨がきれいに上がっています。シメシメ。始発の「ひかり」で名古屋へ、そして岐阜へ。

ここも美しく晴れていました。初夏の軽い風に乗って、マイクロボスが現れました。今日のワクワク企画の張本人、尾藤操さん。小学生を「とりで作り」に夢中にさせた鈴木頼恭さん。「ストロークを大切に」と語りかける敷島妙子さん、お嬢さんのはるみさん。大学の先生から、今日は少女に変身した種村安子さん。自称パンダちゃんー岐阜Weの会のハッスル世話人、掛布禮子さん。東京から夜汽車にゴトゴト揺られてきた内村章一郎さん……。あなたにも親しい名の方たちを含め約二十人が笑顔で集まりました。低学年からの家

庭科を実践されてきた野原春江さんも、途中から加わります。

バスには、昨日のうちに到着していた「銀座・月光荘のおじさん」がもう乗り込んでいます。白髪にえんじのベレーと上着がダンディです。岐阜放送アナウンサーの高橋和江さん一家四人がかけつけて、さあ、ワンダーランドめざして出発です。

そもそも、今日の企ては、九十二歳の月光荘のおじさんの悲願「世界の青少年のために日本に芸術村を！」から始まりました。

おじさんは、コバルト・ブルー、バイオレット・ピンクの技法を発明した絵の具商。その色は、世界中の画家の憧れとか。お店の製品は、すべて私のいのちの花弁といい、幾つもの特許と、星の数ほどの友達を持っている人。与謝野晶子も、歌を捧げています。

月光荘に

大空の

月の中より君来しや

ひるも光りぬ 夜も光りぬ

尾藤さんの「なずな学園」の障害を持つ娘さんたちが、ミシンを踏んで、次々に心のこもった作品を送り出している新聞記事に、おじさんは心打たれました。おじさん特許の絵の具箱を入れる袋を注文したことから、尾藤さんとおじさんの友情の花が開いたのです。

尾藤さんの親しい友、近藤宏さんが、伊吹山を仰ぐ春日村に赴任し、その名も美しい「美束」を、おじさんの夢「青少年芸術村」の候補地に推薦しました。今日の探訪は、こうして実現したのです。蓬髪の近藤宏さんは、初対面のどんな人をもすぐ心をうちとけさせてしまう、人なつっこい目をした、すてきな方。

マイクロバスの中の人たちは、ひきずっている現実をすべて捨てました。鈴木さん・近藤さんの巧みな案内に耳傾けながら、清流に添って一時間半、西へ、そして北へといざなわれていきました。

春日村の教育長さんのお宅で、奥さん手づくりの山菜ごはん、山の幸の数々に舌鼓を打ち、はるかな山脈を見はるかした時、私はとつぷりと緑に染め上げられていました。風の話を聞きました。

ここから、道をとって返し南下、古屋へ。近藤さんは「ぼくが感激した樹」を指し、鈴木さんはバスを停めて、車窓から「うの花」を手折ります。「あさやかな緑よ……」夏が来れば想い出す……心うきうき、歌声も弾むうち古屋分校に到着。

ああ、そこで私は、九十五歳の藤原とくさんに会ったのです。黒い髪を小さく結い上げて、薬草とやかんを手にしたとくさんは、身のこなしも軽やかに現れました。白髪の九十二歳と、黒髪の九十五歳がほえみ合いました。

近藤さんは、毎日「古屋だより」を発行し、子どもたちは毎日全村八〇戸に配っています。村と学校の生活はひと続きです。近藤さんは、こうした日々の中で、とくさんを招き、山のくらしの知恵と技術を子どもたちに伝えてもらっています。このことが、毎日小学生新聞のトップを飾りました。子どもたちにとって、村の人たちにとって、もちろんとくさんにとって、何と晴れがましかったことでしょう。古屋は生き生き、燃えてきました。

ピアノも、飛び箱も、テレビも同居する特別教室で、とくさんは、薬草に熱湯を注いで私たちにふるまってくれました。クスリは一切用いず、薬草で病氣も傷もなおしてきたというとくさん。山をめぐり歩いて薬草を探し、「とくの薬草畑」に移植して、大事に育

ています。テレビのニュースで世の動きを知り、頭を使って考え、身体をこまめに動かして働き、くよくよせずにくらすのが長生きの秘訣と言います。近藤さんは「とくメソッド」と名付けて、人間の生き方をとくさんに学び、子どもたちに伝えているのです。

とくさんの瞳はくるくると回り、好奇心が輝いています。小柄なとくさんは、まさにコロボックルでした。そういえば、尾藤さんも姓名を知らない、「月光荘のおじさん」で手紙が届く白髪の人もコロボックルかもしれません。ヤクソウノヒメとエノグノヒコ。いやいや、古屋分校の主も、ボウボウカミノヒコかも。私心というもの

が全くない尾藤さんも、ナズナノヒメか。人間には決して見つけられないというコロボックルたちに会ったということは、私もまた、風に乗って現れたマイクロバスの中でコロボックルに変身したのでしょうか。

山に別れを告げて一時間余り、悲しい事件がこの春相次いで起こった岐阜の街に降り立った時、いつのまにか、私は人間にもどっていったのでした。

権力、暴力が横行する人間の世界。一定の秩序を維持するために法律があります。しかし、一人一人が大切にされず、あきらめ根性・見てくれ根性・ぬけがけ根性に歪み、勝った・負けたで人間の位置が定まる現在、人を見限った法律を嘆くことも多いのです。

コロボックルの山には、権力も暴力もありませんでした。好奇心で目を輝かした小人たちは、相手を補い、相手を助け、相手を生かすことをいつも考えているようでした。あのやさしい世界で、法律はどうなっているのか、尋ねることも忘れてしまっていたのです。



〈We城北の会〉

◆四月二十日は北区立浮間中学校の栄養士、太田卓さんをお迎えし、学校給食について考えることになりました。テーマが具体的に身近な問題だけに、常連の他に地域のお母さんたちや、社会教育・児童福祉関係の方など、総勢15名の多彩な顔ぶりで、いつもとは違って緊張気味にスタート。

太田さんは長年学校給食のセンター化に反対し、一校一栄養士の配置を行政当局に訴え続けて来られた闘士(?)ですが、大変挫え目にやさしく話される方。現場から見た学校給食の実状や、普段教育の場では表面に出ることのない「栄養士」の役割と立場について減多に聞くことの出来ないお話を聞かせて下さり、来年少学校に入る我が子の給食をどうしようと考えていた私には大変参考になりました。

又、多彩な参加者にあわせて質問も多岐に

わたり、やつぱりいろんな人がいるって良いものだけど時間がなくなってしまう、予定の半分も進まず、参加者の希望で次回も是非に太田さんにご足労願って「続く」ということになりました。

それにしても、「疲れた胃には甘い物でなく炭水化物が一番なんです。私にも、前夜つき合いで深夜帰宅し、朝食抜きで教壇に立ち気分が悪くなって倒れた先生に、ふかしたじゃがいもを食べさせてあげたら、じきに元氣になって感謝された経験があるんです」というお話には、全員「エー」と聞き入っていました。今更ながら我々大人はまともな食教育を受けて来なかったことを痛感。次代の子供たちに正しい食の知識を伝える為にも家庭科ガンバラなくちゃ! です。

(蔵合 里子)

〈We江東の会〉

◆五月十一日、新しい方石川さんと尾ヶ谷さんを囲んで、二グループに自然に分かれる形で、お二人の現状報告のようなことが話されました。尾ヶ谷さんは仕事上の悩み、石川さんは結婚についての悩みで、「Weのテーマって何?」と、最初は話す内容についてこだわ

っていましたが、「何でも話していいのよ」ということで、短い時間の中で言いたい部分を残しながら会は終わりました。

最近、「Weの読者を増やすためには、一部のインテリ的な発言の仕方や、無意識のうちにやっている性急で処理的な判断ではなく、ホントにそこら辺にいつばいい普通の女の人の言っていることにもう少し深い興味と関心を持たなければならぬのでは?」と、いう声がチラホラ聞かれます。開かれたWeの会にしようという意図に反して、少しモヤモヤとしたこだわりの滞りが来ているようで、人を理解することのむづかしさを痛感します。

話す時間が足りない点も充分にあるだろうし、Weを読む人はこうあるべきという偏見もあるのでは? と、危惧します。一つの考えに至るためには多くの迷いや思考があったはず、そこにたどり着く過程を忘れてしまうと現在その中にどっぷりつかってアップアップしている人たちの苦しみを理解しがたいのでは、と考えました。色々な問題も可能性も共に孕んでいるWeの会です。

(川鍋由利子)

〈We埼玉の会〉

◆五月十二日、所沢の中嶋さん宅に十名参加。

例によってテーブルは食欲をそそる満艦飾。

加えて狭山茶の新茶を賞味しながら「結婚の風景」をめぐる話は進みました。

「結婚に絶望しない人もいるけれど、それは男に対する絶望が足りないのよ」という口火で始まったので、内心「男もステキ」とか「結婚も捨てたものではない」とか思っている人にはイササカ意見の出しにくい雰囲気でもありました。が、「素敵な夫妻」で通っている村岡さんの「夫の家系は代々、女を大切に

にしていて本当にやさしいです。でも、そのやさしさに負い目もあるんです」につづいて、「普段はベストとは思えない夫でも、子や妻にとって一大事の時には妻の側に立って

くれる人だから続いています」とか、「今のような結婚の形態を選ばない人も多くなっている現在、家族を乗り越えるネットワークとか家族以外の部分での共同体を模索する段階にきているのではないか」とか。市役所の戸籍係の経験者、川崎さんからは、シロートの気付かない法的なお話をうかがったり……。

的を絞った論議にならなかったのは、即、結婚の多様性をも表しているのではないでしょう。か。そして、やはり色々なタイプの生活者が、のびのび、イキイキ生活できる社会が

必要なのだ、というところが話の終着点でした。

今日もそうでしたが、論議が尽くされず、後ろ髪引かれる思いが残ることがあります。「読者会」という会の性格だからでしょうか。We 埼玉の会、次回は七月七日、飯能の自然の中で、パーベキュー大会です。又食い気の方が先行しそうですが、これもまた「楽しからずや」です。

(仲西 香)

〈We 大阪の会〉

◆五月十九日、前回に同じく、豊中の福祉会館にて。参加者十一名。テーマは「育てること、学ぶこと」

新しい顔ぶれとして、東京からカウンセラーの内村さん。小学校教師の桜井さん。家庭科の男女共修問題に興味があつて参加という小暮さん、主婦の方。現在、学校等で行われている管理教育について、一番強く思うことを、それぞれ出し合いました。吉井さん、岩瀬さんからは、自分の子供の登校拒否に直面して、逆に子供から学んだこと、考えたことなどが出され、教え子の登校拒否については浅井さん、山下さんから出されました。内村さんが「登校拒否の表現手段は同じでも、一

人ひとり、その中身は違うんだから、学校に行かせるか否かではなく、その子に障害となっているものにアプローチすることが大切なんだ」と話されました。他に、制服問題、PTA、学歴社会と、受験体制について……等が話し合われました。また少数派の我々が孤立しないよう、仲間を作り、子供たちにかかる圧力だけではなく、自分たち大人にかかる圧力をも取り除いていかなければと話しあつて時間切れ。

いつもながら、若い方々の強さと先輩の方々の強さを越えた限りないやさしさに励まされ、今の私とは、また違った私でやっていけるかな、そんな勇気が湧いてくるのです。素敵な方々との素敵な出会いに感謝しつつ……。次回は七月二十一日、一時から、福祉会館。テーマ「私が私であること」の予定。

(北川 好美)

〈Weの読者会カレンダー〉

7・21 武蔵野 御殿山C・C 一時半

大阪 福祉会館 一時

(89)

WATKINS RANZAN

◆ここ石川県では、只今、高校家庭クラブの県連加盟をめぐる世にもふしぎなできごとがおこっています。というのは、多くの未加盟校・校長が、家庭科の教師に強引に県連加盟を迫っているという現象です。

そもその発端は、二年後に本県が全国大会の開催地として第一候補にあがってきた昨年の秋からのことです。まず家庭科指導主事が校長会の席で「家庭科の教師の中にはやる気の少ない者もいる。全国大会までにはどうしても多くの加盟が必要。どうぞ力添えを」と切々と訴えています。家庭クラブが何たるか知らない校長たちは素直に学校へ帰って、加入をすすめはじめたのです。

女子のみの家庭科を強化する家庭クラブそのものの問題に加え、ばう大なお金と労力を女子生徒に負担させ、ますますエスカレートする全国大会は疑問だ、という動きが家庭科教師の中からポツポツあがりはじめました。

この動きを察知した推進派はますます強烈な根回しのため、校長会の席へ何度も足を運んで、いつものまにか「全国大会は石川県が引き受けた。大会運営の中身をどうするか」まで先走りしている人も出てきました。

この段階ではじめて全国大会を議案に家庭クラブの顧問会議が開かれ（二月下旬）ました。顧問会議というのに指導主事はじめ校長が七人も参加して異様な雰囲気です。否定的な意見が目立つ中で、消極的ながら開催すべきという声が二人ほどあり、この際採決をという提案を議長（校長）がとりあげず、棚上げのまま散会しました。この会議の後、あちこちの学校

で校長が動きはじめたようです。とにかく加盟校を増やそうというわけです。未加盟校の校長は「何をぐずぐずしている。早く加盟を」とせきたて、加盟校の校長は「顧問会議の席上で、全国大会開催に積極的に賛成してほしい」と言います。

私の学校では、私が生徒引率で四日間出張した間に学校長が県の会長校へ加盟を申し込むという珍現象がおきました。近接の高校にこのニュースがその日のうちに流れ、「あの学校のあの先生でさえ加入したのだ。今すぐ加入届を……」と校長が家庭科教師に強力に迫り、一気に県連加盟校を増やしてしまつたのです。メ切日をすでに二〇日以上過ぎていました。出張から帰ったその日に事務局から家庭クラブ代議員会の案内が届き、「これ何？」とびっくりし

て電話をしてはじめて加入の事実を知らされたのです。私の意志ではないと言明して、その足で私は校長室へとんで行きました。「わしは本校の家庭クラブの成人会長だ。あんたに指図はされない！」といきなり一喝。私は「校長先生、これは大切な問題です。そんなにどなり散らされては話ができせん。じっくり話をしましょう」とむしろ冷静になっていました。そのうちに「学校長が顧問に無断で県連加盟したことは悪かった。おわびする。しかし世の中にはつき合いということがある」と。昨年まで無関心の人がなぜ、今年になって急変したのですかという問いに「それは全国大会を本県でするからだ」というのです。これも成人会長の権限で決定するのが当然という口調です。この会話は五月二十七日のものです。その直後に

彼は校長会(?)に出かけてしまいました。

Weの読者の皆様の中で、高校の家庭科の担当の方、あなたの県ではどうなっていますか? 全国大会開催県の先生方、そんなにスムーズに大会を引き受けられたことの裏には何かなかったのですか? 文部省でさえ女子必修を改めるというのに、女子だけ集めてあんな大げさで形式的な全国大会にエネルギーを使い果たすのに、誰も疑問を投げかけなかったのですか? 私はとてもふしぎでたまりません。

推進派(家庭科教師の一部十指導主事十学校長の多く)は、「今まで続いてきた伝統ある全国大会を、石川県でストップさせることはできない。全国の先生方のもの笑いの種になるばかりだ」と必死の動きをしています。

(石川・木下雅子)

◆Weが発行されてから三年が経

過したのでしょうか。新しい家庭科をめざして日々努力を重ねていらっしゃると思います。創刊のころは、ああこんな感じだめであるのかと第三者的にただ眺めておりました。最近新しいのが届くと、一つ一つのテーマが斬新で充実感、読みごたえを味わっています。でも特集については、氏名だけでなく職業名も明記してほしいと思います。(職業から内容を見るのは偏見なのかもしれませんが……)。

昨年は8・9月号の「遊ぶ」について、『保育』の授業に資料として使用させていただきました。子どもの遊びを考えるうえにも、人間にとつての遊びを本質的に把握させたかったのです。この号については私達が読んでも少々理解しにくい難解な部分がありながらも、歯ごたえも感じました。

また今年4月号の「性をどう語る」の「赤ちゃんパンザイと言え

の授業に配布し、卒業するまでにわかってくれればと思いました。

これも作者について明記してあると、私達にしてももっと深く探究できるような気がしました。

なかには平易すぎる文章も見受けられ、私の方がもっと研究・実践しているものもあると感じたりもしました。たとえば『結婚』についてなど。

そんな折、原稿の募集や編集後記をみて、また最近の数多くの雑誌や情報をみて、これからは自ら参画する時代であると思いました。そんなわけで手始めにこの原稿を書いてみました。私のような30代半ばの年代は、女子中心の家庭科教育を受け、そこに思いやり、暖かさ、女性の生き方などを見ながらも、人間として生きることとは自身身強調してきましたし、自身自身職業人として自立し家庭を持つてみますとおのずと新しい家庭科のあり方が浮きぼりとなり、なんとかそれを推進し真の教育にし

なければと思っている昨今です。
(山形・渡部美恵子)

◆Weの夏季フォーラムに実行委員を名乗り出て、家庭科の分科会の責任を持つことになり、荷が重いというのが本音です。でも、がんばって、いろんなことを学びたいという想いが、私を動かしています。私に何ができるのか、不安でもあります。私にありますが、すてきな方々と出会えるという期待もあるのです。教師の参加が多いと思いますが「話し合えた」という満足感、「これだからがんばるぞ」という元気が出る内容にしたい。欲ばりかなあ。問題が山積みしていて、暗い気分が終わらせたくないと思っています。それには、責任者として、何を取り上げたいのか、の線を持っていたいと思うのです。

(大宮・磯部幸江)

■北海道 新学期始まり一カ月でクラス替え—札幌市で二—学級(道新5/18)

小、中学校では、新学期前に児童数を各都道府県教委に報告、学級編成の認可を受けているが、四月は官公庁・民間企業の異動の時期とぶつかるため、国は五月一日付で児童数を調査、その数字に基づき教員定数、教員給与負担などを決めている。そのため転出・転入の数の増減で、年度途中のクラス替えを余儀なくされる学級が出てくる。

「担任教諭が替わったり、友達と別のクラスになるなどとかわいそうだが」。国の規則なのでやむを得ない」と市教委。人口流出入の激しい札幌の教育現場の苦悩を浮き出させている。

(広瀬直子)

■新潟 効果あがる育児休業制度(新潟日報6/6)

育児休業制度を実施してきた優良なモデル企業として、労働省婦人局長から表彰されることになった㈱リケン柏崎工場では、女性の中途退職者はほとんどなくなった。十五年前育児の発足当時は利用者も少なかったが、知識が広がり、核家族化が進むにつれ増加、利用者は二七人に及ぶ。育児が取れるのは、子どもが三歳になるまで。無給で休職期間は勤

続年数に加算されない。「生後一、二年の本当に大変な時だけ休めれば、家庭と仕事は両立できる。他の企業でも実施してくれば女性はいずれほど助かるか」と制度の普及を望む利用者の声。

(山口久子)

■千葉 六年制中学は受験競争を激化(毎日6/15)

県内の学者・文化人らで作っている「あすの教育と文化を考える千葉懇話会」(座長、三輪定宣千葉大教授)は臨教審の「審議経過の概要その2」について「今日の教育の現状や問題点をまったく指摘しておらず、提案している六年制中学などは、受験競争を激化させてしまふ。また単位制高校についても、現在でも多い高校退学者をさらに増やす」との見解をまとめ、近く臨教審委員・教育委員会・校長会などに送付する。

(木田直子)

■東京 婦人行動計画案で「抜本」答申—国立市(毎日5/25)

国連婦人の十年の最終年に当たって、女性差別撤廃を目指す行政のあり方について、市長から諮問を受けて審議していた、国立市婦人行動計画策定委員会(沢登敬子委員長)がこのほど「意識的・無意識的な性差別の発

掘とその解消を目指す人づくり、町づくりをせよ」と、抜本的な差別解消をはかる施策の実施を迫る行動計画案を谷清市長に提出した。その中で、まず企画広報部に婦人問題担当室を置き、メンバー十五人以上の市民委員会を発足させることを求め、早期に実現すべき事業として、全市民対象に婦人問題の学習会開設、休日・夜間も開設できる婦人問題総合相談事業、女の新聞を年六回発行し全戸配布等八項目を挙げている。しかし、市当局は福祉・労働・教育など各分野での大まかな提言を期待していただけに、行政のしりをたたくような内容に困惑気味。

(三橋典子)

■神奈川 「寿町」で語り合おう(朝日5/4)

横浜のドヤ街・寿地区に「ユンターク」(沖縄の言葉で井戸端会議)と名付けた二階家が店開きした。月千円の会費さえ払えば、だれもが使える「たまり場」である。住み込みの管理人となる阿部寛さんは、昨年、修士論文(刑事法専攻)の準備を始めて「浮浪者襲撃事件」に関心を抱いた。以来、ドヤ街を訪ね、深刻な失業問題や、さまざまな形でドヤ街の人たちを援助している人々の存在を知った。今年二月からはドヤに移り住み、日雇い労働

で生活を続けてきたが、「たまり場」の話は、そんな中で知り合った仲間たちから持ちかけられた。問い合わせは阿部さん（〇四五―二六一―〇七四二）へ。（山口里子）

■石川 「国際理解を深める婦人の会」発足（北陸中日5／2）

県下でも、姉妹都市の提携、留学生の交換など、諸外国との交流の機会が増えている中で、婦人が国際的視野を広め、国際理解を深めるための学習や交流の場にしようという狙いで、山本県社会教育会館長らが中心となって呼びかけたところ、四月までに二百七人の賛同者が集まった。同会の趣旨に興味のある県内の婦人ならだれでも入会できる。

（宇野佳子）

■福井 子どもの苦しみに目を／＼「いじめ」を追って（福井4／16～5／18）

三月の前半部につづく「いじめ」の取材レポート後半部。中で印象深いのが「いじめ」を卒論のテーマで取り組んだ福井大教育学部の西田忍さんの四百字詰め約二百六十枚の論文の紹介である。市内の小五・六年生七、百二十九人にアンケート調査をし、細かい分析をしている。その中で西田さんは「いじめ」を中心とした問題行動それだ

けが問題なのではなく、児童・生徒の不安定な心理構造、さらにその背景にあるものが問題」で、その対応について「教師自身が『いじめ』を誘引したり容認したりする態度を示さない」「親の過剰な期待、塾通いなどでたまる一方の児童のストレスをいたずらに増大させることなく、またその解消手段を増やしてやる」「行き過ぎた競争主義を是正する」「よりよい友人関係を助長し、思いやりの心を育てるために、不可欠なけんかを無理に取り上げない」等を挙げている。「いじめ」の主な現場は教室であり、その対応については教師の役割が何ものにもまして大きいと西田さんはいう。果たして現場の先生は、どう受け止めるだろうか。

（山崎京子）

■静岡 「しずおかの女たち」第三集発刊 県内の女性史研究グループが聞きとりで集めた「女性の歴史」の三冊目が出来た。頒布希望は平井和子さん（田方郡修善寺町柏久保二七九）まで。

■愛知 「男にも育児時間を」の訴え退ける（毎日6／5）

名古屋市人事委員会は市立老松小教諭、岡崎勝さんが「男子にも育児時間を認めるべきだ」と求めた措置要求について、「女子の育

児時間は労基法の規定を受けて、産後の母体保護などを目的としたもので、男子にそれを認めるわけにはいかないと棄却する判定を下した。（岡本のり子）（東京田無市では、男性職員にも育児時間を認める条例改正が行われ、四月からすでに実施されている。編集部）
□性にも欠けている「男女平等」（北陸中日3／25）

渥美半島の先端、渥美郡渥美町の産婦人科医、北山郁子さんが、性と性教育についてのエッセー集『女医の診察室から―渥美半島に生きて』をこのほど出版した。「性教育は、純潔教育・性道徳に重点が置かれがち。女子高校生の妊娠を性非行としてのみとらえ、時として処分という形で問題を片付けてしまう。

興味本位の性情報がはんらんする中で性道徳だけで子供たちを説得できません。処分だけで問題は解決しません」と語る。（宇野佳子）
■京都 女子高生が指紋押捺拒否（朝日5／8）

左京区に住む女子高生が、十六歳で義務づけられている初めての指紋押捺を拒否した。十六歳の拒否者は全国ですでに二四人。「怖くて不安もあったが、私がやれば後に続く人がある」と思い、決意した」と話す。（塚崎美和子）

労働省は6月24日、募集・採用、昇進など雇用の様々な場面で企業が女子社員をどう扱っているかを調べた結果を発表した。それによると、新規大卒者を公募、採用した企業のうち2/3は「男子のみ」で、女子に役職への昇進機会がない企業も4割以上。56年の調査に比べ女性にも門戸が広がる傾向はあるのだが。労働省は「均等法の施行でどう変わるか注目したい」と。(6・25)

学術会議の推薦会員決まる 女性は3人
公選制から推薦制に変わって初めての日本学術会議会員(第13期)が確定、「会員推薦管理会」から氏名が発表された。

同会議は7部から構成され、会員は210人。うち女性は1部の一番ヶ瀬康子さん＝社会福祉・社会保障、3部の安川悦子さん＝経済理論、6部の林雅子さん＝家政学。

現在の女性会員は4部の猿橋勝子さん1人。3期9年が任期限度になったため、163人が新顔。大学関係者が9割を占める。(6・20)

◆ 労働 ◆

人材派遣業 労働省が初の実態調査

最近急速に広まっている人材派遣業の実態を初めて調べた調査結果が、5月23日、明らかになった。それによると、プログラマーなどを派遣する情報処理業では、従業員100人未満の中小企業が8割を占め、臨時雇用労働者の約半分は雇用保険、健康保険などを適用されておらず、男子では常用雇用も含めて1日平均10時間以上もの長時間労働をしている人が16%もいるなど、派遣労働者の厳しい労働実態が浮き彫りにされている。しかし、問題となる派遣料や賃金については、業者の抵抗が強く、いわゆるピンハネがあるのかは不明。(5・24)

週休2日が基本 労働省指針

労働省は6月20日、現在2100時間を超えている年間の平均総実労働時間を2000時間まで減らすための「展望と指針」をまとめた。週休2日制の普及を基本とし、年次有給休暇の消化と残業短縮の促進が3本柱。労働省は労働時間短縮の必要性について、「高齢化社会の中のゆとり確保」「自由時間の増大による労働者の自己啓発」と

もに「先進国としてふさわしい労働条件の確保」、さらに「時間短縮による雇用機会の確保」などを挙げ、「生産性向上の成果を労働時間短縮に、積極的に配分することが必要だ」と指摘している。(6・21)

◆ 生活 ◆

植物状態患者は7000人

意識不明のまま、こん睡を続ける「植物状態」患者は、大病院や専門医療機関で確認されただけでも2000人を超え、全国では約7000人にのぼると推定できる調査結果が出た。厚生省の委託研究班がまとめたもの。植物状態患者の全国調査は12年ぶりだが、前回は2000—2500人と推定しており、約3倍にも急増したことになる。高齢化と救命医療の進歩が相まって多数の植物状態患者を生み出していることを示した。こうした人たちにどんな医療・介護体制を提供していくかが大きな問題になりそうだ。(5・22)

電算機時代 日・西独に抵抗感

日本と西独にはコンピューターに抵抗感を持っている人が多い一りに本部を置く民間のアトランチック国際問題研究所と米国のルイス・ハリス社が共同で、日本、米国、英国、フランス、西独、イタリア、スペイン、ノルウェーで実施した世論調査でこんな結果が浮き彫りになった。'83年から続いている同調査で、情報処理システムについて調べたのは初めて。

(5・30)

バラ色ばかりでない高度情報化社会

経済企画庁が日本経済協議会に委託したアンケート調査によると、将来の高度情報化が家庭や社会に与える影響について、利用者の多くは「家族の団らんが減る」「プライバシーが大きな問題となる」など、かなり否定的なイメージを抱いている——こんな結果が明らかになった。この調査は情報化によって生まれる新しいサービスの普及やその影響を予測するためのもので、関心の高い消費者(地方自治体の消費生活相談員)52人とビジネスマン・学者190人が回答した。(同)

アンテナ



◆ 教育 ◆ 臨教審答申

臨時教育審議会は6月26日第一次答申を発表した。「教育の現状」で、教育荒廃の要因、背景を、偏差値偏重・知識偏重の教育画一性の弊害、教育内容の増加・高度化、適切な管理運営が行われない学校、家庭・学校・地域の協力不十分、徳育が成果を上げていない、家庭における教育機能低下などとしている。論議を呼んだ「自由化」は個性重視と後退。よき日本人の強調、国を愛する心、徳育・知育・体育の徹底などが浮上した。具体的提案の6年制中等学校、単位制高校、大学入試に共通テストの導入などは、公聴会でも批判が集中したもの。改革の財政措置は、国家財政全般との関連で、というところに本音が出た。(編集部)

5教科5科目が基本 共通一次

国立大学協会(会長、森亘東大学長)は6月21日、入試改革案を決定した。

改革の骨子は、①共通一次の試験科目数は、現行の5教科7科目から「現代社会」「理科I」の2科目を削り5教科5科目とする②しかし、受験教科の選択は基本的に各大学の決定にゆだねるとし、大学・学部によっては4—2教科も認める③ただし大勢は教科受験が望ましいとする④2次試験は受験機会の複数化に向けて積極的に検討する一など。「各大学の主体的判断の尊重」を前面に打ち出しているのが特徴で科目削減の実施のめどは62年春。(朝日6・21)

小学社会の教科書検定 出版労連調査

教科書編集者らでつくる日本出版労連は来春から全国の小学校で使われる社会科教科書に対する文部省の検定の実態を調べた報告書をまとめ6月22日公表した。

同労連は今回の検定の特徴的傾向として①憲法前文、9条、自衛隊、日本の伝統・文化、日の丸などの記述をめぐって、前回検定ではパスし現在使われている教科書と

同一の記述などにもクレームをつけ、書き加えや削除を求めた侵略戦争や植民地支配の実態、沖縄戦などの記述についても、典拠や児童の発達段階などを理由に記述を弱めることを求め、結果として数字が消えたり、事実があいまいになったり、すりかえられていると指摘。「検定強化といった水準を越え、政府の政策や方針がそのまま検定基準になっている、と見た方がわかりやすい」と批判、分析している。(6・23)

◆ 婦人 ◆

女子差別撤廃条約

女子差別撤廃条約批准をめぐって審議をしている衆院外務委員会で5月31日首相は「ナイロビ会議に間に合うよう条約を早期に承認していただきたい。批准後は条約の精神に合うよう国内体制を改めるのは政府の責任。国籍法、雇用については法改正をしたので、教育(家庭科問題)についても急がせるよう努力したい」と述べた。

(5・31)

参院は6月24日、同条約批准を承認した。25日、批准・承認された同条約の批准書寄託が外務省で行われ、安倍外相からデクエアル国連事務総長に寄託された。

(6・24, 26)

婦人問題で報告書 企画推進会議

国連婦人の10年の最終年を機に、婦人問題企画推進会議(首相の私的諮問機関、座長、藤田たき元津田塾大学長)は、6月17日「婦人問題の将来展望と対策」との報告書をまとめ、首相に提出した。

完全な男女平等社会を実現するためには①育児休業制度の普及と保育所の充実②雇用機会の男女平等化の一層の推進③政策決定機関や国際交流の場への女性の登用——などが重要であると強調している。

(6・18)

女子就職なお厚い壁



《表紙のことば—加藤由美子》

法律だから守らなければいけない。ではなくって、遵守しなければならないものが法律であって欲しい。法律かあ……。でも、ふと気づくと何と多種多様のそれ（法律）に囲まれて生活している私たちであることが。

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉 6月号 共に生きる
 8・9月号 反戦とは、平和とは
 11月号 家事労働を問う
 1月号 新しい男と女のかかわりを
 〈vol.2〉 4月号 教師は、今こそ声を
 6月号 はたらくことをめぐる
 7月号 コミュニケーション
 8・9月号 老いを考える
 10月号 今、教科書問題を問う
 11月号 食べるということ
 12月号 着るということ
 83年増 学校はよみがえり得るか
 1月号 「1984年」
 2・3月号 住むということ
 〈vol.3〉 4月号 PTAって何
 5月号 いまこそ、家庭科を問う
 6月号 地域に生きる
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 10月号 支え合いつつ ひとり立つ
 11月号 “病む”ということ
 12月号 つきあいを考える
 84年増 自分らしさをこそ
 1月号 学び・教えるとは
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol.4〉 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち

◆七月号でお願いしたアンケートのはがきが、このところ毎日届いています。お返事をいただくと、読んで下さっているんだなという実感で、新米の私など、もうそれだけで感激しています。まだまだ間に合います。ひとりでも多くの方の率直なご意見、お待ちしております。

◆六月十四日、文教委員会での江田五月さんの質問を傍聴するため、国会議事堂のある永田町へ。ここには子供がいらない。制服が目につきすぎる。職種も少なそう。小さな建物もない。つまり、弱小がない。当然ですね。でもこの特殊な雰囲気は家庭科に関わり続けるとおっしゃったが、私も細々と歩き続けることで、この圧迫を、少しははね除けられるだろうか。（中野）

◆六月二十二日、総評会館で開催の指紋押捺大量拒否実現集会は四三八名の参加者で冷房も通じない程の熱気。老いも若きも、女も男も。年輩の在日韓国人の方が「押しでも押さなくても同じという思いだったが、若い二世、三世に教えられ、刺激をうけて拒否する。このことは今までに感じたことのない喜び」と。深い怒りを含んだ会場の熱気だけ、なぜか心やさしさを感

◆六月二十三日朝日新聞「座標」は「軽さの時代」でした。軽さの文化は、重さへの反発から生まれた、自由へのあこがれだった。しかし今日の軽さはテレビCMのつくり手によって生まれ、江戸時代の軽さとは少し違うようだ。マラソンの中山竹通選手の軽い走りは、ひたむきな、ハードな練習が生んだもの、軽さのための軽さなどありえない。共感します。♥ひと月お休みし、次号は「いま、熱く女の時代」です。（半田）

新しい家庭科—

Vol. 4 No. 5 1985年7月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい 6月20日現在

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。